

『寅吉は天狗になった』

この作品は1996年10月14日、芦沢孝作さんの奔走により、
『江戸の天狗騒動』のタイトルで読売新聞社出版局から刊
行されました。

芦沢孝作さん、その節はありがとうございました。

高野 澄

kuypachi@jade.plala.or.jp

<http://takano-kiyoshi.com/>

1章「壺のなかに消えた」

不忍池

江戸の不忍池（しのばずのいけ）はもともとは篠輪津池と書いた
そうだ。上野の忍カ岡（播鉢山）の下にあるから不忍池なんだとい
う説もある。「岡は忍ぶ」、「池は忍ばず」の対比はなかなかしゃ
れている。

本郷と上野台にはさまれた、ふるくからの湖沼が干あがって水田
になり、水田に水を引く用水池ができた。それが不忍池のはじまり
だそうだ。

徳川家康の政策顧問をつとめたのが慈眼大師の天海（てんかい）
僧正、かれは比叡山延暦寺を江戸に移したいと思ったにちがいない
が、いくら天海の権威をもってしてもそればかりはかなわぬ、江戸
の上野に新しい寺をぶったて、ときの年号をつけて寛永寺とした。
山号は東叡山、西の比叡山にたいする東の比叡山を意味している。

東叡山寛永寺はできたが、比叡山の琵琶湖に相当するものがない。
なければいけなくてあきらめればいいものを、なまじ権威があるから、
あきらめるのは沽券と威厳にかかわると考えたのだらう、山の下に
ひろがる不忍池を琵琶湖に見立てて中島をつくり、琵琶湖の竹生島
から勧請した弁財天を祀って天台の聖なる池とした。

不忍池の名称がこのときからはじまったものか、どうか、それも

はつきりしないらしいが、用水池のまわりには参詣人をあてこんだ遊興施設がたちならんだ。

参詣人をあてこんで、と書いたが、じつをいえばこれは正しくはない。寛永寺はいわば徳川家だけを檀家とするお寺さんだから、庶民には縁もゆかりもない。「参詣のついでにちょいと遊んでいくか」といえばきこえはいいものの、つまりはじめから遊興気分の庶民がつめかけた。

寛永寺は相手にしてくれないが、不忍池の弁天さまは相手にしてくれる。天海が弁財天を勧請したのは、庶民のそのあたりの気分を考慮したものだったかもしれない。

不忍池の名称がいつごろできたのか、それはともかくとして、出合茶屋ができれば世間の目をはばかる男と女があつまってくる、手のいない女や男が相手をさがしにくる、それをあてにして飯屋ができる、大道芸人や物売りが店をならべるといっわけで、不忍池は不夜城のごとくににぎわった。

肅清という字を絵にかいたような政治家の水野忠邦が登場して幕府政治の緊縮をはじめると(天保の改革)、不忍池のにぎわいはまっさきに槍玉にあがり、火の消えたようにさびしくなった一時期もあるが、天狗小僧寅吉の事件は天保改革より二十年ほどまえの、文政三年(一八二〇)に起こった。

江戸という時代、江戸という都会の文化が爛熟の頂点に達していた時期を「化政期」とか「文化文政期」とか呼ぶ習慣があり、その真っただなかにおこったのが天狗小僧寅吉の事件というわけだ。

それならば、「これは文政三年におこった事件である」と書きはじめればいいではないか、なぜ天海僧正や寛永寺にさかのぼるのかと、不審をおもちになる方もあるはずだ。

不審はもつともながら、ちいさな壺のなかに大の大人がスルスルとはいつて消えてしまうという奇怪きわまるパフォーマンスに気づいたのが寅吉という少年だけで、ほかのひとの注目をあつめなかつたらしい事実を強調したい気分がある。

壺のなかにひとが消える——寅吉少年のほかに気づいたひとはな
いと断言できないのだが、どうやらこれが事実らしい。
なぜなんだろう？

大都會の盛り場——雑踏——雑踏のなかの孤独な環境という条件
をかんがえてみた。そのためにはまず、不忍池のあたりが水田の灌
漑池から弁財天の聖地になり、不夜城のにぎわいを呈するに至った
経過を知っておいてもらうほうがよろしいはずだ。

境稻荷の易者

この物語の主人公は寅吉といって、文化三年（一八〇六）十二月
の晦日、不忍池の北西にあたる池之端七軒町で生まれた。いまの池
之端二丁目にあたる一帯だ。

父は越中屋与惣次郎という商人だそうだが、いくつもの寺にはさ
まれた猫の額ほどの町家区域で、しかも借家人の身分、越中屋の一
家は文字どおりの小商いで暮らしていたと思っただけではない。

寅年の寅の日、寅の時刻に生まれたから寅吉と名がついたあたり
まではことさら変わったこともない人生のはじまりだが、五歳六歳
と歳をかさねるにつれて異常なふるまいを見せるようになる。

予言をするのが大好きで、その予言がなかなか的中する。

屋根のうえにあがって四方をながめていたかとおもうと、「広小
路に火事があるよ、明日だよ」などという、その翌日には果たして
広小路に火事がおこる。

「お父つつあん、あぶないよ、明日は怪我をするんだから」

「子供のくせに、生意気なことを言いやがって……」

翌日、父親が怪我をして帰ってくるから周囲のものは気味わるく
おもう。

「泥棒がはいるよ、今夜だよ」

「そんな物騒なことは言いつこなした」

それでも一応は戸締りに気をつけて家族が寝たあと、はたして泥
棒がはいつて、ごっそりと盗まれる。

寅吉によると、広小路の火事の前の日、屋根のうえから見ていたらモヤモヤと煙りのようなものがあがっているのが見えたから、そう言ったまでのこと。父親の怪我や泥棒のことは前の日、耳のあたりでザワザワいつている声が聞こえたかとおもうと、そのうちに「ドロボウがはいるぞ、お父っつあんが怪我をするぞ」と、はっきりした言葉にきこえたのだそうだ。

七歳のころ、「ふっと、占いの術をおぼえたいという気持ちがおこった」と自分で回想しているが、「ふっと」というのはそのままには信じられない。ちかくに境(まき)稲荷神社があり、神社の前に住んでいる貞意(てい)という占い師の仕事ぶりを毎日のように見ていた。それが寅吉に「おれもあのように占いの術をつかえるようになりたい」という気をおこさせた。

「乾(かん)の卦が出たな。するとこれは……」
「おうおう、これは坤(こん)の卦だ。つまりであるな……」

貞意の占うのを聞いて寅吉は、占いはケンとかコンとかいう動物の毛をあつめて笹竹(ささ)をジャラジャラ、呪文をムニヤムニヤやればいい、そんなにむずかしいものではなさそうだと見当をつけた。

「おじさん、おれにも占い、教えてくれ」

「子供の占い……わるいことはないな。それじゃ、まあ」

てのひらに灯油を溜め、灯心をいれて火をつけ、油がなくなるまで我慢できるかどうかためしてみろ、と貞意は言った。言われたとおり、その晩から父にも母にもかくれて二階にあがり、てのひらに灯油を溜めて火をつけた。熱さに堪えかねない思いもしたが、これを我慢すれば易者になれるんだと齒をくいしばって七日がすぎ、境稲荷の易者に見せたが笑っているばかりで、弟子にしようとも何とも言わない。

なぐさみものにされたらしいと気がついたが、占いを習いたい気は消えない。

五条天神

不忍池の北、レストラン精養軒の北が時鐘堂、その南に神社がふたつ、鳥居をならべている。五条天神と花園稲荷だ。

五条天神は大正十二年（一九二三）の関東大震災のあとでここに移ってきた。それまでは上野（下谷）広小路が終わって寛永寺境内にかかる黒門のあたりにあった。いまでは赤札堂アブアブのあたりだろうと見当をつけて探してみたが、標識板のようなものは見つからなかった。黒門ちかくに移ったのが元禄十年（一六九七）で、もともとは忍カ岡（播鉢山）の頂上に鎮座していたという。寅吉少年が姿を見せたころ、五条天神は黒門ちかくにあったわけだ。

寛永寺の黒門というと彰義隊と官軍の激戦が連想され、彰義隊攻撃のリーダーシップをめぐっての西郷隆盛と大村益次郎の軋轢といったことも思いだされるわけだが、それは黒門から坂道をあがったところの西郷隆盛の銅像にゆずる。

黒門から南、神田の昌平橋までは將軍が寛永寺に参詣するための特別の道で、御成り街道とよばれていた。明暦の江戸大火（振袖火事・一六五七）のあと、延焼防止対策として御成り街道の不忍池に沿った部分が拡張されて広小路とよばれることになった。延焼防止のための広小路は上野のほかに浅草と両国にもあり、あわせて江戸三大広小路。

広小路が終わって寛永寺の境内にかかる位置にあった五条天神、それは聖と俗の境界に立っていたことになる。

さてところで、境稲荷の前に店を張っていた易者にかからかわれ、易者になる夢がはかなく消えたかにおもわれた寅吉だが、夢を捨てたわけではない。夢を捨てない証拠に、文化九年の春のころ、不忍池一面を埋めはじめた蓮の葉にさそわれたかのように五条天神の前に姿をあらわした。

寅吉よ、おおきくなつたね！

貞意という易者にかからかわれた境稲荷の場所がはっきりしないのだが、「茅町にあった境稲荷」という記録がある。七歳の少年の活

動範圍のなかの茅町というと、これもまた不忍池の南の岸、湯島神社にはさまれたところに茅町があるから、境稲荷はこの茅町にあつたと推定される。

池之端七軒町の自宅から茅町の境稲荷、そしていまは黒門ちかくの五条天神へと、寅吉の行動半径はひろがってきた。「おおきくなつたねえ！」と歓迎の辞をかけたい気になってくる。

五条天神社の前ではさまざまの大道芸人が声をはりあげていた。そのなかのひとり、総髪をくるくると巻きむすんだ旅姿の老人は口あたりの差し渡し四寸（一〇センチ）ほどの小壺から丸薬をとりだして売っていた。

寅吉が見ているうちに、今日は店仕舞いとんうわけか、老人は敷物にならべたガラクタの商品を、敷物とともにくるくるとまるめて壺のなかへ納めてしまった。小型の葛籠まで壺のなかに消えたとき、寅吉は声にならぬ驚きの声をあげたにちがいない。

つづいて老人は壺の口に片足をかける。

自分のからだを壺に納めるつもり、ということとはわかるものの、こんなに大きな大人のひとが壺のなかに納まるはずはない——ないはずのことがおこつたように寅吉には見えたのだ。

まず片足から、つぎに別の足が、と見ているうちに、老人のからだの全体がスルスルと壺のなかに消えてしまい、アツとおもうまもなく壺は天高く舞いあがって不忍池の空の向こうに見えなくなった。つぎの日も、またつぎの日も、寅吉は五条天神のまえに姿をあらわし、不思議な老人が壺のなかにはいつて壺もろとも空の彼方へ消えてゆくのを、飽きもせず、呆然と見つめていた。

常陸の国の難台山

「どうだ、おまえも壺のなかにはいりたいんだらう」

幾日かして、寅吉の心を見透かしたように、不思議な老人が言葉をかけてきた。

あわてて首を横に振つたのは拒絶の気持ちをあらわしたつもりだ

が、老人には通じなかったらしい。

「壺にはいらなければ、占いの術をまなぶことはできやしない」

横の小店から駄菓子を買って寅吉に手渡しながら、老人はかさねていう。寅吉はまだ、占いの術を習いたいとも習いたくないともいったおぼえはないのに、老人のほうでは、寅吉は占いを習いたいから毎日、飽きもしないで見にきているものときめてかかっている。

「うん。おれは占いを習いたい」

寅吉が答えたのと、からだがフワリと浮いて壺のなかに吸いこまれたのとほとんど同時だった。

まだ日の暮れないうちに、老人と寅吉は山の頂上に着いていた。

この山が常陸の国の難台山(なんたいざん)だと寅吉が知るのは、もうすこし後になってからのはずだ。

茨城県(常陸国)西茨城郡岩間町の上郷にあるのが難台山で、標高は五五三メートル、男体山の別名もあり、屏風ヶ岩や船玉石などの奇岩で知られている。

中腹の観音平に東西八十メートル、南北七十メートルの難台山城(男体山城)の跡地があつて、南北朝の抗争のときに南朝方の小田五郎藤綱や小山若犬丸たちが五百の兵をひきいて籠城し、北朝方の上杉朝宗と戦ったところだ。

難台山のちかくには愛宕山があり、吾国山とあわせてハイキング・コースとして親しまれている。

屏風ヶ岩には獅子カ鼻岩の別名もあつたらしい。老人はこの岩を寅吉の修行の場として易者になる訓練をはじめたが、数えて七歳になつたばかりの寅吉少年としては、易者になれる嬉しさよりは父恋し母なつかしの思いが先に立つ。

「我慢できないようだな、仕方はない、連れて帰ってやるが、それにはそれで約束してもらわなければ……」

このことを一言でも他人にいわない、それが約束できるなら連れて帰ってやると老人はいった。帰りたい一心の寅吉がこっくりとうなずくと、こんどは壺ではなくて老人の背におぶさつて空に舞いあ

がり、気がつけば池之端七軒町の家に着いていた。

「天神さまのところへ、毎日くるんだぞ」

いいのこして老人は姿を消した。

さてそれから五条天神と難台山のあいだを往復する毎日になる。老人は五条天神のまえで薬を売り、昼過ぎになると寅吉を背負って難台山に飛んでゆき、夕方になると七軒町に連れて帰る。

ふたり手をつないで壺のなかにはいり、そのまま空を飛んで難台山に飛んでゆかなかったのはどういう訳があつてのことか、いささか理解に苦しむところがないわけではない。寅吉と老人をつなぐ役割を果たした、もはや壺の出番は終わったということなのだろう。

難台山では占いの術の伝授はない。

老人と寅吉はあつちこつちの山をめぐって草木の名を覚え、小川の魚を捕つてあそび、花を折り鳥をつかまえる。老人は寅吉との関係を変え、促成の易者修行よりは長くつづく付き合いを維持しようとしたらしい。

「わいわい天王」

一日もかかさずに常陸の難台山へ行っていたわけではなかるうが、十歳にもならない男の子が毎日のように姿を消していることについて、池之端七軒町の越中屋、つまり寅吉の親たちは不審におもわなかったのか？

それについては寅吉のほうがかい、「薬屋の子といっしょ」といっては家を出ることにしていた。この薬屋は広小路の江口（または井口）という薬屋だったと記録されている。

池之端七軒町と広小路は、遠いとはいえないにしても隣町の距離ではない。江口薬屋のほうでは、七軒町の越中屋の次男坊が自分の倅の名を口実にして毎日のように出歩いて——飛びあるいて——いるとは気づかなかつたのだ。

寅吉の計算というか智恵というか、そういうものがあらわれている。親に心配をかけるのはよろしくないと心得ているが、といって

薬売りの老人の背中に背負われて難台山に飛んでゆき、山あそびに時をすごす愉快を放棄する気にはなれない、ならばウソをいっても、という計算がはたらいている。

越中屋には寅吉の兄がいて親の稼業を手伝い、稼業のあわただしさに寅吉の不在に気づかなかつたのだらう——これは、もうしばらく後になって寅吉の身边にあらわれる学者たちが推測しているところだ。

あるとき、七軒町の小路に不思議なものがあらわれた。高い鼻の赤いお面——つまり天狗のお面——をかぶって袴(きんぎょ)に太刀を差し、赤い紙に「天王」の二文字を書いたチラシを子供にくばりながら、おもしろおかしい文句を囃(は)してあるいている。

♪天王さまは囃すがお好き

囃せや子供 わいわいと囃せ

天王さまは喧嘩がお嫌い

喧嘩をするなよ 仲良くあそべ

子供がおもしろがってわいわいと付いてゆくのにまじって、寅吉も付いていった。七軒町から遠くなるのにも知らず、気づいたときには本郷の先の妙義坂まで来ていた。本郷の先の妙義坂というと、いまは北区の飛鳥山の坂道だから、子供の足で歩くには相当の距離になる。

いつしよに付いてきた子供はひとりふたりと姿を消し、寅吉ひとりになったのを見定めたように、そのひとは天狗お面をはずして顔を見せた。

「ああつ、お師匠さん！」

「ははは、わからなかつたのか。さあ、いつしよに帰ろうかな」

老人と寅吉は手をつないで七軒町に帰っていった。

壺にもはいらず、背負われるでもなく、ふたりがいつしよに町中を歩くのははじめての経験のはずだが、それが何を意味するのか、何にも意味していないのか、いまのところはわからないと言っておく。

不忍池の茅町ちかく——湯島天神のちかくといつてもおなじことだが——の榊原式部大夫の屋敷の門のところにくると、寅吉の父親の姿が見えた。寅吉を迎えに出ているのはあきらかだが、この日だけ、なぜ父が息子の帰りの遅いのを心配して迎えに出ているのか、わからない。

——寅吉ちゃんは天狗の面のひとといっしょに遠くのほうへ歩いていっちゃったよ！

遊び仲間の、こんな告げ口を聞いて気になったものだろうか。

「あ、お父つあんが待っている」

「うんうん、あれがお前のお父つあなか。いいか、何もいうんじゃないぞ」

口止めしておいて、老人は越中屋惣次郎にちかづき、

「おやおや、お父つあんが心配なさってお出迎えですか。いや、なにね、この子が道に迷っていたから、こうやってお連れしましたよ」

父親が礼をいい、ついでにと老人の名をたずねると「町の××兵衛」と答えたようだ。つぎの日、あらためて礼を言おうと父親が町をたずねたが、そういう名のひとは見つからなかった。

山王祭

通称は山王様、日枝神社の由来と山王祭について触れておく。

江戸城をつくったのは武蔵の川越城主、太田道灌だ。「江戸の母川越」という言い方はこの事情をさしている。

道灌は江戸城をつくっただけでなく、神社や寺院も川越からうつした。

川越城本丸から勧請してきた三芳野神社は家康が平河口に移転したので平河天神とよばれるようになり、まもなく町ぐるみで現在のところ、つまり千代田区の平河町に移ってきた。

川越の仙波の星野山無量寺から勧請されたのが山王様こと日枝神社で、家康が江戸城内の紅葉山に移した。二代の秀忠が三宅坂の上

にうつし、明暦の大火で炎上したあと現在地に再建された。

太田道灌が川越から移した平河天神と日枝神社にたいする手厚い信仰は徳川家にうけつがれた。とくに日枝神社は家康の産土神(うぶぢ)

(ま)に指定されて、武蔵国の総社の神田明神とともに、その祭礼は「天下祭」といわれ、隔年の交代で盛大におこなわれたものだ。

山王祭は六月十五日、神田祭は九月十五日ときまっていた。

「昔の錦絵を見ると、猿の舞だとか、牝猿だとか、素戔嗚尊(すさのおの)だとか、日本武尊(やまとのひこ)だとかいう金ピカの衣装を着た大きな人形が屋台車の上に立ち、その下に幕を張って、横町の師匠その他囃子連が移動楽屋を形作る。

さあ、お祭が近づくと江戸っ子、仕事も何も手につかず、女房も娘も叩き売って人形の着物の費用を出し合い、七日や十日は仕事を休んで浮かれ通す。ひとつの人形に千両二千両を投じて悔いなかったものだ」(矢田挿雲『江戸から東京へ』)

山王祭はふつうの江戸っ子が主役の祭だ。ちいさな壺のなかへスルスルツと身を入れてしまう術をもつ不思議な老人、それほどのひとがわざわざ天狗の面をかぶって素性をかくし、「山王」と書いたチラシを配るふうをよそおってまで寅吉を連れ出す舞台としてはふさわしくない。

不思議な老人は、どういう狙いがあったて山王祭でにぎわう下町にあらわれたのだろうか？

わからない。

わからないけれども、何もなければいけないから、いまはただ、「いずれわかるはず」ということにして先をいそぐ。

易者になるつもりなのに……

池之端七軒町から常陸の難台山への往復をかさねるうち、「今の師に付くことになった」と寅吉はいう。五条天神の前で薬を売っていた不思議な老人と、その後で寅吉の師となるひとは別人らしい。

寅吉が「今の師」に配属されてから修行の舞台は岩間山に変わり、

難台山とは縁が切れた。岩間山がどこにあったのか、はつきりしない。あとになってからの寅吉の説明によると、笠間のちかくの佐白山らしい。竜神山の呼び名もあったと寅吉はいい、「今の師」はここで降雨祈願をやっていたようだ。

（この物語の材料になっているのは平田篤胤（アツタネ）の『仙境異聞』（せいかいじゆんぶん）と、篤胤の弟子の竹内孫市健男の『神童憑談略記』（しんどうひょうだんりゃくき）の二点だ。『神童憑談略記』の前書きにはつぎのような主旨が書いてある——師の『仙境異聞』は脱稿しているが、世間には公表されていない。さいわい自分は師の原稿を読むのを許可され、寅吉の言動に我が目と耳で触れた知識もあるので、それをとりまぜておよそのところを記述しておくことにする。くわしくは師の『仙境異聞』そのものを読んでいただきたい、云々）

師に付いたということは、いよいよ易者になる修行がはじまったわけだが、どうやらこのあたりで、寅吉と先方——いまは先方と言っておくのがいいようだ——のあいだの考え方の相違というか、寅吉の思い違いというか、それがあきらかになつたようでもある。

師に付いて最初にやらされたのは百日間の断食行だから、寅吉はおどろき、閉口してしまつたらしい。笹竹をジャラジャラ、呪文をムニヤムニヤの易者と百日間もの断食とがむすびついているように思えなかつたわけでもあるだろう。

「おれは占いの術を習いたい、占いを教えてくれよ」

「占いを教えるのは容易なことだが、そこにはいろいろと訳があつて……」

何がなんでも占いは教えないというのではないが、できれば教えたくはない、といった感じの応対だ。

まあまあ、占いも悪くはないが、これはこれで面白くないわけでもないな、といった調子で寅吉は「いろいろの武術、書法、神道関係の知識、祈祷呪禁のやりかた、符字の書き方、幣につかう紙の切り方、医薬や武器の製法、占い以外のさまざまの卜法、仏教諸派の

秘事や経文そのほか」を教えこまれた。池之端七軒町と難台山のあいだを往復する毎日、送迎は例の壺の老人の役目だった。壺の老人は地位が低いらしい。

十一歳になるまでは池之端と難台山のあいだを往復して修行したが、十二、十三歳の二年間は難台山には行かず、ときどき師がやってきているいと教授してくれた。

親にも兄にも知られずの教授であつたらしいが、場所や方法はわからない。壺の老人が山王の祭りにまぎれて寅吉を妙義坂までつれだしたのを見ると、やはり祭りかなにかの雑踏を利用してふたりは接触したものだろうか。

お寺の小僧になる

十一歳の年の八月に父の惣次郎が病気になつたが、師は寅吉に「日蓮宗や禅宗の様子を知りたい、おまえは寺の小僧になれ」と指示してきた。

父母に何と云つて許可を得ようかと思案の様子寅吉に、師は口実まで伝授した——「わたしは病身ですから兄さまのように商売の手伝いはできません。寺で修行するしかないと思ひますが……」
病の床の父は、なんとなく尋常な子供ではない寅吉の行く末が気にかかつているにちがいない、寺で修行して坊さんになるといへば即座に許してくれるはず——こういう目算であつたようだ。

師の目算は的中、もともと仏教を信じる心の篤い父母は寅吉の寺入りを許してくれた。池之端の正慶寺をはじめとして、覚性寺、宗源寺へと寅吉の寺めぐりの時期がはじまる。

七軒町は寺と寺にはさまれた町家の区域、前後左右の寺の鐘の音と読経の声につつまれてそだった寅吉だが、寅吉はいわゆる「門前の小僧」にはならず「天狗小僧」になつた。いまは岩間山の師の指示で小僧の生活をはじめめるが、これも長続きするものでないのは予想のとおり。

ついでに云つておくことだが、寅吉の生涯のほとんどは——常陸

の難台山を別にすれば——不忍池のまわりで送られる。したがってこの物語の舞台も不忍池の周辺に限定される。生涯のほとんどを不忍池のまわりで送った江戸っ子はめずらしくないはずだが、これまで書いてきたことのほかにもいくつもの偶然がかさなり、寅吉を池のまわりに縛りつけるのだ。

それこそ弁天さまのお恵みである、とでもいえば恰好はよくなるわけだが、寅吉本人が弁天さまには何の興味もしめしていないようだから、話にならない。

さて、寅吉が正慶寺から覚性寺に住み替えた文化十五年の二月に父は亡くなり、実家越中屋では寅吉の兄の庄吉が母をたすけて商売をやり、妹をそだてることになった。寅吉は商売にも家事にも役にたたない、家にいてもいなくてもいい、いないほうがありがたいだと、ひとにはいえない事情がふくらんできた。

文化十五年は四月に改元されて文政元年となり、イギリス船の近海出没の噂がさかんになってくるが、不忍池のまわりではどういふほどのこともない。

怪しい小坊主

寅吉が岩間山でやっている修行は修験道の修行だが、そのことを寅吉がどれくらい鮮明に認識していたのか、はっきりしたところはいえない。

はっきりしたところはいえないけれども、これが仏教敵視の姿勢をかためる修行なのは理解していたはずだ。仏教敵視の姿勢をかためるために、出家修行をよそおって池之端の寺院に潜伏させられている——それくらいは認識していたにちがいない。

つまり十三歳前後の時期を寅吉は、おもてむきは出家修行の小坊主、そのじつは修験修行の初級者として生きていた。

この時期の寅吉は、「このままでは易者にはなれそうもないな」といった思いを強めていたかもしれない。しかし、それがすぐに修行放棄につながらなかったのは特殊な能力を自覚する体験の結果だ。

こんなことがあった。

覚性寺にいたとき、あるひとがやってきて住職に「大切なものを見失った」と訴え、なげくのを耳にした。そのとき寅吉は、耳元でだれかがささやくのを聞いた気がした——「それは盗まれたのだ、広徳寺の前の井戸のそばに隠してある」

「盗んだひとが広徳寺の井戸のそばに隠してていますよ！」

「まさか？」

疑いながらも広徳寺の井戸のまわりをさがしたところ、失われたものが隠してあった。

これがかっかけて、失せ物さがしや病氣祈祷をたのまれることが多くなり、十のうち八か九は言い当てるようになった。

富籤(とみくし)の当たり番号を予言してくれとたのまれ、二十三件のうち十七件を的中させた。はずれた六件のうち五件は番号を言い当てたのだが、籤を買いにゆくのが遅れて他人の手にはいつてしまった。したがって番号をはずしたのは一件だけ、驚異的中率だ。

当たり籤を予想してくれ、なくしものを探してくれ——千客万来のさわぎに閉口した覚性寺の住職は寅吉を追い出すことにした。丁寧な口調ながらも寅吉につたえられたのは、つぎのような理由だった。

「寅吉はまだ子供だ、自分であんなことができるはずはない。住職が裏で糸を引いているにちがいない……こういう評判を立てられては困るから」

一月ほどは七軒町の自宅ですずかにしていたが、岩間山の師の指示で、こんどは日蓮宗身延派の宗源寺の小僧になった。おなじ池之端の正慶寺のちかくに宗源寺があった、たぶんこの寺だろう。

それまで寅吉は、寺の小僧とはいいいながら髪を剃らなかつた。こんどの宗源寺はしきたりがやかましいところだったから、髪を剃ってツルツル頭の本物の小僧の姿になった。

宗源寺でツルツル頭の小僧になってはたらいっていると、文政二年（一八一九）五月二五日、とつぜん岩間山の師があらわれ——ひそかに連絡をつけてきたのだろうか——いっしょに旅で出よという。母には「伊勢参りにゆきます」と偽って、まず岩間山へ、それから東海道を通って伊勢と西国をめくり、三カ月目にいったん池之端にもどった。

九月になってまた師といっしょに旅に出たが、平田篤胤の記事のとおりで紹介すれば「遠き諸越の国々」まで行った。「諸越」は「シヨエツ」ではなくて「モロコシ」と読むらしいから、つまり大陸まで連れてゆかれたわけだ。

日本にもどってから東北の国々をまわり、十一月のはじめに妙義山の奥の小西の山中で迷子になった。九月に日本を出て大陸にわたり、おそくも十月のなかごろには日本にもどったことになる。

そんな短期のうちには大陸に往復するのは無理ではないかとう不審を予想したのか、寅吉は「空を飛んでいった」と説明している。『仙境異聞』の原文は「遠き諸越の国々までも翔（あが）りゆき」である。「翔りゆき」なら、みじかい時間の大陸往復も不可能ではない。寅吉を妙義山の奥に放置して行方をくらましてしまった師が寅吉のために何を意図していたのか、いまのところ推測がつかない。

村のひとの世話になって二、三日すると、ひとりの老僧があらわれた。

「江戸の者で、名は寅吉。神道をまなぶために諸国を回遊しているうち、道に迷ってしまったのです」

「それは殊勝なことじゃな。わたしの知人に神道にくわしいものがある、それへ案内しよう」

老僧に連れてゆかれたのは筑波神社の社家をつとめる白石丈之進の家だった。

白石家は蛭子流という流儀の神道をおさめていて、寅吉の見るころ、京都に本拠をおく吉田家の神道よりもなおいっそう仏教の色彩の濃厚な神道であって、「面白くはない」というのが寅吉の印象

だった。ただしこれは寅吉の第一印象ではなく、しばらくの時間が経過して、神道というものの理解が進んでからの回想談と見るべきものだろう。

寅吉少年は、いま、どのような世界に生きているのか？

寅吉少年の境遇は文政三年（一八二〇）の春から急変する。無名の少年が一躍して、江戸の学者や好事家の争奪的になるのだ。

境遇一変のきっかけは、山崎美成（よしなり）が寅吉の言動のそここに何事か触発されるものを感じ、上野町の下田家に居候していた寅吉をたずねたことだ。。

下谷広小路を南にすすむと上野黒門町にぶつつかり、それから右へ、また左にまがると御成街道の本通りになる。上野黒門町にぶつつかって右ではなく、反対の左にまがった裏側にあるのが上野町、下田家はこの上野町にあった。上野町よりもさらに南、小笠原伊予守屋敷の東の裏手にあった下谷長者町に住んでいたのが山崎美成だ。

美成は長崎屋という薬種商の主人で、上野町の下田家とは商売仲間の付き合いだったろう。商売そっこのけで学問にのめりこみ、しまいには零落してしまう。つまり美成は零落の過程で寅吉少年を「発見」したわけで、「逆もまた真なり」の原則をあてはめれば、寅吉との接触が長崎屋零落をいっそう確実なものにしたといえなくもない。

山崎美成は町人学者の典型。『新潮日本人名辞典』では「雑学者」といった簡単明瞭な表現をしている。「雑学とはどういう学問であるのか？」のテーマを追求してゆくときりがなから、いまはただ「山崎美成は雑学者といわれるタイプの町人学者であった」としておく。

美成がまず「寅吉という子供は面白いぞ」といいだし、それが平田篤胤（あつな）という学者に引きつがれ——美成にすれば「ひきつがれた、なんて綺麗なことはいってほしくない。わたしは寅吉を篤胤に奪われたのだ」という気持ちだろうが——下谷の人気者になっ

てゆく。

上野町の下田家で山崎美成に「発見」されるまでの、いわば人生の第一期の寅吉は、どういう世界に住んでいたのだろうか？

不思議なことにあこがれ、不思議なことの出来る人間になりたいと思いつめる少年——寅吉は自分という存在をこのようなものとして認識した。

寅吉が最初に目にした不思議なこと、それは占いだった。人間の目には見えない次元のことを見通す術、それが寅吉の目と心に潜入してきて、忘れられなくなった。

格別の少年だったわけではない。ごくごく普通、多数派の少年だった。

池之端の境稻荷のまえで占いの店をひらいていた貞意という易者が、寅吉の夢を打ち砕いた。こういうかたちで夢を打ち砕かれるのも普通の少年の成長過程なのだが、寅吉の場合は、ここから先が普通ではなくなる。

寅吉は、自分の夢がこういうかたちで打ち砕かれるのに満足しなかった。貞意という易者には自分の夢を理解し、くみあげてそでてるだけの能力がない、いわばダメな大人である、といったように考えた。

夢を抱いたまま、自分の夢を見つづける舞台を境稻荷から五条天神へと移し、そこで壺の老人の妙術に出会った。

境稻荷から五条天神へと舞台をうつしたところに寅吉の積極性がある。夢にひきずられてウロウロするだけの、消極一辺倒の少年ではない。自分の意志と計画実行によって壺の老人との出会いを果たしたという、たしかな実感がある。

わずかな時間のうちにモロコシ——中国大陆への往復をやったという寅吉の証言について、そんな馬鹿な話があるはずはないと否定するのは容易だ。

しかし、岩間山の師にあっちこっちと連れてまわられ、「ここがモロコシなんだよ」といわれれば、「なるほど遠くまで来たからに

は、ここが話に聞いていたモロコシにちがいはあるまい」と感動とともに納得した。寅吉の、この感動と納得にウソがあると論破するのは、だれにも不可能だ。

(1 章 ・ 終)

2章「世間には天狗といわせておけ」

岩間山にもどる寅吉

筑波神社の神職、白石丈之進にひろわれ、われながら面白いとは思われない蛭子流の神道をならいはじめた寅吉。

面白くはないと思いつつも丈之進の保護を拒否しなかったのは、丈之進の神道になんとはない神秘的なところを見つけたからだろうし、丈之進は寅吉に平馬という立派な名前をつけてくれたから、大切にされている思いもある。

丈之進から離れても、どこへ行くあてもなかった。面白くはないが、このまま丈之進の弟子として修行をつづけ、いずれは神職になるのもわるくはないな、などと考えてていたのかもしれない。

年が変わり、岩間山で共に修行した仲間の古呂明（ころあき）が筑波にやってきて、お師匠さんのところへ連れて行ってやるぞと嬉しい誘い。

古呂明は、どういうわけで寅吉の居場所を知ったのだろう。岩間山の師匠が「寅吉は筑波の奥の小西のあたりで迷ってしまった」とでも言ったのだろうが、それならそれで、なぜもつとはやく迎えにこなかったのか、そのあたりの事情もわからないが、寅吉自身は古呂明が迎えに来てくれたのがなにより嬉しかったとみえ、いそいそと古呂明にしたがって師匠のところへ行くことにした。

「お師匠さまのところへ帰るのか」

丈之進は引き留めることもなく、「ひとり旅では宿を貸してもらえないから」といって通行手形を書いてくれた。古呂明はしかるべき筋から通行手形を発行してもらっているはずだが、それには寅吉が同行するとは書かれていない、そこを丈之進は「ひとり旅では宿に困るときがある」と気づかせてくれたわけだ。

「この白石平馬は、わたくしの俵、身元に不審はありません」

「神前で国家安全、万民繁栄を祈願させるために近国へ派遣するものです」

「御神職の方々お目に留まったならば、わたくし同様にあつかって
いただきたい」

「平馬が困っておりましたなら、どうか一夜の宿をお貸しくだされ
たし」

宛て名は「御神職衆中・村々御役人衆中」、つまりすべての神社
と村役にあててあり、発行責任者の丈之進の肩書は「筑波六所社人」
として、判が押してある。

筑波山神社は幕府の崇敬のあついで大権現社だ。祭神はイザナギ、
イザナミの男女二神で、二神と撰社四社をあわせて祀っているのが
六所神社だ。その六所神社が発行する手形の威力は絶大、うっかり
疑惑の目をむけようものなら幕府からきびしく叱責されるおそれ
がある。

余談ではあるが、決して無駄にはならない余談をひとつ。川田義
雄（晴久）という芸人がコミックバンド「あきれたぼういず」を結
成し、テーマソング「地球のうえに朝がくる」で一世を風靡したの
は昭和十二年（一九三七）だった。「地球のうえに朝がくる、その
裏側は夜だろう」にはじまるテーマソングが中程にかかると、東京
の素晴らしさを強調する文句が出てくる。

「富士と筑波の間をながれる隅田川、東叡山の鐘の音に……」

日本の首都の東京、だから素晴らしいと言うだけでは満足できな
い気があるから、日本一の富士山をもってきた。しかし東京は富士
山の麓にあるとはとてもいえないから、関東の北にそびえる筑波山
をもってきて、その中間の隅田川の河口にひらけた東京の町、東叡
山寛永寺の鐘の音で明け暮れる東京の町、どうだ、素晴らしいだろ
うと雰囲気をもりあげた。

標高を競えば筑波は富士の敵ではないが、とにかくも筑波は関東
一帯を睥睨している。徳川幕府の手厚い保護を受けてきた点では富
士山なんか足元にもおよばないと強調することではじめて筑波は富
士と肩をならべることが可能になってくる。

まぼろしに見えた母と兄

古呂明といっしょに岩間山にもどり、まえのような修行をした。

修行はおなじだが、寅吉の心境には変化があった。

——父が亡くなったあと、母はどうして暮らしているだろう、兄の商売はうまくいっているのだろうか、そして妹は？

ふさぎこむ日が多くなったのを師が見咎めた。

「おっ母さんのことが気がかりなようだな。案じることはないのだ、ほーら、見えるだろう……」

師の言うのがおわらぬうちに、寅吉の目のまえにボヤーンとしたものが浮かんで来て、母と兄が無事に暮らしている様子がありありと見えた。

「おっ母さん！」

声をかけ、走りようとしたそのとき、耳元で師の声が聞こえたのに驚いてふりむくと師が目のまえに立っていた。

そこで師は寅吉に「しばらく七軒町の家にもどりなさい」といったと『仙境異聞』には書いてあるが、そのとき、その場でいったわけではないだろう。

寅吉が池之端七軒町の母と兄のことをおもって鬱屈した気分である——それに師が気づく——心配しないでいいんだよと諭すが効き目はない——師が七軒町の様子をまぼろしで見せてやる——寅吉はまぼろしの七軒町を見たことが確認される、という経過が短時間で済むはずはない。とくに、寅吉がまぼろしの七軒町を見たことが確認されてから、「七軒町の家にもどりなさい」の許可が出るまでには二日や三日は要したはずだ。

これは寅吉にたいする師のテストだったにちがいない。常陸の筑波山のちかくの岩間山から、江戸の池之端七軒町の様子をまぼろしで見せてやる。見せてやるのは容易な技だろうが、相手の寅吉のほうか、そのとおりのイメージをうけとる能力を獲得しているかどうか、カメラのレンズはしっかりしているがフィルムはどうだろうかといった関係のテストだったはずだ。

まぼろしの七軒町の様子を見せられた寅吉は「おつ母さん！」と叫んで、その方へ走りようとした。つまり一応はテストに合格したが、そこですぐに「もどってよろしい」とはならないはずだ。岩間山から下谷にもどすについては、守るべきさまさまの掟を言い含め、はたして守れるかどうかを判定しなければならぬ。

「世間には『わたしは岩間山の天狗です』といいなさい」

師は孤高の存在ではなく、数人のグループのなかのひとりであったようだから、仲間のうちの協議の時間も必要だったろう。協議があり、寅吉の師がテストの様子を答申した結果、はじめてOKが出たようだ。

いいよいよ池之端にもどるとき、師は寅吉にたいしていくつかの掟を言い含めた。

「邪道に踏みこまないようにせよ」——これが原則。

「われわれは仏教は好まないが、だからといって世間のひとに『仏教なんか迷信ですよ』などと説教したり、論争をふっかけてはならない」——世間の目を警戒せよということでもあり、また仏教その他の宗教宗派を否定するのがわれわれの仕事ではないということの強調でもある。

「おまえを陰ながら保護するから、これまで修行したことのうちで世のため、ひとのためになることは実践すべし」——寅吉の修行はまだまだ半ばではあるが、実践者としての能力がゼロではないのだよと励ましている。

「相手の人格をたしかめず、山で見聞したことをいって聞かせてはならない」

「わたし——師自身のこと——の本名を世間に知らせるな。世間で言うのに合わせて、『おれの師匠は天狗だ』と言っておけばよろしい。『岩間山に住む十三天狗のひとり、名は杉山組正(なまき)』ということにしておくように。同輩の古呂明の本名もあかさず、名をいわねばならないときには白石丈之進としておくように」

「お前の名も、わたしが授けてやった嘉津間(きつま)ではなく、白石平馬と名乗っておきなさい。平馬の花押(まげーけん)をしっかりと習っておかなければいかんぞ」——そういつて師は「平馬」の花押の書き方をおしえてくれた。

池之端にもどった寅吉を、世間のひとはあれこれと噂し、不審の目をむけ、とどのつまりに言うにきまつている——あれは天狗らしいぞ、と。

そのとき、「天狗だなんて、とんでもない！」などと否定するなよと師の杉山組正は寅吉に命じた。「おれは天狗だ」と進んで名乗る必要はないが、名乗らざるをえない場面では「そうなんです。岩間山の十三天狗のひとりの杉山組正、それがじつはおいらの師匠なんだよ」といつて世間に合わせておけばいいのだよ、とも教えた。ふたつのことが、はつきりしてきた。

まずひとつは、杉山組正——本名ではないそうだが——などの自称「岩間山の天狗」と筑波山神社のあいだには黙契ともいうべき関係があるということ。

杉山組正のグループの手で筑波山の奥に捨てられた者は、何日かすると筑波山神社の六所神社の手形をわたされて表の世界に登場してゆくシステムができあがっていた。これはあくまで杉山組正の言い分が寅吉の口を通して表に出できたものだが、もし、何らかの公的な権威筋から咎められた場合でも、「捨てられて迷っていたものを拾いあげ、神道布教の実践者としたまでのこと」と言い逃れる工夫のようにおもわれる。寅吉が、どこから、どういうルートで六所神社にあらわれたのか、それまでの人生の航跡は消されてしまう仕掛けになっている。

もうひとつは、天狗というものの世間への登場の仕方について、説得力のある説明が見られるということ。

天狗が登場するのではなくて、世間が天狗を登場させるシステムができあがっている。

世間が「天狗は存在するらしいぞ」とおもっているところへ挙動

不審の者があらわれると、世間はたちまち「不審なやつだ、もしかすると天狗ではないのか？」と疑惑の視線をむけてくる。そこで「じつはわたしは天狗なのです」と認めてしまふ。するとたちまち天狗登場の事態がもちあがる。

世間は「この世には天狗がいる……らしいぞ」とおもっているから、そこへ「あいつは、どうもおかしいぞ？」とおもわせるスタイルを装って登場すれば、世間のほうが勝手に「ああ、天狗が来た！」とおおさわぎし、自分からいわなくても天狗としてあつかってくれる——そういうことを杉山組正たちは心得ている。

「世界は日の出を待っている」というタイトルのジャズのスタンダード・ナンバーがある。この気分を応用すると「世間は天狗を待っている」のだ。

仏教嫌いを標榜して母や兄と対立

寅吉、古呂明、杉山組正、もうひとり修行仲間の左司間(さしま)と都合四人で岩間山から大宝村の八幡神社まで行き、師は八幡神社に奉納されている神剣の一本をぬきだして寅吉にあたえた。

奉納された神剣をぬきだして弟子にあたえるのは大変な罪になりかねないが、八幡の神に祈りをささげてからぬきとったのだから神のゆるしは得たと解釈したのだろう。

それから空に飛びあがった。

しばらくの空中飛行のあと、ストーンと降りたのは賑やかなところ。

「お前の家はすぐそこだ、ひとりで行けよ」

古呂明に言われても、寅吉にはわからないから首をかしげている。

「浅草の観音さまを忘れたのか」

いわれてみればなるほど、浅草観音の仁王門の前だった。不忍池と浅草観音は下町そだちの寅吉には自分の家の庭も同然なのに、空を飛んだあと、ストーンとおりたばかりで咄嗟の見当がつかなかったのは仕方がない。

池之端七軒町の家にもどったのが文政三年の三月二十八日、寅吉の顔を見るなり母と兄は「またお寺の世話になれ」と、やかましく勧める。母も兄も一向宗の信者で、あけてもくれてもナムアミダブツと唱え、抹香くさい暮らしのほかの生き方を認めようとしなない。

寅吉自身は兄や母の押しつけをはねのけ、どこかの武家の奉公人になろうと計画していたが、三月にもどってから六月まで家にいたのは坊主頭の髪の毛がもとのように生えそろうのを待っていたからだ。

そのあいだは母と兄の仏教押しつけに抵抗して、はげしく抗争の日々がつづいた。

寅吉は大神宮の玉串を柵にあげ、柏手をうって礼拝する。兄はそれが穢らわしいといって塩をまいて清める、寅吉は仏壇のほうがよほど穢れているといって塩をまき、唾を吐きつける。寅吉が岩間山からもってきた書物や道具、薬をつくる処方箋なども母と兄に焼かれてしまい、八幡神社の社頭で師から頂戴した剣は古道具屋にたたき売られてしまった。

そうこうするうちに髪の毛も生えてきたので、七月からある家に勤めることになった。しかし、ここ数年のほとんどを山のなかで送った寅吉だから奉公人の心得がない。馬鹿々々といわれ、役立たずと罵られるだけで八月のはじめには追い返されてしまった。

そのつぎに、わずかの縁があつて上野町の下田家に雇われてまもなく、下谷長者町の長崎屋新兵衛こと山崎美成が寅吉に注目し、「おれの家になれないか」と誘ってくれたので母には無断で長崎屋に移った。文政三年九月の七日のことで、寅吉はかぞえて十四歳。

寅吉を引き取った山崎美成は二十四歳。歳は若いが、このころはまだ商売も手広くやっていて学問にも精を出す、人生の上げ潮に乗っていた。

「そのうちに頼れるひとがあらわれるから心配しないで待っていろ」との伝言

あとになってから寅吉の語ったところによると、山崎美成は「仏法を好み、信じるひと」だったそう。九月七日に美成の家に連れられてゆき、美成の世話になることがきまってすぐに美成の人物を「仏法を信じるひと」だと見破ったのかどうか、それについては断言できないが、「どうもこのひとは神道よりは仏教のほうのひとだなあ」ぐらいの認識ははやいうちにできあがっていたのだろう。

岩間山の修行の様子、道の——修験道といっておく——様子、印のむすびかたなど、問われるままに答えた。仏や菩薩の誓願、悟りを手の指をいろいろな形むすんであらわすのが「印をむすぶ」ということで、密教系の仏教で陀羅尼を唱えるときにおこなわれるが、修験でもおこなわれているそう。

岩間山の師から言い含められていた掟をまもって、「仏教は悪い道です」とはいわなかったし、あっちこっちの寺で小僧見習いをやっていた経験があるから仏教のことにもくわしい。そこを見込まれ、「お寺で修行してはどうか、いくらでも世話をするぞ」と強く勧められることがあった。

美成が寅吉に寺入りを勧めたのは浄土宗や真宗といった宗派と関係することではなく、それまでの修行の経験をさらに本格的なものにする、つまり密教系の道場のようなところにはいるのはどうか、手づるはあるぞ、といったものだったのだろう。岩間山では印のむすびかたはこういうふうにするのです、などと教えるときの寅吉の目は自信にあふれていたはずだから。

もっといえば、美成が寅吉に興味をもち、下田家から自分の家にひきとってまで観察しようとしたのは寅吉の幼さに理由があったものだろう。十四歳の少年が、まるで一人前の大人みたいに修験の修行体験を語る、そこに異常なものを発見して興奮したはずなのだ。

美成にとっては口惜しいことだが、寅吉は美成という人物を好きになれなかった、それが二人が親友になれなかった原因のすべてであつたらう。寅吉がもうすこし年長であつたならば、我慢して美成とつきあう代償に美成の学識や好奇心から吸収するものもすくなく

はないはずだ。そうなるには寅吉が幼すぎ、美成のほうも若かった。寅吉は我が身をもちあぐねる気分の日がつづき、長崎屋の火の見のぼって常陸の岩間山の方角を眺めることが多くなった。

あるとき、長崎屋の丁稚のひとりといっしょに使いに行った道で修行仲間の左司馬にすれちがった。丁稚といっしょだから声はかけなかったが、岩間の師からの伝言をもってきてくれたにちがいないときめて待っているうちに、夜になって店の外から寅吉の名を呼ぶ声がする。忍んで出てゆくと左司馬が待っていて、岩間の師の伝言をつたえてくれた。

「ちかいうちに、お前の頼りになるべきひとがあらわれるから、心配することはない。十二月の三日から例のとおり三十日の寒行がはじまるから、十一月のうちに岩間にのぼってこい。ただし、自分が讃岐の山まわりの番にあたれば寒行は休みになる」

それだけ伝えると左司馬は姿を消した。

夜中に無断で店の外に出たのが聞こえ、美成に問い詰められたのだろうか、寅吉は「仲間が来て、師の伝言をつたえてくれました」と弁明した。十一月の末までには岩間に登山して寒行せよとの指示であったことはいつたが、「ちかいうちに頼りになるひとがあらわれるから心配するなよ」との激励の伝言には触れなかった。「頼りになるひとがあらわれるから心配するな」とは寅吉が窮地におちいつているのをいつたからにはかならない。十四歳の子供でも、これを、現に世話になっている美成にいえるものでないぐらいの判断はつく寅吉なのだ。

輪池こと屋代弘賢の登場

「天狗小僧があらわれたぞ！」

第一報を平田篤胤にもちこんだのは屋代弘賢(ひろかた)、文政三年

十月一日のことだ。

屋代弘賢は幕府の御家人で、博学者という字を絵にかいたような人物。

神田の明神下に住んで書を森尹祥、和歌を冷泉為村、国学を塙保己一（はなむねいち）、儒学を山本北山、有職故実を伊勢貞春にまなんで第一級のレベルに達している。寛政五年（一七九三）三十五歳で幕府の右筆となり、『寛政重修諸家譜』の編集にたずさわった。師の塙保己一をたすけて『群書類聚』を編集した功績も大きい。

弘賢は神田の明神下に住んでいた。

神田明神とはいわずと知れた平将門の霊を祭る神社で、そもそもは江戸城の大手門ちかくにあつた明神社だった。江戸城拡張の邪魔になつたので家康が神田に移し、その跡地には将門供養碑（将門首塚）がたてられた。三井生命ビルの横にある。

神田に移された明神の南にできた町家区域がいわゆる明神下で、いまの外神田二丁目と三丁目にあたる。

学者御家人としてつとめるかたわら、弘賢はあつめた膨大な書物の書庫を不忍池の池畔にたてて「不忍文庫」と呼んだ。弘賢の号の輪池（うるい）とは不忍池にちなんだものらしく、とすれば弘賢もやはり不忍池をめぐる人物のひとりなのだ。

さて、屋代弘賢はその明神下から平田篤胤のところへ走り、「天狗小僧があらわれたぞ！」と叫んだ。

そのころの平田篤胤は湯島天神の男坂下に住んでいた。神田明神下から湯島天神男坂下に至るルートをそのままつすぐにゆくと不忍池の西の畔、つまり不忍通りになり、池之端をへて根津にぬける。

屋代弘賢が神田明神下から湯島天神の男坂下まで走って「天狗……！」と叫んだというと、天神やら明神やら神さまづくしで、なにやら因縁めいた感じになるが、走った屋代弘賢そのひとは冷静沈着な学者だから、そこに別段の神秘的なものがあるわけではない。

だが、冷静沈着な弘賢をむかえた平田篤胤のほうには、いささかを超えて、かなりの程度の興奮があつた。この数年のあいだ、天狗が登場するのをだれよりも待ちこがれていたひと、それが平田篤胤にほかならなかつたのだから。

平田篤胤——どういう人物？

とにかく大変な人物なのである。

国学四大人は荷田春満(かたのあしまる)、賀茂真淵(かものまほ)、本居宣長(もとよしのなま)、そしてこの平田篤胤ということになっている。篤胤の後には「国学の大人」の敬称に相当する人物はあらわれなかったわけだ。

どういう具合に大変なのか、たとえば、という紹介の仕方にならえば、つぎのような文章がある。

「平田篤胤という国学者の名を見ると、いまでも私はいい気がしない。なにやら気味がわるくなってしまふ。というのは、言うまでもなく戦時中の、あの途方もないジャーナリズムにのっていた、脅迫的な諸論文を思いだすからである」

堀田善衛(よしえ)の『海鳴りの底から』の一部だが、この部分が田原嗣郎という歴史家の著書『平田篤胤』の第一章「平田篤胤をどう扱うか」の冒頭に引用されている。

堀田善衛の文章の一部を引用したあと、田原嗣郎は自分の見解を述べている。

「これが一九四五年の敗戦まで荒れ狂う天皇帝ファシズムに痛めつけられた日本人民の偽らざる感想であろう。天皇帝国家の観念的支柱となった国学のなかでも、篤胤はことさらに太い柱であったのだから」(『平田篤胤』昭和三八年・吉川弘文館)

途方もない脅迫的な論文、荒れ狂う天皇帝ファシズム、天皇帝国家の観念——そういったものは何であるのかというテーマを追求するのは、この本では余談に属する。

だが——たぶん田原氏もそうであろうと思うのだが——そういう恐ろしいことの元祖になろうとして平田篤胤は湯島天神の男坂下で暮らしていたのではない、そのことだけはここでいっておかなくてはならない。

それなら篤胤は、湯島天神の男坂下で何をやっていたのか？——天狗を待っていた。

もしも天狗というものがこの世に存在していないとなると、日本人はすべて不幸になってしまう。おたがい、それでは困るではないかという気持ちから、ひたすら天狗の登場を待ちこがれていた。ただし、「それでは困るではないかという気持ち」の部分は「困るはずだ」という理論」と言い換えたほうが正しいはずだ、篤胤は一般人ではなくて専門の学者なのだから。

篤胤の家には伴信友が来ていた

屋代弘賢が息せききってかけつけたとき、湯島天神の男坂下の平田家には伴信友（*伴信友*）という学者が客になってきていた。

伴信友は若狭小浜藩の藩士の四男に生まれ、おなじ小浜藩士の伴信当の養子になった。ときの藩主の酒井忠進に信任され、もっぱら江戸や京都で勤務した。

生まれたのが安永二年（一七七三）で、享和元年（一八〇一）二十八歳のときに本居大平（*本居大平*）に入門した。本居大平は本居宣長の後継者で、信友が大平の門人になった年に宣長は亡くなってしまった。宣長の没後、後継者の大平に入門した信友のようなケースを「宣長没後の門人」と呼ぶしきたりになっている。

本居宣長がはじめた学問を国学と呼ぶ。宣長がゼロからはじめたわけではなく、堀景山や契沖、荷田春満や賀茂真淵といった先駆者にみちびかれてのことだが、いわば国学を独自のジャンルの学問にまとめあげたひと、といった意味合いで「宣長イコール国学の祖」の図式ができあがっている。

安永二年生まれの信友は安永五年生まれの平田篤胤とほぼ同年、はやくから学者としてのつきあいがあった。平田篤胤の学者としての最初の著作は二十八歳のときの『阿妄書』だが、それから三年後に書いた『新鬼神論』の原稿をはじめて見せたのは信友であったというぐらいの親友になっていた。

屋代弘賢が「天狗があらわれたぞ！」といいながら湯島天神男坂下の篤胤の家にとびこんできたのは文政三年で、そこには先客の信

友がいて、

「天狗が、あらわれた……ほんとうですか？」

「ほんとうですよ」

「どこに、天狗が……？」

「下谷長者町……」

「おおつ、長崎屋ですな！」

ほかならぬ山崎美成のところに天狗がいるのをたしかめ、客の信友にむかって篤胤は、「失礼して、ちよつと出かけてきます。いやなに、すぐにもどりますから……」

客の信友をほおつたまま、弘賢の腕をにぎるようにして出ていってしまった。天狗を見にゆくのに信友を同伴しようという気はおこらなかつたらしい。

篤胤の身分と暮らしのこと

寅吉の身柄をあずかっている長崎屋こと山崎美成、美成の家に寅吉がいるのを発見して篤胤に知らせにきた屋代弘賢、そのとき篤胤の家に客にきていた伴信友、この三人は江戸の住民だ。

信友は若狭小浜の藩士だから江戸の住民というには無理があるかもしれない。しかし生活の基本は江戸屋敷の勤務であり、小浜への帰郷も京都への出張勤務も江戸勤務の延長のかたちだから、ここではあえて信友は江戸の住民としておこう。

平田篤胤も江戸に住んではいるが、ほかの三人とは決定的なちがいがある。篤胤は秋田藩佐竹氏の家来で大和田祚胤清兵衛の四番目の子の身分を放り出して、つまり脱藩者として自分の意志で江戸に出てきている。

脱藩という過激な行為が何を原因とするものであったのか、くわしいことはわからないのだが、ともかくも寛政七年（一七九五）、二十歳の年に秋田を出奔して正月の末のころに江戸に着き、それから五年のあいだ、「大八車を曳（ひ）き、火消組の人夫となり、五代目団十郎の門下となり、商家の炊事方となり、転々としてあらゆ

る辛苦を嘗（む）めたらしい」。〔沖野若三郎『平田篤胤とその時代』〕

遠いところから江戸に出てきて大八車を曳く仕事があれば結構だというひとがいけないわけではないが、篤胤は大八車を曳いて暮らしたをたてるだけでは満足しなくなった。学問というものはおもしろいと気づき、自分も学者になってやろうと計画をたてた。

備中松山藩（岡山県）の家来の平田藤兵衛篤穩の養子になって平田篤胤と名乗り、沼津藩の藩士の石橋常房の娘の織瀬を妻にむかえて江戸詰め of 武士の世界に腰をおちつけた。

平田家の石高は五十石といわれ、物価の高い江戸の暮らしは楽ではなかったはずだ。しかし、篤胤が真菅之室（ますげのむろ）の名で学者の人生を歩きだしたのは入門者からの謝礼を生活費の補助にするためではなく、そうすることが学者であるから塾をひらいたというにすぎない。篤胤がはじめて門人にしたのは主家の板倉家の江戸詰め of 藩士の三人だそうだ。

「娘の雛人形を質から受けだすために火事羽織を質に入れて……」
湯島天神下から下谷長者町まで、四十五歳の篤胤がふつうの速度で歩くと二十分はかかるだろう。

頭のなかは「天狗々々」で一杯につまっているから、ふつうよりは速度をあげ、脇目もふらずに歩いて十五分とみて、その十五分で篤胤の貧乏物語を聞いていただくか。

真菅之室をひらいた三年目に篤胤は元瑞の名で医者を開業した。平田家の養子、塾の師匠、そして医者と、篤胤の身分は三本柱になっているわけだが、どれもこれも十分な収入をもたらさなかったから、貧乏という字の見本みたいな生活がつづいた。

五年前の文化十二年、この年には真菅之室に十二人の新しい入門があり、門人の累計は七十九人になっていた。医者を兼業して八年がすぎているが、伴信友にあてた手紙には息苦しい家計の様子がのべられている。

「なにをいってもきりはありませんが、絶窮の一語に尽きます。去年の暮れには『春になればかならず返却』と、あたりまえの理屈をならべて借金をかさね、なんとか年を越しました」

さて、その春がやってきたが、借金を返す算段ができたどころか、「年始の挨拶まわりができません。欠かすわけにはいかない方がありますから、質屋にゆき、他人の質入れした熨斗目(おしとめ)を借りて着て一日のうちに年始をすませました。つぎの日に熨斗目を質屋に返してホツと一息ついたところへ、質屋から『十両を払ってもらえなければミハシラの版木がながれますよ』との通告です。これは門人のなかの悪いやつが『豊の真柱』(とよのまはしら)の版木を十両で質入れしてしまった尻をもつてこられたのです」

質屋に入れた着物を一日だけ借りだして着て用事をすませるのはよくあることだが、このケースは篤胤が自分の熨斗目を入れた質物ではなく、縁もゆかりもない他人の質物の熨斗目を借りて着用したのだ。篤胤の熨斗目はとっくのむかしに質流れになっていたわけだろ。

熨斗目とは麻の袴の下に着る無地の練絹のこと、武士の身分の基本的な礼服だから、熨斗目なしで年始の挨拶に行くのはネクタイはしめたが上着は着ないのと同様のスタイル、失礼きわまって年始の意味が帳消しになる。

『豊の真柱』は数おおい篤胤の著書のなかでもことに重要とされるもので、師の本居宣長の『古事記伝』を批判しつつ篤胤の独自の歴史観を展開したものだ。文化九年に脱稿され、翌年には刊行されているから、版木が質流れになっても『豊の真柱』が日の目を見ない事態にはならない。

それにしても、みずから「絶窮」となげいている師の台所事情を知らないはずはないのに、師の主著の版木を無断で質入れしてしまう弟子をかかえなければならぬ学者稼業も楽ではない。

版木の質流れを阻止するために篤胤は「同心を頼んだ」といっている。町奉行の下役の同心の仲介をたのみ、そのうえで一両三分の

追い利子を入れて、かろうじて六カ月ばかりの延命に成功した。

やれやれとおもつまもなく、去年の大病のときに質入れた十兩ばかりの期限が過ぎていて、「ながれますよ」と催促がくる。仲介をたのみ——これも同心だろう——しばらく待つてくれ、ちかいうちに利子を入れるからと懇願しても承知してくれないので、ついに刀を質入れたが、これも利子の半分にしかない。

武士のイノチなどとまでいわれる刀を質入れしてしまった武士が果たして武士であるのか？　なんていつても何もはじまらない事態になっている。

刀を質入れして急場をやりすごし、これではばらく時がかせげると思ったのも束の間、女の子の春祭——雛の節句——がちかづいてきて、パパ篤胤の頭を痛める。

「去年の三月に入れた雛がながれると行ってきたのです。雛をなげせば娘が泣くな、などと思う苦勞を何といえはよろしいのでしょうか。火事羽織を質に入れた一兩二分で雛を受け出しましたが、娘に着物を着せてはやれませんか、今年は普段着のまま雛の節句をすませました。『外へ出るなよ』といつてきかせたので家のなかでしずかにしておりましたが、子供の気持ちをあもえば不憫でなりません」

石橋織瀬とのあいだには二男一女が生まれたが、長男の常太郎は生後すぐに亡くなり、織瀬もその後を追うように亡くなった。伴信友に窮状をうったえた文化十二年の春の篤胤は一男一女をかかえる男やもめの境涯だ。

湯島天神下から下谷長者町の長崎屋に走ってゆくのは五年後の文政三年十月一日のことで、この年までの門人累計は二百三十人、なかなか繁盛しているから「絶窮」ではないにしても、安楽の日々ではない。

ちかごろは幽界や天狗のことが秘密にされない傾向

下谷長者町の長崎屋へ走る平田篤胤の背中は興奮と緊張でもりあがっていたはずだ。

その篤胤の背中を見ながら、屋代弘賢は息を切らせて付いていったのだろう。弘賢は篤胤より十八年の年長、そのうえ江戸生まれ江戸育ちの御家人ぐらし、二十歳まで秋田の田舎町でくらしした篤胤とはからだの出来がちがう。

「天狗にさらわれた体験を語るものはすくなくないのですが、そういうひとの話はぼんやりとしていて、とくに幽界のことになると口をつぐんでしまい、はっきりとしたところは言わないものです。長崎屋にいる、その天狗小僧とやらは、どうなのでしょう？」

篤胤は天狗に会いたいと切望していた。天狗にさらわれた話をするひとにも何回か対面した経験もあるらしいが、そのたびに失望を味わされたにちがいない。弘賢にたいする質問には、こんどもまたおなじような失望を味わう結果になるのではないか、そんな不安が出ている。

篤胤の問いに答え、弘賢はいった。

「自分から『天狗にさらわれた』というひとのたいていはそうらしいが、長崎屋にいる天狗小僧はなにことも隠さずに語るということ。むかしは幽界の様子が世間に知られるのを嫌っていたが、ちかごろではそういう傾向もうすれてきたようです。いろいろとたずねて、小僧の言うのを一言ものこらずに筆記なされよ」

先輩の言葉に篤胤は安堵の思いをした。長崎屋にいる天狗小僧は、これまで逢ったり噂に聞いたりしたのは類を異にするものだとこの期待を濃厚にした。

幽界とか天狗にかかわる話はむかしは秘密にされたものだが、ちかごろはそうでもなくなった——屋代弘賢も平田篤胤もおなじように考えている、そのことは重要だ。

幽界や天狗のことが秘密にされなくなっているちかごろ、そういう時代のなかに生きている自分こそ先頭に立って幽界や天狗のことをあきらかにする使命をおびている。

「ほかのひととは異なる質問をしてくれる平田先生は嬉しかった」

と寅吉は回想する

長崎屋について案内を乞うと、山崎美成はすぐに奥から寅吉を呼びだしてくれた。

寅吉はふたりの客の顔を見るばかりで、挨拶もしない。弘賢と篤胤が「よろしく」と挨拶しても反応がないので、横にいた美成が「お客様さまに挨拶しなさい」といったのにおされてようやく、無愛想な物腰で礼をした。

ブスーッとした調子の礼のあとすぐに、篤胤の顔をみつめて、寅吉がいった。

「あなたは神さまを信心しているね」

「神さまを信心するのは善いことかな、それとも悪いことかな？」

「とつても善いことだ」

天狗小僧の寅吉と平田篤胤との初対面はこうしてはじまった。

(2 章 ・ 終)

3章「天狗小僧の争奪戦」

寅吉と篤胤との付き合いは友好的な雰囲気ではじまった

天狗小僧の寅吉が篤胤にむかつて発した最初の言葉は「あなたは神さまを信心しているね」だった。

篤胤は寅吉の質問の意味は「ホトケさまを信じてはいないんだね」との念押しだと解釈し、「神さまを信心するのは善いことかな、悪いことかな」と折り返してたずねると、「とっても善いことだ」の返辞がかえってきた。

江戸の下谷長者町、薬屋の長崎屋こと山崎美成の店の奥座敷で実現した天狗小僧寅吉と平田篤胤の対面は友好的な雰囲気のうちではじまった。文政三年（一八二〇）十月一日のことで、篤胤は四十五歳だ。

寅吉のほうでも篤胤について悪くない印象をもったのは確實だが、それには伏線があった。

長崎屋の世話になってまもないころ——九月の末だろう——岩間山の修行仲間の左司馬がひそかに連絡してきて、師の杉山組正の指示をつたえてくれた。「ちかいうちにお前の頼りになるひとがあらわれるから心配しないで待っている」との伝言だった。

世話になっている長崎屋の主人にいうべきことではないと直感した寅吉は、何もいわずに、その「頼りになるひと」の出現を心待ちにしていた。これが伏線になって、篤胤と二言三言かわしたただけで寅吉は、これが師匠のおっしゃる「頼りになるひと」だと直感したわけだ。

篤胤は慎重に事をすすめた。

寅吉からうける第一印象は、どういふものであったか——憎らしげなところはない。十四歳だと聞いたが見たところは十三歳ぐらいの感じ。人相家のいう「下三白」の目をしていて、普通の目よりは大きく、眼光はするどくて平凡ではない。

第一印象をこのようにまとめたあと、「脈を拝見」というなり寅

吉の手首をつかんで脈を測り、それから小腹に触れてみた。脈は細くて幼児の脈のようだが、小腹は固くて実があった。

篤胤は元瑞と名乗る医者でもあったが、医者としての腕前がどれほどのものであったのか、医者としてどれくらい稼いでいたのか、はつきりしたところはわからない。

篤胤の伝記資料のなかで医者として活動している姿を伝えるのは門人の竹内健男が書いた『神童憑談略記』のなかの、寅吉の脈や小腹の具合をしらべている一節のほかにはないようだ。

ただし、この場合の寅吉は診察料を用意して元瑞こと平田篤胤の治療をうけている患者ではないのだから、篤胤が医師として活動しているとはいえないかもしれない。

篤胤は用意周到

寅吉の第一印象をまとめ、脈と腹の具合をしらべたあとで質問がはじまった。篤胤だけではなく、同行してきた屋代弘賢も質問を發したようだ。

ここには山崎美成も同席していて、弘賢と篤胤が寅吉に質問するのを不安な気分でながめている。湯島天神男坂下の家には、たまたま客になってきていた伴信友が篤胤の帰りを待っているはずだが、信友がどうなったのかわからない。待ちくたびれて帰ってしまったのだろうか。

質問は岩間山の所在地からはじまった。

寅吉は、岩間山は筑波山から四里ばかり北にあつて、頂上に愛宕神社があり、足尾山や加婆山、吾国山などとならんで笠間のちかくにある山だと答えた。

「岩間山はおれの師匠が降雨を祈願するところだ」

「天狗のことだが、まず岩間山に十三天狗、筑波山に三十六天狗、加婆山に四十八天狗、日光山には数万の天狗がいると聞いた」

岩間山の十三天狗について寅吉は、さらにくわしく説明した——
もともとは十二天狗だったが、四五十年まえに筑波の麓の貉打村の

長楽寺という真言の寺の僧がシャカ如来の迎えをうけた。僧は日ごろの祈りがシャカに通じたとよるこび、いっしょに岩間山まできたところ、シャカ如来と見えたのはシャカに化けた岩間天狗だった。

長楽寺の僧は天狗になり、あわせて十三天狗になった。

「だが、おれの師匠は十三天狗のほかで、杉山組正という名だ」

そこで篤胤が質問した。

「岩間山の十三天狗のことを、こちらの世間のひとが『天狗々々』と呼ぶについては腹が立つのではないかな。そちらにはそちらなのに、なにか別の言い方があるのではなからうか？」

「おれたちは『天狗』と呼ばれても腹は立たない。人間の世で人間のことを人間と呼んでも怒らない、それとおなじだから」

寅吉はまるで、こちらの質問を予想したうえで答えているようだ

——そう思う篤胤の質問に熱がこもる。

「しかしだな、天狗が自分のことを『天狗』とは呼ばないはずだが

「岩間山の天狗は自分のことを『天狗』とは呼ばない……それはそのとおりで、じつは『山人』(さんじん)と呼んでいる」

やはり、そうであったか——グイツと膝を乗りだす篤胤をおさえ、て寅吉がつけくわえたのは、つぎのような説明であった。

「だがね、十三天狗のなかでほんとうの山人といえるのは四人だけ、ほかはワシヤトンビが化けたもの、それがほんとうの天狗なんだよ。キツネ・クマ・サル・オオカミ・ワシ・トンビ・タカ……このほかどんなものでも古くなれば天狗に化けるんだ」

山人と天狗の相違を指摘したうえで寅吉は、自分の師の杉山組正が山人としていかに偉大であるかを説明した。山人の数は多いが、そのなかでも「歴々の山人」となるとそれぞれの魂を祭りごとの対象にする。たとえば杉山組正の魂ならば杉山組正ワケモチノミコト、長楽寺ならば長楽寺ワケモチノミコトと名づけられて尊敬される。

歴々の山人は自分の魂を幣(まは)に留めておいて毎日礼拝するのだと寅吉はいった。

この説明について篤胤や弘賢がどういう反応をしめたのか、記録したものを讀んだことはないのだが、なにかフレッシユなものを感じとったのではないだろうか。自分の魂を幣に留めて礼拝するのは、いかにも幽界的、仙界的なイメージを感じる。

篤胤は「その場合の幣の切り方はどうなっているのか？」と寅吉に質問したようだ。幣の切り方を質問したなかに、歴々の山人は自分の魂を幣に留めるのだという寅吉の説明を感動してうけとめた痕跡があるのかもしれない。

もしもこのとき、篤胤が「幣に自分の魂を留める、そんなことが可能なのか？」などと質問していたなら、「ああ、このひともまた天狗や幽界についてすこしの親近感ももたず、ただの好奇心から聞いているだけなんだ」と寅吉を失望させていたおそれがある。この場は篤胤が寅吉に質問する形式になっているが、だからといって、篤胤が寅吉によってテストされる逆の側面がないとはいいきれないのだから。

「とくにな変わった切り方じゃないよ」——寅吉はあっさりといい、「しかしね」と付け加えた——「幣の真ん中に玉を付ける、これが魂の代わりなんだ」

幣の真ん中につけるといふ玉がどういふ玉なのかはわからないが、色は瑠璃色の玉を百十二粒と親玉をふたつ、数珠のように貫いてまとめ、紐で房を下げる。

これは吾が古道の方法に適合している——篤胤は感動とともに記述にとどめた。

「おまえの師匠は竜神山で降雨を祈るといふが、幽界では田畑を耕すことはあるまい。耕さぬ田畑のために雨を祈るとは、腑に落ちないが……」

寅吉はあざ笑い、

「そんなことを聞くとは、あんたもやはり人間の心を持っているんだね。神さまはもちろん山人でも、世のながが悪くなるのは困るんだ。だから幽界では人間のことを祈るのが大切なさ」

初対面は以上のような経過で終わった。

のちになって寅吉は「あなたたち（篤胤と弘賢）はほかのひとは違う質問をしてくれた、それが嬉しかったよ」と語る。

この「ほかのひとたち」のなかには山崎美成もふくまれているわけだが、美成は篤胤と弘賢の質問のあいだにとびこんでは、しきりに「やはりお坊さんになったほうが……」と寅吉に追従し、誘導しようとしていた。

美成の追従と誘導を寅吉はうとましく感じている——そうと見てとった篤胤は、

「わたしは決して、お坊さんになれなどとはいわないよ。これまでやってきた道に、もっと深くすすむ、それがいちばんだと思うよ。

まあ、いちど湯島天神のほうへも遊びにきておくれ」

屋代弘賢は篤胤を鼻屑にしていた？

天狗小僧寅吉との最初の対面は、平田篤胤にとって好ましい結果になった。

寅吉はお寺の小僧にさせられるのをおそれている、だから寅吉の気を惹くには寺や僧侶について悪い印象をあたえるようにするのが効果があるはずだとわかってきた。

寺の小僧になりたくない寅吉の気持ちに味方すれば、寅吉の第一発見者の山崎美成と対立することになるが、そのときはそのときだと気持ちの整理もついた。

最初の対面から六日目、屋代弘賢から連絡があった。「今日の夕方、山崎美成が寅吉をつれてやってくることになっている、篤胤くんもやってこないか」と、願ってもない話だからすぐに神田明神下の屋代家に行き、いろいろとたずねた。

屋代弘賢は寅吉について、どういう印象をもっているのか、そもそも天狗とか幽界、仙界について篤胤のような興味があるのかどうか、くわしいことはわからない。

わからないなりに推測すると、弘賢は篤胤を鼻屑にしていた、こ

れを先にかんがえる必要がある。仙界とか天狗のことに興味を持っているといってもおなじことになるわけだが、御家人の立場のうえに幕府の史書編纂にたずさわっている身分では、天狗のことを論じるのはともかく、天狗論を公にする自由はないと、いわば自己規制していたのだろう。

自己規制するから、かえって篤胤鼻屑の気分が高揚してくる、そういう関係でもあったのではないか。

弘賢のこの姿勢は山崎美成にたいする反感の証明でもあるわけだが、弘賢が美成に反感を抱いていたと言うに足る証拠はない。

証拠はないが、いったいなぜ弘賢が美成のところから寅吉を連れだし、篤胤に「見にこないか」と誘うのか、その理由を考えてゆくと、弘賢は美成を嫌っていた、嫌っていたとは言えないまでも、篤胤が寅吉をさらに深く観察するのを美成に妨害させたくないという気持ちが強かったのではないかとの推測にゆきつく。

こういう気持ちを弘賢がもっているとするれば、美成としては逆らえない。相手は年長であるうえに、天下の御家人、そして学者としての名声は確固たる人物だ、下手に逆らうよりは迎合しておいて他日の利を図るほうが得策だと判断して、寅吉を連れての屋代邸訪問になったわけだろう。

これは後日の問題なのだが、この場面で屋代弘賢は権威をふりまわしたと批判されても弁解できない。御家人としての勤務の掟や処世のルールに違反しているわけではないが、学者仲間のルール、知識人の仲間の交際の原則からはあきらかに逸脱している。

学者仲間のルールとか知識人の仲間の交際の原則といったものは現在とは性格を異にしているはずだが、それにしても、いずれ弘賢は批判を受ける立場になるかもしれない。

この日も寅吉にいろいろと質問し、帰るときに篤胤は美成にいった。

「山風の吹きようによっては寅吉に里心というものが起こって、岩間に帰りたいと言いだすかもしれない。そうならぬうちに、湯島の

ほうへ、いちど連れてきていただけなものか」

これもまた屋代弘賢の目の前でいったのだから、美成には拒否できない。「よろしゅうございますよ」ということに決まって、その日は終わった。

国友の鉄砲、幽界の鉄砲

寅吉を連れてゆきましよう和美成が約束したのが十月の六日で、その夜のうちに篤胤は佐藤信淵(のぶたか)や国友能当(のりとも)に手紙で知らせた。ふたりが寅吉に逢いたがっていたのはわかっていたから。

佐藤信淵は農政学者のジャンルに入れられるのがふつうだが、それよりはむしろ「政治と国土の改造プランナー」とでもものがふさわしい。

秋田で代々つづく医者の子に生まれ、江戸に出て農政・地質・天文・地理などの学問を、もっぱらオランダ学系統の学者についてまなんだ。明和六年(一七六九)生まれ、文化十二年(一八一二)に四十三歳で篤胤の真菅之室に入門してきた。

三百部八千巻の著書ありと自称していたがほとんどは存在不明。主著の『混同秘策』では江戸幕府を中心にして大アジア世界を統一すべし、などという破天荒な、しかし、実現性がまったくないとはいえない理論を展開していた。

国友能当は通称を藤兵衛、号は一貫斎、近江(滋賀県)坂田郡国友村の鉄砲鍛冶の代表者で、幕府鉄砲方の総代をつとめていた。

戦争はなくなつたが、鉄砲製作が最大の軍需産業でなくなつたわけではない。最大軍需産業の代表者の国友能当が天狗小僧寅吉を見たいばかりに湯島天神下の平田篤胤の家をおとずれるのはなんとも大げさだが、能当は幽界では特別なタイプの鉄砲をつくっているのではないかと見ていたのだろう。篤胤が、それとなく気を惹いたのかもしれない、「天狗のことです、あなたがアツとおどろくような鉄砲をつくっているかもしれませんよ」などといって。

長崎に輸入されたオランダ製の空気銃を見た能当は空気銃の国産をおもいたち、あれこれと工夫のすえに「気砲」をつくるのに成功したという。文化二年（一八〇五）のことだそうだが、能当のように自力であれこれと工夫するタイプの人間は他人にも自分とおなじ能力があるのを知っているから、幽界には格別の鉄砲が、などといわれると関心が湧くのだろう。

十月七日、朝のはやいうちから篤胤はもちろん、佐藤信淵や国友能当、そのほかの門人があつまって寅吉の好きそうな菓子をそろえて待っていたが、いつになっても美成と寅吉はあらわれない。湯島天神男坂下の気吹舎(きぶきや)は待ちぼうけを食わされた。（真菅之室は文化十二年に気吹舎と名が変わった）

江戸はカラクリや仕掛け物の「見せ物」ブーム

このころの江戸はカラクリや仕掛け物の「看せ物」「見せ物」が盛んだった。

斎藤月岑の『武江年表』には、こういう記事が出ている。

「今年（文政三）の正月から秋にかけて、寺地や両国橋のそばに大造りの『看せ物』が出た。自分の見たものだけをならべても、つぎのとおり」

両国広小路——針金細工——作者は胡蝶——「難波なる籠の細工に負けまじと巧みだしたる江戸の針金」のキャッチフレーズがついていた。「難波なる籠の細工」とは竹の籠にさまざまの飾りをつけた籠細工（コサージユまたはデコレーションといえればいいか）が大坂で評判になったので、それを真似た針金細工らしい。

両国広小路——麦藁の細工

両国広小路——虎の作り物の「虎あそび」——浅草の奥山——ゼンマイ仕掛けの人形「雨乞い小町」——作者は東陽斎常山

東両国——箆籠細工の「鯉の滝登り」

浅草の奥山——人形の「茶番細工」——作者は堤深川斎

浅草の奥山——麦藁の張り細工——七丈あまり（二十一メートル）

の大青龍刀・十二支の額・葛飾北斎の下絵による張り細工が「見事なり」——作者は大森の職人

浅草の奥山——貝細工の人形——貝細工は大塚看造——人形は末吉石舟

浅草の奥山——人形の「七小町」——作者は二代目原舟月

回向院——丸竹の細工

西両国——麦藁などで衣装をつくった江戸細工「助六」など

東両国——ギヤマン細工の「象頭山」——細工人は大阪の武楽斎

回向院——「文覚上人の荒行」——細工人は惣助・弥三郎・泉五

・茂定

回向院——瀬戸物細工——細工人は亀祐周平

回向院——ゼンマイ人形「時雨桜」——細工は大阪の金橘堂

浅草の奥山——へちま細工——細工人は江上仙吉——この小屋か

ら火が出て作り物はみな灰塵になった

浅草の奥山——大盆石——作者は大阪の井上宗菊

『武江年表』に補正をくわえた喜多村信節(喜多)は付け足して、
いつている。

「浅草の奥山に出た見せ物をならべただけでもおびただしい数になる。このようなことは二度とはあるまい。とくに貝細工は見事だったが、ありまにも数が多いから、そのうちには見物するひとがいなくなってしまう」

国友能当が苦心して製作した「気砲」や、能当が見たいとおもっている「幽界の風砲」と、浅草や両国の広場にならんだカラクリや仕掛け物がおなじレベルにあるというつもりはない。

文政年間の江戸の市民が「見たい」とおもい、細工人や興行師が「それでは見せてあげましょう」と気負いこんだテーマがどういうものだったか、見本があらわれている。

アツとおどろくカラクリや仕掛けを想像していただくのはもちろんだが、細工人や作者や工房、興行師の名が公表され、大事にあつかわれていた光景にも目をむけてほしい。

楽しませ、おどろかせてくれるひと——芸術家への期待が江戸市民の生活感情のなかに根をおろしていた。作品がすばらしいだけでは満足しない、作者が匿名、無名で隠れているのを承知しない。作り物、仕掛け、カラクリだと承知のうえで、いや、そうだからこそなおいつそう楽しみ、おどろくのを可能にするのは想像力だ。「タネも仕掛けもありません」と、本物であることを売り物にする見せ物が登場してきても、「本物……？それがどうした！」といつて突き放し、背をむける精神は想像力によって、想像力によってだけ可能になる。

このような時代の精神を平田篤胤は感じているにちがいない。はつきりと認識してはいないとしても、本物だから価値があると押しつける姿勢にたいして江戸の市民はいいようなない不信や軽侮を感じている、これだけはたしかなことだ。

篤胤は、この想像力の海のなかへ天狗小僧寅吉をむかえいれようとしている。

山崎美成は寅吉を独占したがっているらしい

待ちぼうけをくわされ、面目をうしなった篤胤はつぎの日に下谷長者町の美成の家に乗りこんでいった。妻、ふたりの門人と自分、あわせて四人で乗りこんだ。

はじめの妻の石橋織瀬を三十一歳でうしなってから六年目の文政元年十一月に篤胤は有力な門人のひとり、武蔵（埼玉県）越谷の油商人、山崎篤利の斡旋で後妻をむかえた。越谷の豆腐屋の娘が篤利の養女になったうえで篤胤の妻として嫁いできて、先妻の名をついで織瀬と名乗った。

あたらしい織瀬は篤胤の子を産まなかったが、そのかわりにとうか、初代の織瀬よりはさらに鮮明に「学者の妻」の姿を見せている。織瀬が二番目の妻になってから篤胤の著作の刊行がさかんになつたのは織瀬の里方の山崎家から援助がおこなわれたにちがいない。まさに「学者の妻」としての内助の功だ。

夫の篤胤といつしよに山崎美成の家に乗り込んでゆく織瀬の姿は、湯島天神や御成街道の道々、そして下谷長者町のひとの目をおどろかせたはずだ。家のなかでひっそりとしているよりも、夫とともに外に出て活動するのが好きな女性が想像される。

さて、一行四人は下谷長者町の長崎屋に着いた。

「昨日はどうも、すっかり面目をなくしてしまいました。今日はわざわざうかがったからからには、是非とも寅吉に会わせていただきたい」

応対に出たのが美成ではなくて美成の母だったから、とりあえずおだやかな態度で挨拶した。

「それはわざわざご苦労さまでした。じつは本日、まことにお気の毒ながら伴は他出。寅吉も七軒町の実家にもどりましてこれまた不在……」

いきおいこんで来てはみたが、美成も寅吉も不在と知らされてちからを落とし、帰るみちすがら、織瀬も門人も口をそろえて言うには、

「寅吉は七軒町の実家にもどっているそうです。それなら、これから七軒町へまわってみませんか」

それがよかろうときまり、池之端にまわってみた。せまい小路をぐるぐるとまわってようやくたずねあてた寅吉の実家は部屋が一間あるだけの、せまくるしい住まい。

母親というのが出てきて、

「寅吉でございますか。あれはさきごろ兄と口論して出ていったきり……」

しばらく姿を見せていないという。長崎屋で世話になっているのも母親は知らず、その長崎屋からもどってきた気配もない。

ここではじめて美成がウソを言っているのがわかったが、じつは美成のウソはそれだけではない。篤胤の一行四人が乗り込んでいったとき寅吉は長崎屋の奥の部屋にいて、篤胤の声を聞いて表に出ようとしたのだが、「隠れている」と言われ、仕方なく隠れていたの

が、あとになつてわかる。

湯島天神から下谷の長者町へ行つて居留守をつかわれ、それから池之端の七軒町へまわつて、ここは本当の留守、せつかく来たのを無駄にするのもつまらないから、母親に寅吉の幼児のころの様子をたずねてみた。母親は寅吉が生まれたころの話をしてくれたが、寅吉が神隠しになつたのは他人の話で知っているだけらしかつた。

母親から幼児のころの話を聞くにつけても寅吉本人に逢いたい気が高じてきて、美成のやりかたがますます嫌いになつた篤胤だ。

とはいつても、肝腎の寅吉の身柄は美成がおさえていることに変わりはない。はやる気持ちをしずめ、美成には贈物、屋代弘賢の手をわずらわし、母親の口添えもたのんで、ようやく十月の十日に美成から「明日は寅吉同道のうえ、そちらへまいります」と手紙の連絡があつた。

天の磐笛を見て寅吉は嬉しがつた

美成から「十一日に寅吉を連れてうかがいます」と言ってきたとき、湯島の気吹舎には佐藤信淵が来あわせていた。

「それはよろしゅうございました。先日には国友能当君もわたくしといつしよに遠い四谷から来て待ちぼうけ、まことに気の毒なことでしたが、明日はわたくしのほうから国友君に連絡したうえ、ともどもにうかがいましょう」

明日を楽しみに信淵は帰つていった。

さて翌日の十一日、朝のうちに屋代弘賢から「美成と寅吉は夕方にはそちらへ行くそうじゃ」と知らせがあり、昼過ぎには屋代翁みずから孫の二郎といつしよにいそいそとやってきた。

下総（千葉県）香取郡笹川村の諏訪神社の神官の五十嵐対馬が用事のついでに気吹舎に顔を出し、国友能当と佐藤信淵、備中松山藩士の青木並雄、門人の竹内健男、岩崎吉彦、守屋稻雄がずらりと顔をそろえて待つうちに、寅吉が美成に連れられてやってきた。

挨拶がすむのを待ちかねたように寅吉の言った言葉が篤胤をよる

こばせた。

「はやく磐笛(いわぶえ)を見せておくれ！」

「磐笛のことを、おぼえていたのか！」

「はやく、はやく！」

手を引かんばかりにして、篤胤は寅吉を気吹舎の神前に案内した。「これだ、磐笛だ！」

磐笛を目の前にして感激する寅吉——篤胤の胸に、まずは安心といった感じの熱いものがながれる。寅吉と自分の一体感とでもいえばいいのか、美成にはとうてい理解できるはずのない気分。

下総に旅行し鹿島と香取の両神宮に参拝したことがある。神宮に参拝した感激はそれとして、大小二個の天の磐笛を手に入れたのが大きな収穫だった。

大きいほうは長さが二尺九寸(約九十センチ)、中径は八寸(約二十四センチ)、腔口の径は約一寸(三センチ)、腔尾の径は二寸(約六センチ)の灰色のもの。小さいほうは長さが約一尺六寸で、灰白色。

『平田篤胤全集』の口絵写真で見ると、笛というよりは大型の石の枕といった感じだが、波の浸食作用によって穴が貫通し、息を吹きこめば妙なる音色で神の音楽を奏でる、つまり本物の笛だ。

篤胤は「天の磐笛」と名づけ、神から与えられたものとして尊重していた。ただし相当の重量だから手に持って吹くわけにはいかず、台に置いて、人間が顔を近づけて吹かなければならない。

あらゆる種類の楽器のなかで、神にもっとも近い感じを受けるのが笛だ。簡素きわまりない構造であるうえに、手にとり、唇をあてて息を吹きこんで音を出しているうちに、自分の息なのか神の吐息なのか、区別がつかなくなってくるだろう。そのとき、笛がいちばん美しい音色で鳴っている——ようにおもえてくる。

はじめて会った日、篤胤は寅吉に「天の磐笛」のことを話した。

だが、話しただけで、実物を持参して見せたわけではない。この日

——十月十一日、はじめて寅吉は磐笛を見て、たちまち魅入られて

しまった。

磐笛に顔を近づけ、まるで長いあいだ親しんできたかのような自然のかたちで唇をあてて息を吹きこんだ。

岩間山の修行のなかに笛の稽古があったのは篤胤も推測していたところだが、それにしても、はじめて手にする磐笛を、これほどやすやすと鳴らすとは！

「あちらには風砲があるよ」と寅吉はいった

空気を込めて撃つ鉄砲——風砲の話は寅吉がいだしたのか、それとも国友能当がしびれをきらして質問したのか、それはわからないのだが、ともかくも「風砲」が話題にのぼってきた。

「風砲……ああ、あるよ」

いとも簡単な様子で寅吉がいいはなったものだから、その場にもたものは顔を見合わせておどろき、なかでも国友能当は顔色を変えて驚愕をあらわしたが、それを押さえてつきつぎに質問を發した。

国友能当が「気砲」「風砲」をつくったのは文化年中であつたと斎藤月岑の『百戯述略』に書かれている。

気砲は俗に風砲ともいい、もともとはオランダでつくられたもので「ウイントルウル」と呼ばれていた。文化年中、近江の鉄砲師の国友能当がオランダから輸入されたものを手本に製作した。

鉄の袋に空気を入れて圧縮し、その袋を鉄砲に接続して弾を發射する仕掛けになっている。三〜四分（一センチほど）の厚さの板を九尺（一メートルほど）はなれたところから射抜くちからがある。火薬も火縄もつかわないのがいいところだが、二発も撃てば空気を消耗してしまうので三発とは撃てない。軍事よりは子供の遊び道具にしかならないのがオランダ製のウイントルウルだ。

国友能当がこれに改良をくわえ、医師の山田大円と協力してつくった気砲はオランダ製よりも強く、厚い板を射抜くちからがあるといる。文化年中から製作をはじめて文政になって完成した——これが『百戯述略』の気砲紹介の記事のだった。

文化年中から手がけて文政になって完成したという、その文政十三年（天保一・一八三〇）に国友能当から直接に風砲の話聞いた細野要斎（名古屋藩士）の『有得漫記』にはこういう記事があるそうだ。

「国友能当は語った——多くの家から風砲製作の注文をいただいた。名古屋藩からも四、五挺を、幕府からも注文をいただいた。一挺の製作費は六十両ほど。風袋にいちど風を詰めれば二十五発くらいは発射できる」（森銑三「国友一貫斎」から意訳引用）

寅吉がはじめて気吹舎をおとずれた文政三年十月十一日は、風砲改良の途中であったと推測され、だからこそ能当は、寅吉がこともなげに「あちらにも風砲はあるよ」といったのに顔色を変えるほどおどろいたわけだ。

寅吉が「あちらにも風砲はあるよ」といっても、能当は見に行けない。能当はオランダから舶来した風砲に改良をくわえることはできるが、寅吉が「あちら」という、その仙界に行くことはできない。岩間山には登れるが、岩間山の幽界を見ることはできない。

「芦根石の笛」

笛の話を、もうすこしつづける。すこし、では終わらないかもしれないが——

寅吉がはじめて気吹舎に来て天の磐笛をよるこんだのが十月十一日、篤胤はつぎの日にすぐ門人の岩崎吉彦を長崎屋に走らせ、昨日の礼とあわせて、こういわせた。

「笛をつくるための竹を用意しております、ちかいうちに寅吉をお貸しいただきたいとのございます」

その吉彦が寅吉を背中に背負ってもどってきたから、篤胤はおどろき、よろこぶ。長崎屋では、ひとつの事件がおこったのだ。

ちかいうちに寅吉をお貸しいただきたいとの伝言をつたえたところ、美成の母親が出てきて、いった。

「寅吉は、あなた、いまではすっかり流行りっ子でございましてね。

じつは今日もはやくから俣といっしょに出かけている始末……」
そこへ奥からとびだしてきたのが寅吉だった。

「笛をつくる竹、買ってくれるんだね。はやく行こう！」

他出しているといった、その口がかわかぬうちに当の寅吉があらわれたから美成の母親はおるおるとまごつき、挨拶もそこそこ、吉彦は寅吉の手をひっぱるようにして下谷長者町から湯島天神下へ走ってきたと、こういう次第。

篤胤は苦笑して、吉彦にいったものだ。

「お前はいつも遠慮のない男だが、今日だけはその無遠慮が役に立ったなあ」

そういう間も惜しむかのように、ずかずかとあがりこんだ寅吉は神前に座りこみ、磐笛に顔をちかづけて吹き鳴らしはじめる。

「これほど面白いものはない。笛というものは、まったく、ほんとうに好いものだ！」

すぐちかくは湯島天神、境内から笛の音が聞こえるなら珍しくもない。天神の境内ではなく、天神男坂下の気吹舎こと平田篤胤の家から聞こえる笛の音は、天神から聞こえる笛の音にくらべると破調と言わねばならないのだが、だからこそかえって、ひとを酔わせる不思議な調子と色にあふれている。

ほおっておけば、寅吉はいつになっても笛から離れないように見えた。「ちよつと休んで、お菓子でも食べなよ」とすすめる声も耳にはいらぬようだ。

そこをなだめすかして笛から離れさせ、菓子を食べさせ、磐笛から石そのものをめぐる話に話題をうつしていった。

「石笛というものは……」

「むかしは石で剣をつくっていたことがあるそうだが……」

「月に穴があいているのを、知っているかな？」

「空気が凝って、固まったもの、それが空の星なんだよ」

「みんなは人魂(にこたま)があらわれるのを大騒ぎするけれど、人魂がどこへゆくのか、については気にならないようだ。じつはね……」

議論に熱がはいってきたとき、となりの家で、なにやらさわぐ気配。庭木にトリモチを塗っておいたのへ、ヒヨドリがかかったらしい。

そうと知った寅吉が、「あのヒヨドリを放して見せようかな」といった。「すこし、水がほしいんだが」というから、いたずらでいっているわけではない。

茶碗に水を入れてわたすと、寅吉は縁側に立ち、手で空を切る真似をしてからムニヤムニヤと呪文をとえ、指先で水をチヨツチヨツとはじいている。

となりの家の庭木にヒヨドリが貼りついてもがいているのが見えるが、三十間もはなれていて、呪いがとどく距離ではない。

「せつかくつかまえたものを放しては、トリモチを塗ったひとが気をわるくする、止めさせなさい」

これは失敗するにきまっている。寅吉の面目をなくさないためにも、隣家への気兼ねを口実にして止めさせればいい——篤胤は止めさせようとしたが、そうと気づいた寅吉が「シイーツ」と制するの
で、もはや止めようがなくなった。

「ああっ、右の羽が離れたぞ！」

叫び声にさそわれ、篤胤が思わず立って縁側にゆくと、ヒヨドリの右の羽が枝から離れて羽ばたき、左の羽ももうすこしで枝から自由になるところだ。だが、からだそのものには何本もの小枝がからみついていて、離れそうもない。

おしいな、もうちよつとのところだが——寅吉はなおも呪文を言いつづけ、そのうちにヒヨドリのからだだがそっくり枝から離れ、バタリと落ちて下の枝にとまった。しばらく羽繕いしたかとおもうと、ヒヨドリはなにもなかったように飛びさっていった。

ヒヨドリが貼りついていたあたりの枝をしらべてみると、トリモチは細い糸のようになっている。寅吉の呪文のちからによってトリモチの粘着力が弱くなった、篤胤としてはそうとしか考えられない。

芦根石(あしねいし)の笛のは話を書く予定だったが、途中から逸れて

しまった。ここで節をかえることにする。

寅吉を惹きつけるには笛の話をするにかぎると、わかつてはいてるんだが……

トリモチに貼りつけられ、もがいていたヒヨドリを茶碗の水と呪文で自由にしてやった——たいしたことをやってのけて見せたのに寅吉は、なんとも思わぬふうで、

「さあ、はやく竹を買いにつれていっておくれよ。笛をつくる竹を買ってくれるって、約束したじゃないか！」

「竹は買ってやるよ。そのまえに、風神を祀る幣の切り方を教えてくれないか。そのあとで竹を買いに……」

「幣の切り方なんか明日にして、さあはやく笛の竹を……」

なだめすかして承知してもらい、気の変わらぬうちにと、紙と刃物をならべた。

寅吉は不承不承の様子で紙を切りにかかったが、すぐに手をやめ、立ち上がって縁側に出て空を見ていたが、

「だめだよ、今日は……」

「なぜ、今日はだめだと……？」

「風神を祀るのは遊びじゃないんだ。風神を祀る幣を切れば、まず東の空に雲がわきおこり、雲が東から西にうつれば風が吹いてきて雨になる。雨になつては竹を買いにゆけなくなるだろう。だから今日は幣を切るのはやめにして、竹を買いにゆこうよ。幣の切り方は明日でもいいじゃないか」

じつに理路整然としている、これが十四歳の寅吉の言葉なのだ。

寅吉の言葉の圧力篤胤は息がつまりそうになったが、気をはげまし、

「遊びじゃない、幣を切ればしるしがあるとかわかってるからこそ切り方を教えてほしいと頼んでいる。雨が降る、風が吹く、それがどうしたッ、わたしが自分で竹を買いにゆく！」

それでも尻込みするのを、なだめ、すかして風神を祀る幣を切っ

てもらい、祈りをささげて神を幣に移すところまでやってもらってから、神棚におさめた。

すると、果たして東の空に雲がわきあがって西にうごき、風も吹いてきた。

「ほらほら、風が吹いてきたじゃないか。はやくはやく、幣を出してくれ！」

「神棚におさめたばかりなのに……入れたり出したり、そのように粗末に幣をあつかってはなんのではないかな」

「いいから、はやく出して！」

神棚から出してきた幣をわたすと、寅吉はそれに祈りをささげ、返してよこした。

「風神を封じこめたから夕方までは雨は降らない。けれど、夜になると雨になるよ。だから、はやく……」

はやく竹を買いにゆこうと催促する。

篤胤は立ちあがり、門人の稲雄と寅吉の三人で筋違外の竹川岸まで竹を買いにゆく。

筋違の御門の外側がすなわち筋違外で、見附があつた。日本橋から来て、中山道につづく道と御成街道が分岐する地点だから筋違というわかりやすい名前がついている。いまは神田郵便局のあるあたり。

湯島天神の男坂下から筋違へゆく道は下谷長者町の横、つまり山崎美成の長崎屋のちかくを通ることになるから、寅吉が里心をおこさぬよう、美成に気づかれぬようにと篤胤も稲雄も緊張したにちがいない。

「七韶(ななせう)の舞につかうリンという琴があるが……」

「短笛といつても……」

「羽扇は……」

つきからつきへと話題が切れないようにつとめたのは、もしや美成か、美成の母親に見つかってはまずいとの気兼ねからだ。

竹を買ってもどり、九尺と一丈の二本に切らせていたところへ美

成から寅吉を迎える使いがやってきた。まだまだ問いたいことはあったのだが、美成からの使いがやってきてはやむをえない。寅吉は「また明日」と、名残惜しそうな表情をのこしてひきとられていった。

寅吉がひきとられていってまもなく、寅吉が予告したとおり風が出て、氷雨さえ降ってきた。

岩間山にもどる日がちかづいてきた

師の杉山組正の指示があつて、寅吉は十一月のうちには岩間山にもどらなければならぬ。

あれも聞きたい、これも聞きたいのに寅吉の身柄は山崎美成がおさえでいて、篤胤の思うとおうりには事がはこばない。篤胤の気は焦るばかりだ。

材料の竹は買ってきてあるから、寅吉を呼びよせ、ちからを合わせて幽界の笛をつくらせたい。音曲のことは得意ではない、細工も好きではない篤胤だが、笛ができあがる過程を見ていれば幽界のことが一歩ふかくわかるわけだし、「幽界にはこういう笛があるんだよ」と、世間に示してやれる。

美成はなかなか寅吉をよこしてくれない、寅吉が岩間山にもどる日はちかづくばかり、笛のことはあきらめなければならぬのか——ア—アツと溜息をついたのを門人の竹内健男と守屋稲雄は、いかにも辛そうな表情で見ている。

ふたりは、師の心痛はわれらの心痛とおなじと意見一致したらしく——それはあとからわかるのだが——寅吉の母と兄をうごかして寅吉の身柄をひきとってしまおうと作戦をたてた。

——寅吉の母や兄は寅吉がどこにいるのかさえ知らないようだ。親権者が知らないのだから、山崎美成は寅吉の主人とは言えない。ならば母や兄の名義で「寅吉を返してほしい」と言つてやれば、美成としては拒めないはずだ。

竹内と守屋に言い含められた寅吉の兄が長者町にゆき、「家にも

どれ」と伝えた。しかし、もともと自分の家にいるのが嫌だった寅吉である、「家にはもどりたくない」とつっぱね、せっかくの名案も実をむすばない。「湯島天神の先生の門人の方からこつそりとたのまれたのだ」とうちあければ寅吉は承知したかもしれないが、手の内が美成に知られるとかえって厄介なことになる。

竹内と守屋に「じつはと……」と寅吉奪回作戦の失敗をうちあけられ、師弟三人が失望の顔をつきあわせていると、表で、聞き覚えのある声がした。篤胤の家に出入りの大工さんの声だ。

「あの天狗小僧さんが、たったいま、七軒町の方角めざして走ってゆきましたよ！」

それとばかりに竹内と守屋が立ちあがって走り、やっとのことで追いついた。

まず長い笛をつくろう

「どこへ、行く？」

「岩間山へ行く。大切なものを取りに、まず家にもどってから……」腕をとり、ひきずるようにして気吹舎の門口まで連れてきた。

篤胤も出ていって、

「岩間山へは十一月のうちに登ればよろしい、そういうことになっていたのでないかな？」

「急な用事ができた。山にもどるときには忘れるなよと師匠にいわれているものがあるから、家にもどって取り、すぐに山に登る」

寅吉の目はつりあがり、いつもとは様子がちがっている。

「それじゃあ笛はつくれないな、残念だよ」

「どうだね、もう一度だけ響笛を吹いてみては。あれほど好きな響笛を……」

咄嗟のことで返辞につまっている寅吉を、竹内と守屋が抱きかかえるようにして家にはこびこんだ。

寅吉もすこしは気がおちついたらしく、

「それじゃ、いまのうちに笛をつくってしまおうか。だけどね、笛

をつくつたらすぐに放しておくれよ。ああそうだ、家にある大切なものを、まず先に取ってこなくては……」

腰をあげようとするから、

「われわれが代わりに取ってくるよ。おまえはここで、はやく笛づくり……」

「おじさんたちが行っても、どこで、なにを探すのか、わからないじゃないか」

竹内と守屋、そして寅吉が三人そろって七軒町に行った。寅吉の兄は惜別をおしんで泣いたが、母はもうあきらめているらしく、洗い清めた肌着をそろえて出してきたが、

「おつ母さん。山では、おなじものをふたつは持てない掟なんだ、要らないよ」

母の肌着も、兄がさしだす別れの杯も、寅吉は受け取らなかつた。竹内と守屋は、寅吉の毅然たる様子に感激したはずだ。本物の天狗になるにはまだ時間がかかる寅吉だが、すくなくとも天狗小僧にはなっている寅吉にふさわしい毅然たる態度だつた。

岩間山での修行のあいだにしつけられた掟にはちがいないが、それを寅吉は自分のものにして自分の行動を律している。十四歳の子供には見えない。

寅吉が「大切なもの」といつていたのは、筑波山の六所神社の白石丈之進からわたされた手形だつた。手形とともに気吹舎にもどり、いよいよ寅吉は竹の笛をつくりにかかる。

九尺と一丈の長さの竹だ、いったいどうやって節を抜くんだらうといぶかしく見ていると、「水と火箸をくれ」と言い、竹のなかに水と火箸をいれてから掌で蓋をして、庭石に垂直に打ちつけた。

何度か打ちつけているうちに、ストーンと音がして節が抜けたのがわかる。火箸をぬきとり、こんどは篠竹の長いのをつつこんで節の残りをきれいにし、鼠歯の錐で息穴をあけると、たちまち笛ができあがった。

「さあ、山に行く！」

たちあがるうとするのを、左右から寄ってたかって止めようとする。寅吉は、ちからづくでも振り切ろうとして、もがく。

美しい場面ではない——篤胤は、ふと思いついて膝をたたいた。

芦根石の笛

「寅吉よ、ここにある磐笛よりも、ずーっと良い音を出す笛があるんだが、吹いてみたいとは思わないかね。芦根石の笛という名の笛で……」

「アシネイシの笛……？」

寅吉の気がゆれたのはまちがいない。そこをねらって、いまだ！

「吹いてみたいと思うなら、取り寄せてやってもいいんだが……」

語尾の調子をおとし、ムニヤムニヤとやって気を惹いてみる。

「アシネイシの笛か……その笛がくるまで待とうかな、待ってもいいよ」

わざと大騒ぎして岩崎吉彦を伴信友のところに使いに出した。芦根石の笛は伴信友のところにある。

篤胤は去年、上総（千葉県）に旅行した。浜辺を歩いていて、面白いたちの石笛を二個ひろって、「芦根石の笛」と名づけ、ひとつを屋代弘賢、もうひとつを伴信友に贈った。

じつは昨日、信友がやってきて寅吉の笛好きが話題になった。

「それなら、いつか貴兄にいただいた上総みやげの芦根石の笛、あれを吹かせてやれば、よろこぶだろうね」

信友は牛込矢来下の若狭藩酒井家の中屋敷に住んでいる。湯島天神下からは一里半はあるから、岩崎が笛を貸してもらってもどるには時間がかかる。そのあいだを、どうやってつなげばいいか。

ひょいと気がついたのは寅吉の、とつぜんの岩間山ゆきだ。十二日にはあんなに機嫌がよく、うちとけていたのに、今日はそわそわとして、すこしもはやくこの家を出て岩間山に行きたい様子、いたい何があったのだ？

「平田篤胤は足止めの呪いをかけるぞ」

「ここは率直にたずねるのがいちばんだと思ったから、聞いてみた。なあ、寅吉よ。どうも、おまえの様子はおかしいぞ。なにか、あったね？」

寅吉は口をつぐみ、なにがあっても答えないぞという顔をしている。言わずもがな、というもので、こうなれば大人と子供のあらそい、岩間山の修行ではこういう場面のやりとりまでは教えないはずだ。言ってしまったえよと、やんわりと脅しをかけたら、寅吉は軟化した。

「湯島天神下の先生はいろいろと呪いを知っている、おまえに足止めの呪いをかけるぞと教えてくれるひとがいた。足止めの呪いをかけられては、おれのこれまでの修行が無駄になってしまう、それは困る、かなわないと思っただから、いそいで山に登ってしまおうと……」

「これには篤胤もおどろいた。」

神代のはなしを本に書くことはある。気吹舎の看板をだして弟子をとり、神代のことを教えてもいる。幽界や仙境に強い興味をもっていて、それについて話したい、本にも書きたい。

だが、呪いをまなぼうという気はないし、ましてや呪いを使おうという気はさらさら持っていない。自分がいちばん関心と興味をもっているテーマは、呪いで解決するようなものではないのだ。

篤胤は呪いを知っている、足止めの呪いをかけて山にゆけないようにするぞ、などとけしからんことを教えたのは山崎美成にちがいない。寅吉は口をつぐんで名を言わないが、美成のほかに寅吉にこんなことを言う者がいるはずはない。

「わたしが呪いを知っている、呪いを使うなどとは、とんでもないこと。おまえが志した道だ、なんとかして成就させてやりたいものと、そればかりを思っている。だからこそ、美成がおまえを寺に入れ、僧にしようとするのを邪魔してきたではないか」

これで寅吉も、いくらかは心をなごませたように見えた。

「この石笛、万世の神界でおつかいくだされば本望」

伴信友からあずかった石笛を手に、岩崎吉彦がようやくもどってきた。

「伴先生から、お手紙を……」

「手紙を、どれどれ……」

「先生にではなく、その、寅吉君にわたしてくれと」

伴信友から天狗小僧寅吉にあてて一通の書状がしたためられていた。原文を読みくだして紹介しておく。

石笛ご懇望のよし、うけたまわりおよび候ところ、篤胤よりもらい候て所持いたしおり候間、進上いたし候。万世神界にてご重宝くだされたく候わば本望たるべく候なり。

文政三庚辰年十月十四日

白石平馬君

伴信友

信友が自分に手紙を書いてくれたと知って寅吉はおおよろこび、たちまち上機嫌になって、すぐに岩間山へ出かけるといいだしたから気吹舎の師弟一同はあわてた。

寅吉が岩間山へのぼるのを止める権利はないが、そうかといって、ここで山に行かれてしまつてはこれまでの苦労が水の泡になってしまう。

門人のなかに智恵のある者がいた。

「もうおそい。山行きは明日にして、今夜はみんな目隠し遊びをやつてすごしてはいかがでしょう」

目隠し遊びと聞いて寅吉は手をたたいてよろこんだ。

「それじゃあ寅吉さん、今夜はここに泊まつて、山行きは明日にする、それでいいかな」

「山へ行くのは明日でいいよ」

気の変わらぬうちにと平田篤胤をはじめ竹内健男、佐藤信淵、五十嵐対馬、守屋稻雄、岩崎吉彦といった気吹舎の面々が寅吉をまじえて、「亥の刻すぎるまで」というから夜の十時すぎまで、「オニ

さん、こちら、手の鳴るほうへ」と目隠し遊びに興じた。

平田篤胤と佐藤信淵といえば、後世ではその名を口にするだけでも恐ろしい、ガチガチの皇国主義者の印象が強い。

昭和時代の小説家の堀田善衛が「平田篤胤という国学者の名を見ると、いまでも私はいい気がしない。なにやら気味がわるくなってしまう」と書いたのは、その、おそろしい皇国第一主義者のイメージの篤胤なのだ。

湯島天神の男坂下の家で、天狗小僧の寅吉をまじえ、「オニさん、こちら、手の鳴るほうへ」と目隠し遊びにふけていた事実を重ねると、恐ろしいイメージは崩れてしまうのか、それとも、目隠し遊びこそ皇国第一主義者にふさわしい時間の過ごし方だということになるのか？

(3 章 ・ 終)

4章「寅吉が帰ったあとは心しずかに」

熱冷ましの呪い

湯島天神の男坂下、平田篤胤が主宰する気吹舎——文政三年十月十四日の夜は天狗小僧寅吉をまじえた目隠し遊びの興奮のなかに更けていった。

寅吉ははしゃいで、「面白い、もっと遊ぼう」といったが、夜が明けたらかならず遊ぶからと左右からなだめ、ようやく寝かしつけた。

寅吉は目隠し遊びが気に入った。

キャツキャツとはしゃいで目隠し遊びに興じるのに、十四歳、しかも男の子の寅吉はふさわしくないだろう。このころの町人の子は男でも女の子でも、十三歳になれば親の稼ぎを手伝うか、他人の店の丁稚になるか、ともかくも世間への第一歩をふみだしている。寅吉が世間への第一歩をふみだしていないとはいえないが、それにしても目隠し遊びはふさわしくない。

ふさわしくないといえば、寅吉を引き留めておくのに目隠し遊びの手を考えた門人も、それは名案だと手をうって目隠し遊びを先頭でやりだした平田篤胤や門人たちも、地位や年齢にふさわしい遊びをやっているとはいえない。

だがしかし、本居宣長の「没後の門人」と自称している学者の平田篤胤、その門人たちにふさわしい遊びは何かといっても、すぐに答えはみつからない。

そもそも学者は遊びなんかはやらないものだともいえるし、学問をしているのが遊びみたいなものだ、ともいえる。

明けて十四日、起きるとすぐに寅吉は「さあ、目隠し遊びをやるう」といって約束履行をせまる。

「おとなもいっしょに目隠し遊びをするとすると、昼間はだめだよ、夜になっから」

理屈にならない理屈をつけて逃げ、寅吉がどうするかと見ている

と、「夜になったらやるんだね」と、おだやかに納得してくれた。
目隠し遊びが面白いから、岩間山に登るのは十一月の末まで延ばすことにするとまで寅吉はいう。よほど目隠し遊びが気に入ったものらしい。

篤胤自身も門人たちも、目隠し遊びをやりたいわけではない。ともかくも寅吉を引き留めておく策略だとわかっているから、そこにうしろめたい気がある。うしろめたい気はあるが、寅吉が岩間山へ行くのを自分から延期する気持ちになってくれたのはありがたい。

朝のうち寅吉は、だれにもいわれず、自分から精をだして短笛を三管つくった。つくった笛を吹きながら七韶舞の手や唄、長笛と短笛の吹き方のちがいを教えてくれた。

昨夜のうちから篤胤は寒気を感じていて、今日の昼過ぎから悪寒になった。悪い予感がするから布団にはいつてやすんでいると、寅吉が「熱冷ましの呪いをしてやるよ」といつてくれる。

篤胤の寒気がなおらないと夜になって目隠し遊びができなくなる、それを案じての呪いだとかわかったが、いうのにまかせて熱冷ましの呪いをやってもらうと、たちまち熱が引いた。

- 6 5 -

「筑波山を目当てに行けばいいんだ」

夕方、屋代弘賢がやってきて、寅吉がいるのを知っておどろいた。

「天狗小僧は長崎屋にいるものと思っていたが……」

それがですねと、門の前を走ってゆくのを追いかけて腕をつかむようにして連れてきた昨日の出来事をかいつまんで話した。

「美成の世話になっているはずの寅吉を、わかたくしどもの一存で引き留めたのは義理を欠くことですが、それでもしなければいつになっても幽界の笛は出来上がりませんから」 屋代弘賢は仙境の笛が出来たのをよろこんでくれたが、そこは温厚なひとがら、「笛ができたからには、はやく寅吉を美成のところに戻したほうがよろしい」と助言した。

横で聞いていた寅吉が、口をはさむ。

「長崎屋の先生の世話になつてはいるが、奉公しているわけじゃない。遊びに来いよと言うから、行ったまで。この家にいるのも遊びのつもり、今夜もここで遊びたい。明日は長崎屋さんにもどろうかな」

それならそれでよかろうと話はきまり、その夜はまたまた目隠し遊びを楽しんで更けていった。

十六日の朝、竹内と守屋をつけて寅吉を長崎屋におくりとどけ、このつぎに寅吉の顔を見られるのはいつのことだろうかと寂しさをかこつているところへ旅装束の寅吉がやってきたから、嬉しいやら、困惑するやら。

「長崎屋の先生が、はやく岩間山に登れというものだから……」

美成がほんとうに「はやく山に登れ」といったのかどうか、そうだとすれば、美成の心境を変えさせたのはなにか、どちらもわからないことだけれども、「今夜はここに」と、泊ませた。

寅吉はひとりで岩間山に登るつもりらしいが、道は知っているのか、旅の費用は持つているのか？

「長崎屋の先生から八百文もらった。これまで岩間山への往復は師匠に背負われ、空を飛んでいったから地面の道は知らないが、筑波山をめざして行けばいいんだろう」

あっさりと答え、すこしも心配していないようだが、篤胤としては大切な宝物をひとりで旅に出す気持ちがして不安でならない。

守屋稲雄に筑波山の麓まで送らせようか、などと思案していたところへ、五十嵐対馬が下総の笹川に帰るからと挨拶にやってきた。

「寅吉は筑波山へ行く道を知らないそうだ。笹川までいっしょに行つて、おまえの家は何日か逗留させてやり、仙境のことをいろいろとたずね、それから筑波山へ送ってくれればいいが……」

笹川から筑波山へは近いんだから、と篤胤はいったようだ。笹川から筑波山は遠いとはいえないにしても、近い距離ではない。篤胤がわざと「笹川から筑波山は近いんだから」といったのは、寅吉の耳にはいるのを計算したうえのことだろう。

さて、別れは辛い。

寅吉の兄がやってきて別れをなげいた。なげきつつ帰ってゆく兄の背を見送りながら、寅吉はつぶやく。

「親兄弟の別れを辛く思わないわけではないけれど、あちらでは、泣くのを固く禁じられている。未練の気持ちのまま山にはいつて泣けば、修行のさまたげになる。だから、わざとつれなくしたんだ」

旅支度をととのえた寅吉と五十嵐対馬は十七日の朝、まずは下総の笹川めざして湯島天神男坂下の気吹舎を後にした。

寅吉は背丈よりも長い藤木の杖をつき、伴信友からもらった芦根石の笛を紐で腰にむすんでいた。笠は、草鞋は、と世話をする女たちは、いざ別れがせまると涙をながしたが、それを篤胤は「寅吉の修行の邪魔になる、泣き顔を見せるな」といつて止めた。

「幽界の知らぬ道を誰にか問わん」

篤胤は「岩間山幽界」にあてて一通の手紙を書き、それは寅吉に託された。ふとしたことから「貴山の侍童（寅吉）」に出会った事情を述べ、これをご縁に、仙界の疑問について教示していただきたいと思うが、いかがでありましょうかと、礼を尽くした文章だ。一部を意識して紹介しておく。

「神世のときから顕界と幽界は別になっていることゆえ、幽界のことはこちらからうかがい知ることがかないませぬ」

「不肖ながら、わたくし、先師の本居翁の志をついで天神地祇の古道をあきらかにしようとするにわたって刻苦出精いたしてまいりましたが、凡夫の身ゆえ、おおくの疑念をかかえております」

「これをお近づきのはじめとして、そちらの様子について教示をいただき、疑念を解決したいと存じますゆえ、なにとぞおゆるしをいただきたいと存じます」

「侍童が下山するとき、お返辞をいただきたく、ひとえに願ひあげたてまつります」

「仙界幽界について教示のこと、おゆるしいただけますならば、貴礼として生涯にわたってできるだけの祭事をつとめさせていただきます

ます」

「さきごろ著述いたしました『靈の真柱』ともうす書をご覧に供します。神代の古伝にもとづき、およばずながらも幽界のことを考証いたした書であります」

あて名は「常陸国岩間山幽界 双岳山人御侍者衆中」、自分のことは「平田大角 平篤胤」と名乗った。

後文には、寅吉が自分の家にたびたびやってきて懇意にしていること、このたびは門人の五十嵐対馬に「お山のふもと」まで送らせること、寅吉の修行成就を願っていることなどが書き添えてあった。

寅吉との別れをおしみ、かつ修行にもどる寅吉へのはなむけとして篤胤は五首の歌をつくった。

「寅吉が山にし入らば幽世の 知らえぬ道を誰にか問わん」

「いくたびも千里の道よありかよい ことおしえてよ寅吉の子や」

「神ならうわが万齢をいのりたべと 山人たちに言伝てをせよ」

「万齢を祈りたまわむ礼代は わが身のほどに月ごとにせん」

「神の道に惜くこそあれ さもなくば さしもの命のおしけくもなし」

寅吉が山にもどったあと、篤胤は「心しずか」になり、寅吉から聞いたことを筆記、整理して十日ばかりをすごした。この十日のあいだの筆記が『仙境異聞』の「上之二巻」以下になっている。

「心しずか」とはいいながら篤胤は興奮していた

心しずかな日々が十日しかつづかなかったのは篤胤にとって幸いだったのか、幸いではなかったのか、他人からは判断できないところだ。

その十日のあいだ、篤胤は興奮していたはずだ。

自分で「心しずか」だといっている日々について他人が「興奮していたはずだ」と推測するのは矛盾しているように聞こえるかもしれないが、そうとばかり決めつけるのはよろしくなからう。「心しずかな興奮」はありえない心境ではないはずだから。

『靈の真柱』を書いてからというもの、篤胤の頭は「顕界——この世」と「幽界仙境——あの世」のことでいっぱいになっていた。

幽界とか仙境というものが確実に存在すると篤胤は信じている。

篤胤は通俗な言葉づかい——つまり文語ではなく口語で自説を語るのが得意な学者だ。幽界仙境の存在を語る言葉は、こんな調子であつたらう。

「もしも、ですよ、幽界や仙境が存在していないとしたら、われわれ、たまったものじゃない。これまでは人間が死んだあとの魂は『汚い黄泉の国に行くんだ』などと言われてきましたが、とんでもない。黄泉の国は汚いうえに、真っ暗、いつになっても夜ばかりの国らしいんですよ、俗に『生きた心地がしない』といいますが、まさにそれ」

「人間、かならず死にます。死ぬのは不幸でもなんでもないが、死んだあとの魂の行方が真っ暗な黄泉の国だとすると、こんな不幸はないわけだ、そうでしょう」

魂が黄泉の国に行くわけはない、とすると魂はどこへ行くのか？

——これを自分に問いかけ、自分で答えをだすのが学者としての使命だと決意した。

そして、答えは出たのである——死んだあとの魂は幽界、仙境に行き、そこで永遠に生きる。これが証明できれば死ぬことなんか哀しくもない、恐ろしくもない。そうなれば生きているのも楽しくなる。

「だから、幽界とか仙境とかいう場所が、どこにあるのか、それさえはつきりすれば問題はなんにもないわけですよ」

いろいろと考察した結果、幽界や仙境はこの世の外にあるのではない、この世のなかの別の次元に存在するのだとの結論に達した。

幽界はこの世のなかに存在するのだが、次元がちがうから、ふつうのひとの目には見えない、手では触れられない。

それならば、ふつうではないひとを探しだして、仙境とはどういうところなのか、教えてもらうのが手っとり早い。

その、ふつうではないひとの、ひとつの種類が天狗ではないかと篤胤は考えた。天狗といわれるひとは——または天狗といわれるものは——仙境の生活体験があるわけだから、天狗を探しだして仙境の生活体験を語ってもらるのが早道だ。

さてところで、どこどこに天狗があらわれたとか、天狗にさらわれたといった話はときどき耳にするが、行きちがつて会えなかったりして、チャンスがなかった。

そこへ寅吉という天狗が登場してくれたのだ。寅吉は天狗にさらわれたのでもなく、天狗を見たのでもなく、「おれは天狗だよ」と言っている。自分でいっているんだから、これほどたしかかなことはない。

天狗を探す段階はおわり、いまは天狗小僧寅吉の手づるによって仙境の住民の代表者の杉山山人から直接に話を聞く段階になってきた。

岩間山にもどった寅吉が、どういう返辞をもってきてくれるか、あれやこれやを思うから、篤胤は興奮せずにはいられない。

仙境は存在する——実感

篤胤が『霊の真柱』を書いたのは文化九年（一八一二）三十七歳、翌年に刊行された。ぜんぜん関係はないが、ロシアに侵入したナポレオンがライブチツヒで大敗を喫し、連合軍のナポレオン包囲がじりじりとせばまっていた年だ。

『霊の真柱』では「冥府」や「幽冥」という言葉をつかうことが多かった。

「そもそも、その冥府というは、この顕国(うつつ)をおきて別(こと)に一処あるにもあらず、ただちにこの顕国の内、いづこにも有なれども、幽冥(冥府)にして現世(うつつ)とはへだたり、見えす。かれ(ゆえに)もろこし人も幽冥または冥府といえり。さて、その冥府よりは人のしわざの良く見えゆるを、顕世よりは、その幽冥を見ることあたわず。それを譬えば、燈火の籠を、白きと黒きとの紙もて

中間（なから）より張りわかち、そを一問におきたらむがごとく、その闇方（くらまた）よりは明方（あきまた）の良く見ゆれど、闇方よりは明方の見えぬをもてこの差別（ちがひ）を曉（さと）り、はた幽冥のかしこきことをも曉りねかし」

それから八年目に寅吉に会って、しばしば接触した体験を書いた記録では「仙境」という言葉を使い、「冥府」「幽冥」はほとんど使わない。

篤胤が意識して変えたのかどうか、それはわからないが、「冥府」や「幽冥」が「もろこし人」の言葉だから使うのをやめて「仙境」にしたわけではないだろう。寅吉を知ったことで、それまで「冥府」「幽冥」といつていたものがにわか実在のものとして感じられるようになった。そうになると「冥府」「幽冥」では間にあわなくなり、「仙境」に変えた次第ではなからうか。

この場合、「冥府」や「幽冥」は漢語の熟語だが「仙境」はどうなのだろうか、日本人の発明した熟語ではないのか、といった詮索には意味がない。

ただし「冥府」「幽冥」とくらべてみて「仙境」には「地球」「地上」のイメージが強いような気がする。「あの山のむこうの、あのあたりが仙境」と指示できるような感じがする。篤胤が意識せずに「冥府」から「仙境」へ転換したとは、いえないようだ。

篤胤が岩間山へ探検に出かけなかったのはなぜだろうか？

——常陸の岩間山には天狗がいるそうだ、岩間の天狗の見習いの寅吉という小僧が湯島や下谷にあらわれた！

いまならばテレビが取材におしよせる、週刊誌が殺到する、ついでに観光客がツアーを組んでと、おおさわぎになる。ところが山崎美成も平田篤胤も「いざいざ岩間山へ！」とは叫ばなかった。

なぜなんだろう？

天狗はこちらから見にゆくものではない、天狗のほうからこっちへやってくるものだという共通の認識があったからだ。

——認識だとかなんだとか、むずかしいことを言うものじゃない。珍しいものがあらわれた、それならその珍しいものの本場へ見におしかけるのが人間の正しい好奇心というものではないか。いったい、江戸時代の、あるいは江戸という都会の住民の好奇心はどうなっているんだ？

江戸時代の人間、江戸の住民に好奇心がないわけではない。好奇心はたつぷりと持っているが、この場合、かれらの好奇心は「天狗のふるさと、岩間山へ行こう！」という方向には発揮されない。

岩間山には天狗がいるという。それならば岩間山は天狗の世界なのであって、その岩間山へ人間がわざわざ登ってみても好奇心は満足されないのを、かれらは知っていた。

——その理屈がおかしいじゃないか？

おかしくはない。なぜなら、岩間山は天狗の本場であり、天狗の本場の岩間山に行つて天狗を見たところで珍しくもなんともないとわかつているからだ。天狗の本場の岩間山では天狗にたいする好奇心はぜんぜん無意味になってしまう、この理屈がわからないとは困ったものだ。

天狗の本場の岩間山から、天狗の本場ではない江戸に天狗小僧があらわれた。だからこそ面白く、江戸の住民たちは「天狗小僧の寅吉さんは下谷の長崎屋さんと湯島の気吹舎の平田先生と、どっちを気に入っているんだろう」などと噂をして、健康なかたちで好奇心を發揮させている。

寅吉のほかにも「天狗」といわれた者、「天狗だ」と自称した者があつた

正徳年中（一七一―一五）江戸は神田錦町の小間物屋の丁稚が天狗の客として招待された話がある。

正月の十五日、丁稚は銭湯へ行くと言って手拭いをもって店を出たが、しばらくして店の裏口に立っている。手拭いはどこへやったのか、股引に草鞋をはき、杖のような棒の先に藁苞をつけたの手

にしている。

「いったい、どうしたんだ？ とにかく中へは行って……」

主人にいわれ、まず足をあらって台所へあがったが、まるで他人行儀になっている。

「お土産でございます」

藁苞のなかから山芋をだして、おいた。

「土産といつても……銭湯へ行ったんじゃないのか」

「秩父の山奥へ……天狗の住まいで暮れの掃除などをやっております」

「暮れの掃除といつても、いまはもう正月……」

様子がおかしいから、いうだけのことをいわせてしまうことにした。

丁稚のいうには、去年の暮れに天狗にさそわれて秩父の山奥に行き、天狗の住まいの暮れの煤掃きをやっていた。正月の客がたくさんやってきたが、みんなお坊さんばかりだった。

言うことは奇妙だが、その後は格別のこともなく、ふつうの丁稚としてはたらいだ。(菊岡沾涼『諸国怪人談』)

文化七年(一八一〇)七月、江戸の浅草南馬町竹門のあたりに、とつぜん空から男が降ってきた。足の白足袋のほかは上から下まで真っ裸。

気をうしなつたまま番所にはこぼれ、医師の診断によると、病気ではないが極度に疲労しているという。そのまま休ませていると、気をとりもどした。

「京都の油小路二条下ルの安井御門跡の家来伊藤内膳の息子の安次郎」

はっきりと名乗ったのはいいが、ここは江戸の浅草だと知ると声をあげて泣きだした。

三日前、嘉右衛門という者といっしょに愛宕山に参詣、山上で帯をほどいて涼んでいたら、老僧がやってきた。

「おもしろいものがある、見たいだろうか？」

さそいに乗って腰をあげたまではおぼえているが、それから後に何がおこったのか、皆目わからない。

町役人が白足袋をしらべたところ、まぎれもない京出来の上物、土もついでいない。そのほかのことがいっさい不明のまま、伊藤安次郎と名乗った男は浅草の溜まり（浮浪人収容所）に入れられ、その後はどうなったのか、伝えるものがない。

京の愛宕山といえば天狗の本場のなかの本場といったところだから、これもまた天狗関係の事件にちがいない。（大郷信斎『道聴途説』）

平戸のご隠居こと松浦静山の好奇心はなかなかのもの、膨大な聞き書きと読み書きをあつめた『甲子夜話』にもいくつかの——何人かの——天狗が登場している。

平戸松浦家の江戸屋敷ではたらく馬屋中間の源左衛門が両国橋のあたりで気をうしない、我に返ったときには信濃の善光寺の門前だった。気をうしなってから半年ほどすぎたらしく、頭の月代が伸びぼうだいにのびて総髪スタイルになっていた。

運良く知人に会ったので江戸に帰ったが、どういうわけかコメやムギの食事が喉を通らない。仕方がないからサツマイモだけ食べていた。

おもしろいというか、奇妙というか、この源左衛門は子供のころから「神かくし」「天狗かくし」に縁がふかった。

まず、七歳の祝いの着物を着せられて氏神に参る途中で山伏にさそわれて出奔し、八年後に帰ってきたことがある。山伏と別れたのは相模（神奈川県）の大山で、まごついているところを村人にたすけられ、腰に出身地の上総の夷隅の地名を書いた札をさげていたので、それをたよりに宿送りで帰ってきた。

それから三年、おなじ山伏があらわれ、背中に背負われて空を飛んで降りたのは越中の立山だった。立山から加賀の白山につづく洞窟があり、そのなかの広間に十一人の山伏が住んでいた。

源左衛門をつれてきたのは権現というおそろしい名の山伏だが、

十一人のなかでは上座に位置していた。源左衛門は長福房という山伏名をつけられ、修行をさせられ、京都の貴船や鞍馬に何度も行った。

十九歳になったとき権現が「おまえは人界にもどしてやろう」と言い、天狗界から縁を切るということを書いた証明書と兵法の巻物二巻、脇差、袈裟を土産に上総の夷隅にもどってきた。巻物は村の神社に寄進したが、神官が巻物をひらいたところ、強い光が出て目がくらみ、読むことができなかった。

源左衛門は権現天狗とわかれたあとで松浦家に奉公し、またまた両国橋のあたりで気をうしなつて善光寺で我に返つたらしい。

源左衛門の異常な体験を記述したあと、松浦静山はこういう感想をもらしている。

「中間の言うところは虚実いずれとも判断しがたいが、妄言だと無視できるものでもないようだ。宇宙には、このような魔界が存在しているのだろう」

篤胤の門人、野山種麿の子も天狗にさらわれた

篤胤の身边にも天狗にさらわれた事件がおこっていた。

篤胤の門人で野山種麿という者がいた。数寄屋橋御門の東の南鍋町に住んでいた野山種麿には十五歳になる多四郎という子があり、からだが強かったので芝口の日蔭町、万屋安兵衛のところで養生していた。

文化十三年（一八一六）五月十五日の夕暮れどき、万屋の長屋の裏口に出た多四郎が天狗にさらわれ、行方がわからなくなった。庭に着物の片袖が、屋根に木履がのこされていたので「天狗にさらわれた」としか考えられない。

知らせを聞いて父親の種麿がかけつけ、近所のひとといっしょに探しまわったが、皆目わからない。鍋町にもどった種麿は一心不乱に祝詞(のりと)をあげて息子の無事と帰宅を祈った。

祝詞が終わるかおわらぬうちに万屋から使いが来て、「多四郎さ

んが帰ってきた」という。高いところから、ドサーツと音をたてて投げおろされたという。

医者をつれて万屋にかけつけると、たしかに多四郎の姿があり、死人のように疲労困憊していたのも医者の手当で回復した。

多四郎の語るのによると、天狗にさらわれて連れてゆかれた先でふたりの人間に会ったが、ひとりには伯父の万右衛門、もうひとりには従兄弟の藤蔵と知らされた。

万右衛門も藤蔵も二十年ほどまえにやはり天狗にさらわれてから行方がわからなくなっていた。伯父と従兄弟が天狗にさらわれたとき多四郎はまだ生まれていないが、話に聞いて知っている。

この話を篤胤は『玉禪』（巻三）のなかで紹介している。父の種麿が必死の思いであげていた祝詞が幽界にとどき、それを耳にした天狗が多四郎をなげおろして返してよこしたというのが篤胤の解釈だった。

最初の妻の死——幽界がなければ、わたしはもう妻の魂に会えないではないか！

この世には幽界、仙境がたしかに存在している——篤胤がこのことを確信するようになったのはいつごろから、そして、どういったきっかけからであったのか？

篤胤の師の本居宣長は幽界と顕界の別があることを認めていた。しかし宣長のいう幽冥の世は神々だけの世界であり、神々は幽冥の世から人間の世、つまり顕界を支配し、影響をあたえる関係にかぎられていた。顕界から幽界へ、つまり人間から神々にたいして影響をあたえる関係を、宣長は認めなかった。

この説について、篤胤は満足できなかった。はじめのうちは同感したからこそ自分を「宣長没後の門人」としたわけだが、そのうちに満足できなくなった。

宣長のいう幽界は人間の死後の魂の行方である——これは篤胤とおなじ——が、そこへ行き着いた魂にたいしては何の審判もおこな

われないらしい。俗な言い方をすれば、幽界に行った魂は「行ったきり」ということのようにだ。それなら、幽界に行っても仕方がないというものではないか。

人間が死ねば魂も死ぬ。死はすべてのことの終りであり、その先には何も無い——そのほうがわかりやすくなる。

わかりやすいけれども、篤胤は満足できない。

人間が正しく生きようと悪戦苦闘した結果についてなんの審判もないとしたら、正しく生きるということの意味がなくなってしまうではないか！

わたしの妻の織瀬は正しく、懸命に生きてきて、さきほど亡くなった。

妻の魂にたいして「正しかった」と審判してくれる場所、あとからわたし（篤胤）が行って、妻の魂に「正しかった」と審判されたのを確認し、ともどもに喜ぶ、その場所が存在していないとしたら、正しく生きる意味はなくなってしまうではないか！

であるから、幽界や仙境はこの世に存在していなければならぬ。古い記録によると、「この世」には「幽界」の存在が認められないそうだが、ならばその記録を無視すればいい！

— 77 —

幽界を信じるひとの代弁者——篤胤

どういう事情であったのか、若いころに秋田から江戸に出てきた平田篤胤は学者になろうと決心し、決心のとおり学者になって貧苦のなかにも展望を見つげるところまでこぎつけてきた。

学者とは何か、どういう学者に篤胤はなろうとしていたのか？

おおくのひとに喜ばれ、歓迎され、生きる意欲をかきたててやる人間——篤胤はそういうタイプの学者をめざしていた。

天狗小僧の寅吉を大切にするのは学説をまとめるための材料としてのこと、寅吉が天狗だからというだけの理由で特別あつかいしているわけではない。天狗小僧をひとりじめにして祭り上げれば、篤胤は教祖になってしまう。

幽界を信じるひとはたくさんいると篤胤は思っている。幽界からの使者の天狗を見たとか、天狗にさらわれたといった体験を語るひとがたくさんいるからだ。

天狗なんか幻想の産物にすぎないんだよ——そんなことをいって、どうなる？

天狗は幻想の産物にすぎないとして否定してしまったら、天狗の存在を信じてきたひとびと——ふつうのひとの大半が存在しなくなってしまう。そうになると、篤胤の学者としての生き甲斐もなくなってしまう。

篤胤は「じつさい的」な学者だった。「じつさい的」がわかりにくいひとのためには「現実的」と言い換えればいいだろうが、目の前に坐っている聴講者に、どうすれば自説を理解してもらえるかと四苦八苦する、そういう学者だ。「それについては何々の書物に書いておきましたから」と冷たくつきはなす学者ではない。

篤胤は『古道大意』というタイトルの書物を書いたことがある。「古道」「道」の字を見つめていると、道のためには我が身を捨てても、なんていう肩肘張った姿勢が連想されるけれども、篤胤はそういうタイプではない。

「極楽よりはこの世が楽しみです」——『伊吹おろし』という書物のなかで篤胤はこう書いている。

極楽の楽しみよりもこの世の楽しみを大切にしたいとおもう多数のひとを相手に自説を説きたい、それが篤胤の使命感だった。こういうひとが多数をしめていると見るところに篤胤の時代認識があった。

「わたしは物の怪を信じる、ふつうの人間であります」

平田篤胤が妖怪とか物の怪などといわれる異常、奇怪な出来事に興味をもち、研究をはじめ、意見を公表するようになった最初は文化三年（一八〇六）に『稻生物怪録』(いねものあはれ)を読んだのがきっかけだった。妻の織瀬に死なれる六年前、寛延二年（一七四二）、

徳川將軍が八代の吉宗のころのはなしだから、ふるいといえはふるい。

備後（広島県）三次（せき）の武士の息子の稻生平太郎という少年が比熊（ひぐま）山の物怪を統括する山本五郎左衛門の手下どもに一月にわたって苦しめられるが、産土の神の助けによつて打ち勝ち、わが身を全うすることができたという話だ。

平太郎の奇怪な体験は評判になり、平太郎みずから『三次実録物語』なるルポルタージユをまとめたと思われる。ただし『三次実録物語』のタイトルは他人が付けたものかもしれない。『三次実録物語』をもとに、おなじ三次藩士（三次藩はすでに広島の本藩に併合されていたが）柏正甫というひとがまとめたのが『稻生物怪録』の原型だという。

それから何年かすぎて、稻生平太郎は柏正甫といっしょに江戸にのぼったことがある。そのとき柏は平太郎にあらためて平太郎の体験を聞いたのだが、三次で聞いていた内容と変わるところはなかった。

そこで柏は、すでに筆記しておいたものを完成させ、序文をつけた。それが天明三年（一八八三）のことで、主人公の稻生平太郎は健在であったという。この時点で『稻生物怪録』は最終的に完成したことになる。

柏本『稻生物怪録』が別人によつて筆写されたのを平田篤胤が発見し、借りうけて読んだが、文字のまちがいや文章のまずいところがあったので門人に命じて校訂させた。それが平田本『稻生物怪録』で、『平田篤胤全集』におさめられている。

つまり『稻生物怪録』は篤胤の著作ではないのだが、序文で「自分はこの話を信じる」と宣言したのが篤胤の学者としての新しい方向を決定したと言える。

序文を意識、紹介する。

「世間の多くのひとはこの物語を信じて疑わないはずだが、物知りのひとは信ぜず、信じるひとを『愚かなものだ』と軽蔑するにちが

いない。

わたくし平田篤胤はどうかというと、世間の多くのひととおなじように、この物語を信じる。

物知りのひとは、われわれのことを『烏漣』(ウツリ)というだろう、『痴(チ)れ者』というだろう。みなさんのご自由ではあるが、この物語には、はっきりした証拠があるのを、どうなさるつもりなのだ。この世はあくまでも不思議なものごとで満ちているのに、自分ばかりは『不思議なものは何もない』と悟った気ているのは、なんともなげかわしいことだ」

『稲生物怪録』のあらまし

馬洗川・西城川・可愛川の三つのながれが合流して江川となるところに、海拔二百メートルの三次盆地がある。晩春から初春のあいだ、早朝は深い霧につつまれる。三つの川からあがる霧だとも、山の冷気が降りてきて霧になるのだともいわれる。三次の町の北、比高一七〇メートルの比熊山には三次氏が城をきづいていたことがある。

- 80 -

寛延二年の夏の夜、平太郎が力持ちの権八とともに比熊山に登り、肝試しとして古墓にしるしの札をむすびつけたところから、この奇怪な物語ははじまる。

平太郎は墓石にしるしの札を付けて下山し、その後の一月ばかりは何事もなかった。

七月一日の夜は大嵐、平太郎の寝間の明かりがふつと消え、障子に火がついて燃えあがった。

はね起きと、すぐに火は消えたから、これは奇妙と障子をあげようとしたが、あかない。

両手にちからを入れて一枚の障子をひきあげたとたん、うしろから毛ムクジャラのデックイ腕が出てきて平太郎の肩をつかみ、表へ引き出そうとする。塀の外には朝日のように巨大な目が見えた。

引き合ううち、平太郎の着物と帯がちぎられ、あおむけに倒され

た。居間にもどり、刀をつかんで敷居にくと、そのあいだに魔物は廊下にはいりこみ、巨大な光のかたまりになっている。

光をめざして刀を突きさしたが、手応えはない。そのころ、となりの権八の家には一つ目小僧があらわれ、権八は金縛りになっていた。権八は平太郎と魔物の戦闘の様子を耳にしているのだが、救いの手を出すどころではない。

そのうちに夜が明け、魔物は消えていた。平太郎と権八はちからをあわせて魔物を退治しようと誓うのであった。

これがいわば第一話で、それからはありとあらゆるタイプの魔物の出現、急襲、そして平太郎と権八の奮戦が展開する。

三日の夜には部屋の隅の鼠穴から女の生首が逆さになってあらわれ、髪の毛を足のようにつけて攻めよせてくる。平太郎の膝に乗ろうとしたので、平太郎が手で打ち払う、生首が乗ろうとする、のくりかえしの末に、生首の口から舌がのびてきて平太郎のからだを舐めはじめた。

生首が宙に浮いたすきに、平太郎はゴロンと横になってしまった。これで首はあきらめたようだが、天井に、なにか、うごめいている。よく見ると、青い瓢箪(ひょうたん)が蔓(つる)をひきずっていくつもいくつも闇のなかからあらわれてくる。青瓢箪の意味を計りかねているうちに、平太郎は眠りこんでしまった。

稲垣足穂『山本五郎左衛門只今退散仕る』

『稲生物怪録』に熟を入れたひとは多い。平田篤胤をはじめ、近代では折口信夫、泉鏡花、巖谷小波、そして昭和では稲垣足穂(ナキケルキ)がそれぞれの思いをこめて翻案をこころみた。

リアルな色と図柄を添えた『稲生物怪録絵巻』もつくられたことでもわかるように、稲生平太郎の異常な体験によせる関心は絶えることがなかった。『稲生物怪録絵巻』は一九八七年の雑誌「別冊・太陽」——日本の妖怪」に全巻がカラー印刷で紹介され、容易に見られるようになったのがうれしい。

稲垣足穂の翻案は昭和三十一年に『懐かしの七月』のタイトルで発表され、のちに『山(み)本五郎左衛門只今退散仕る』とあらためられた。その一部を紹介しよう。

「六日……十時スギニナツテ、台所ノ方ニ白イ色ノ、一抱エモアル、丸クテ大変柔ラカ相ナモノガフワリフワリと動き出シタ。才客タチハ互イニ顔ヲ寄セテ二度トソノ方ヲ見ヨウトシナイ。僕ハ又何事ガ始マルノカト見テイルウチ、下駄ガ一足飛ンデ来テ襖ヲブチ抜イテ、外へ出タ。兩人ガビツクリシテイルウチ、白イモノハ座敷ノ方へ舞ツテ来テ、叔父ト才客ガ顔ヲ寄セテイル所へフワリト落チカカツテ、パラパラト何カ振りカカツタカラ、御兩人ハワツト云ツテ飛ビ退イタガ、暫クハ物モ云エズニ居タ。落チタ物ハヨク見ルト、塩俵ノ古イ奴デ、パラパラト零レタノ八塩デアッタ。ヤヤアツテ兩人ハ夢ガ初メテ醒メタ様ナ顔ヲシテ、コソコソト帰ツテイッタ。僕ハ塩俵ヲ庭へ投ゲテ、夜伽ノ衆ハ却ツテ邪魔ダナト呟カズニ居ラレナイ」

稲垣足穂は『稲生物怪録』は「愛」をテーマにした事件の物語だとして読み、訳した。そういえば、「愛」がなくて、なぜ魔物たちは平太郎のまえにあらわれるのか？

山本五郎左衛門は三十日にわたって平太郎を悩ましたあと、正体をあらわし、つぎのように告白した。

山本五郎左衛門は神野悪五郎と魔界の王の椅子をめぐってあらそっていた。先に百人を恐怖させたものが魔国の頭になるという約束ができあがり、五郎左衛門は六十五人までは恐怖させたが、六十六人目の平太郎でつまずいた。五郎左衛門ははじめから百人を恐怖させなければならぬことになったが、それでも平太郎を恨まなかった。

恨むどころか、もしも神野悪五郎があらわれて平太郎を襲うときには、この小槌を手にして北に向き、「山本五郎左衛門、来れ！」と言って柱をたたけば神野は退散すると教え、小槌をあたえて姿を消した。

山本五郎左衛門は立ち去るときに「われを見送ってくれよ」とい

ったので、平太郎が五郎左衛門の背中に視線を当てると、肩ごしに冠に衣装を正したひとつの、腰から上だけの姿が目にはいった。

「これは産土神だ！」

平太郎は、自分ひとりで五郎左衛門と戦ったわけではない、産土神の陰ながらの庇護があったからこそ五郎左衛門の誘惑に屈しなかったのだと悟った。

五郎左衛門が縁から庭に降りようとしたとき、姿勢の隙ができた。そうと見た平太郎は脇差をめて斬りかかろうとしたが、巨大なてのひらで押しつけられているかのようにからだは動かない。仕方なく、そのままじっとしていると、からだは動くようになった。そのときはすでに、庭いっぱいに変形なものの姿があふれていて、五郎左衛門を迎えにきた妖怪だと察せられた。

五郎左衛門の乗った駕籠を真ん中にした行列は回り燈籠の影のように空にあがり、やがて雲のなかに見えなくなった。

平太郎のからだを押さえつけたのは五郎左衛門の魔力と思われるが、五郎左衛門が立ち去ってゆくのを産土神が見ていたことを考えると、平太郎を押さえつけたのは産土神ではなかったかとも考えられる。

五郎左衛門はこれまでのいきさつを残らず打ち明け、平太郎も事情を承知して別れの挨拶を交わしたのだから、両者のあいだでは友好の協定がむすばれたとしなければならぬだろう。五郎左衛門の隙ができたから平太郎は斬ろうとしたのだが、友好の協定がむすばれたからこそ五郎左衛門は隙を見せたのだ。このように考えてくると、平太郎の協定やぶりを糾弾したのは産土神だったと考えるのが筋に合っているようだ。

平太郎の危難を救っただけではなく、平太郎が妖怪とのあいだの友好協定をやぶりそうになったら、今度は妖怪の味方になって平太郎の妨害をする——産土神の公平な態度は篤胤にとって嬉しいシヨックであったと思われる。

稲垣足穂は、篤胤が校正した『稲生物怪録』にはない文章で最後

をしめくくつている。「山本五郎左衛門ノ顔ヲ僕八生涯忘レルコトハナイデアロウ。殊ニ『只今退散仕ル』ノ尻上リノ一言ハ、何時々々マデモ忘レハシナイ。槌ヲ打ツ心算ハナイガ、僕ノ心ノ奥ノ底ニ八次ノ様ニ呼び掛ケタイ氣持ガアル。山本サン、氣ガ向イタラ又才出デ！」

稲垣足穂は『稲生物怪録』の翻案のあとに「主」と「客」の対話をつけくわえ、こう書いている。

「一体、愛の経験は、あとでそれがなくては堪えられなくなるという欠点を持っている。だから主人公たちは大抵身を持ち崩してしまふ。若し稲生武太夫が至極平穩な生涯を送ったのだつたら、それは又それでよいではないか」

稲生平太郎は元服して武太夫となりの、広島（三次）藩浅野家の御徒歩組の士として十二石、四人扶持を支給され、まずしいながらも平穩な一生をおくつたそうだ。

平太郎が山本五郎左衛門からもらった小槌は広島の前寺にあずけられ、いまでも七月一日には公開されているそうだ。七月一日は五郎左衛門がはじめて平太郎のまえに魔力をしめした日である。

- 84 -

篤胤は稲生平太郎に自分を擬していたにちがいない——妖怪の個人主義について

『稲生物怪録』や『三次実録物語』の原本からはいくつかの写本を生まれ、それに平太郎自身の回想にもとづく修正や加筆がくわわってひろまっていた。

平田篤胤はできるかぎり多種多数の写本を閲覧したうえで、わざわざ校正してまで正確な稲生事件を世につたえようとした。

篤胤にそうまでさせたエネルギーは、いったい何であったのだろうか？

まず、稲生平太郎にたいする羨望の気持ちがあったはずだ。

妖怪や魔物が出現してくる様子を注意して観察してみると、ひとつの原則がうかびあがってくる。それというのは、おなじ時、おなじ

じ場所にいる複数の人間のうち、妖怪や魔物に指名されるのは少数にとどまり、そのほかのひとは妖怪出現の目撃者にしかならないということ。目撃者になるのはまだいいほうであり、事件がおこったのに気づかないひとさえいる。

妖怪に指名されるのを途方もない不運、不幸と思うのと、いいようにもなく嬉しく感じると、ふたつのタイプがあるわけだが、篤胤はまぎれもなく後者に属する。

時間や場所の条件はおなじなのに、妖怪の指名を受けるひとと、受けないひとがいる。この事実、妖怪には個人を識別する能力があるのをしめしているわけだ。個人識別の能力をもつ妖怪に無視される、こんなに寂しいことはない。妖怪に「あんたは見えないよ」と宣告されたに等しいのだから。

稻生平太郎は妖怪に指名されたのに篤胤は無視されている、すくなくとも妖怪遭遇を体験したことがない——この差、相違はどこから生じているのか？

妖怪に指名される、自分の名前を知ってもらっている——そういう環境のなかに自分を置くには、どうすればいいのか？

ここで篤胤は「自分の出番」という目標を発見したにちがいない。徳川政権は社会の総体を安定させる功績をしめた。しかし、徳川の功績もそこで尽きている。社会の総体が安定したあとには、個人の生涯の安泰という目標が生まれるわけだが、それはもはや徳川政権の手には負えるものではない。

——おれの出番がやってきた！

平田篤胤は自分の出番を発見し、はりきっている。

岩間山へ修行に行っている天狗小僧寅吉が幽界から、どのようなメッセージを持ってもどってきてくるか、胸をふくらませて待っている。

(4 章・終)

5章「天狗小僧を守りたまえ！」

とつぜん帰ってきた寅吉

「寅吉が返ったあととは心しずかになり、十日ほどは、寅吉に聞いたことのあるこれをメモしてすごした」（『仙境異聞』）

下総の佐川村には五十嵐対馬のほかにも高橋正雄という門人がいた。その高橋が湯島天神男坂下の気吹舎の戸をたたいたのは十一月三日の早朝のことだ。

「寅吉は？」

「行方知らずになりました」

「……！」

いや、行方知らずになったと、はっきりとは言えない次第でありまして——高橋は切迫している様子でもあったから、座敷にまねきいれ、気をおちつかせた。

「五十嵐さんから先生に、『寅吉は岩間山へ登ったのであろうと』、このようにお伝えしてくれとのことでございます」

「岩間山へ登ったのであろう、というからには、ほんとうに寅吉が岩間山へ登ったのかどうかは確認していない、そういうことなのか？」

以下は高橋正雄の説明——

寅吉と五十嵐対馬（ごうま）は十九日の朝はやく、船で笹川についた。まず高橋の家に寄り、二十三日までは対馬の家に滞在していた。寅吉は対馬に祈祷や呪いの術について聞かせ、膏薬の練りかたや丸薬の丸めかたなどを教えていたのがわかっている。

二十三日の夜、対馬の家の外から呼ぶ声がして寅吉が出てゆき、まもなくもどってきたのを、対馬の下僕が寝床のなかで耳にしている。

夜が明け、寅吉は対馬にうちあけた。

「昨夜、師匠から迎えがきたので、今日は筑波山に登る」

「そうか。それなら、筑波の麓まで送ってあげるよ」

「送ってもらわなくても、向こうから迎えがくるはず……」
それから寅吉が外へ出ていったまではわかっているが、その先のことがわからない。「筑波に登る、迎えがくるはず」といつていたのだから寅吉は筑波に連れられていったのだらうと五十嵐対馬は推測している、というのが高橋の説明だ。

篤胤はおどろいた。

寅吉が筑波山から岩間山へ行くのは、はじめから承知している。承知してはいるものの、いざ寅吉が、それも天狗にさらわれるように五十嵐対馬の保護の手のなかから姿を消してしまったのに、いまさらのようにおどろいた。

その反対に、これで我が気吹舎ももとの静けさをとりもどすのかと、すこしは安堵の気にもなったらう。寅吉が評判になっただけからというもの、だれかれなしの訪問が絶えず、そのあおりを食らったかたちで江戸の門人たちの足が遠のく傾向があったから。

「おれの師は、先生が自分に手紙を書いてよこすはずだと知っていたらしい」と寅吉がいった

十一月一日は寅吉が山にはいつて修行を再開する日だから、篤胤は杉山組正と寅吉のために心ばかりのものを神棚にそなえて修行の無事を祈った。

二日の夜、本所の方角に火事があった。本所には知人もいるから心配になり、家族を起こして火の見にあがったりおりたりで、ろくに寝ないうちに夜が明けるところ、戸口をたたくものがある。

「寅吉！」

女や子供は、とつぜんあらわれた寅吉がもしや鬼ではあるまいかといったふうにおそれて見つめている。いまごろ寅吉は筑波から岩間にうつって、などと噂していたところへ当の寅吉があらわれたのだから、おどろくのも無理はない。

笹川の五十嵐対馬の家にはむかえにきたのは左司馬だった。二十四日の朝、左司馬にともなわれて山に登ると、師の杉山組正は讃岐の

山廻りの役に当たったということで、寒行は休み、里に降りるといわれた。

左司馬と古呂明におくられて江戸にもどってきて、さて、どの家の門口をたたこうかと考えたあげく、そもその縁は長崎屋からはじまったのだからと長崎屋の戸口をたたいた。なかから声がして、「この家では夜があげないうちは何があつても門をあげない」といわれ、それならばと湯島天神にやつてきた——これが寅吉の説明だった。

夜明けの江戸にもどってきた寅吉は最初に長崎屋に行った、これは篤胤の自尊心を傷つけることにはちがいない。寅吉は「筑波に登る」といって、この気吹舎から対馬に連れられて出ていったのだが、寅吉の気分としては「長崎屋——気吹舎——筑波」の順序になっているらしい。

篤胤が「わたしの手紙を、杉山山人にわたしてくれたかね」と聞いたのは、寅吉にたいする長崎屋の山崎美成との相違を鮮明にした気分からだ。美成がそういうことをするはずはないのだから。「師は、おお、そうか、よしよしといっていました。おれが先生からの手紙をもってくるものだ、はじめから知っていたようです」杉山山人とのあいだに気分の通うものがあるのを知って、篤胤は安心した。美成にたいする優越感をあじわった瞬間でもある。

「おそろしいもの、それは大名の門番・名主・家主の三つ」寅吉がもどっていたと知って気吹舎につめかけてきたのは、まず気吹舎の屋敷の持主の小島祐助。小島が京都の二条城の御蔵奉行として赴任しているあいだの留守宅を篤胤が借りていたが、小島が江戸にもどってからそのまま引き続いて借家していたようだ。それから伴信友、中村帯刀、青木五郎治、下総笹川の高橋正雄といった面々。

一貫齋こと国友能当は幽界の風砲のことをくわしく聞かないうちに寅吉に去られてしまい、くやしがつっていたが、寒行が中止になっ

て寅吉がもどってきたのを知ると、とんできて質問をあびせかけた。自作の風砲をかかえてきて寅吉に見せ、「これとくらべて幽界の風砲は、どこが、どうちがうのか」と質問をあびせかける。

そばで聞いていた篤胤は「相発して悟りうることはなはだ多し」だったと『仙境異聞』に書いている。風砲はおるか、鉄砲一般のこともそれほどには知らないはずの篤胤が「悟りうることはなはだ多し」と言うからには、国友能当と寅吉とのあいだにかわされた風砲問答は初步のレベルのものだったのだろう。

国友と風砲問答をかわした夜、寅吉の兄の荘吉がやってきた。上野広小路の名主の岡部から「寅吉を連れまいれ」と指図があった、どうしようかという。兄の話聞いていた寅吉の態度が落ちつかなくなってきた。

来あわせていた屋代弘賢が口をはさむ。

「その名主に伝えてやりなさい。『屋代から寅吉を尋問しなければならぬことがたくさんある、それが済んでから連れてまいりしよ』とな」

屋代は徳川の御家人、その屋代から「こちらの用事が済んでからじゃ」といわれれば、いかに上野広小路の名主であろうと文句はつけられない。

御家人の力添えをあてにできると知って荘吉も安心して帰っていた。そのあとで寅吉がいったのがおもしろい。

「おれがこの世でおそろしいものが三つあるんだよ」

この世でおそろしいものは、なんていう言い方はむしろ大人のいう言葉だ。それを十四歳の寅吉が、しみじみとした口調でいいだしたのがおもしろい。

「その三つとは、なんだね？」

寅吉は指をおって、「大名屋敷の門番、名主と家主」とかぞえた。ちいさいころ、大名屋敷に行ったときに門番にひどく叱られたことがある。家主に貸家を追いだされたことがあるが、その家主を名主が叱りつけたことがある、だから家主よりも名主がこわい——寅吉

が順をおって説明したものだから、聞いていた一同、腹をかかえて笑った。十四歳という年齢にはふさわしくない、ひとひねりひねったユーモアを感じたからだろう。

その夜も、つめかけていた客が帰っていったのは遅い時刻だった。篤胤が「今夜は疲れだろう」と肩をなでてやると、「ミカンが欲しい」という。

「ミカンがほしいか。よしよし、ミカンをいくつほしいかな」

「お尻に針のある虫の名前だけほしい」

「尻に針のある虫？……はあ、尻に針のある虫は八子だ、ミカンを八つほしいと、こういう謎だな」

ミカンをもらってよろこび、よろこんだついでに寅吉は、「なんでもいいから品物の名で謎をかけてみな、ぜんぶ解いてみせるから」と挑戦する。

「燭台の蠟燭」とかけて「昼の九つどき」と解く——「ころは「ヒが高い」

「破れ障子」とかけて「憎い子の頭」と解く——「ころは「張ってやりたい」

「破れた播鉢」とかけて「小野小町」と解く——「ころは「スルこ」とがならぬ」

「土の団子」とかけて「断食の行」と解く——「ころは「食いたくても食えぬ」

謎々あそびを書きつけ、つぎの日に屋代弘賢に見せたところ、「あの小僧にはこのような世間の才智もあるのだな」と感心した返辞がもどってきた。

オルゴールの原理

寅吉を連れてきてくれないか、会って話を聞きたいという誘いが引きもきらない。自分では湯島天神の男坂下に来るわけにはいかない身分のひとつからも、「寅吉を連れてきてくれないか」と、ひとを介して依頼がある。

この種の要望について、篤胤は可能なかぎり応じようとした。寅吉が幽界の使者であること、すくなくとも幽界とのつながりを持っている存在であることをひろく知ってもらうには手っとり早い方法だから。

山田という家に行ったときには、十人ばかりのひとがあつまって寅吉を待っていた。車座になったひとの真ん中に坐った寅吉は臆することもなく、何本もの縄を組み合わせたような字や、篆書(てんしゆ)に似た字をたくさん書いて一座を感心させた。

山田家の床の間にオランダから舶来のオルゴールが置いてあったのを目をつけ、

「こんなものは、山にもあるよ」

「これはオルゴールといって、オランダ渡りの自鳴楽器だが、仙人の山では、どのようにしてオルゴールをつくるのか？」

寅吉は説明した——鉄の箱の水を入れて六本の笛を仕掛け、肘金(ハンドル)を廻せば水が湯になり、笛が音を出す。

水蒸気が笛を鳴らす仕掛けはだれにも理解できたが、鉄の器に水をいれて鉄棒でかきまわせば湯になるという肝腎のメカニズムの説明では寅吉も苦労したようだ。

「鉄棒でかきまわせば湯の涌く鉄の器のこと」と篤胤は書いているから、岩間山の仙界では、こういう器がありふれた道具になっていたようにも読める。ただし、篤胤自身は完全に理解したとはいえないようだ。理解していたならば、もっとわかりやすい文章を書いていたはずだから。

水が湯になるシステムは別のところにあっただが、それを寅吉が見落としていて、ただ「鉄棒でかきまわせば湯が涌く」とだけ記憶していたからうまく説明できなかつた、という事態はありうる。鉄の箱に水を入れて湯にするには箱を火の上のせれば済むこと、鉄棒でかきまわすなんて面倒なことは必要ではない。鉄棒をかきまわすのは湯を沸かすのではなくて、水蒸気を六本の笛に配分する仕掛けだっただけではなからうか。

仙界製オルゴールの機能を説明するのに寅吉は苦勞したようだが、
とって、寅吉が当惑させられたわけではない。

山田家にあつまつたひとびとは、「天狗小僧の正体を暴いてやる」
ことに意欲をもやしているわけではない。それよりも、寅吉が幽界
の使者であることを我が目で確認したい、確認して驚嘆したい、驚
嘆のチャンスに遭遇した我が身を内心で誇りたいといった野望に燃
えている。だから、寅吉の言語動作を理解するよりも、理解できず
に頭を痛めるほうがのぞましいのだ。つまり、かれらもまた天狗の
出現を待っていた世間のひとびとの典型であった。

かしこい小僧のように見えながら、とんでもない悪戯をする寅吉
大阪から松村平作完平という門人がきていたが、十一月のなかご
ろ、大坂にもどることになった。暮れと正月の用事をすませ、春に
なったらふたたび湯島にやってくる計画だったのだろう。門人たち
はそれぞれに短冊を書いて松村に贈り、わかれを惜しんでいた。

「先生、おれに、歌を教えてください。歌のつくりかたを教えてください、
おれもその短冊を書いて松村さんにあげたいんだ」

「歌をつくるといっても、寅吉よ、そう簡単につくれるものではな
いが……」

「それなら、短冊を一枚、おくれ」

もぎとるように受けとった短冊に寅吉が書いた一字——どうにも
読める字ではない。

「花かな、いや花ではない、と……」

首をひねっていると、

「裏返して見るんだよ」

裏返すと、「松」の字が見えた。

「これはね、『返って来るのをマツと読むのさ」

別れのときがきた。

門の外に出ていった松村を寅吉は呼びもどし、両手をだして松村
の顔をひきよせ、松村の鼻に自分の鼻をこすりつけ、ほがらかにい

う。

「これが『ハナむけ』だよ。松村さん、春になったら、はやくお出で、待ってるよ」

泣き笑いのなかに松村平作の姿は遠ざかっていった。

この松村は、気吹舎で寅吉とかわした問答を自分なりに筆記したひとだ。松村の筆記を読んだ屋代弘賢の端書きがある、それはつぎのとおり。

「寅吉、岩間山にて白石丈之進というものの子となりて、白石平馬と称す。十月十七日発足して山に入り、十一月三日、ここに来る。

このたびは嘉津馬と改名せしという。三字名をつくは階級すすみしゆえなり。ゆえにこの一冊を『嘉津馬問答』と題す」

寅吉には稚氣をふりまく愛すべき性格があり、あつまってくるものの人気を獲得したところだが、その反面には、手に負えないいたずら小僧の一面があった。篤胤はそれを「わやくに、いたずら」と表現している。

たとえば――

篤胤が読書していると膝にもたれかかってあまえ、机の端を歯でかじり錐で穴をあけ、篤胤が愛玩する奇石を小刀でうちくだき、筆や墨をかたっぱしから削ってしまい、火鉢の灰を吹きあらし、裸足のまま庭にでて樹木の枝を切りちらし、部屋のなかでは高いところから飛びおりて下にあるものを壊し、竹馬に乗って汚れた泥足のままで座敷を歩きまわってしまう。

子供の遊び道具の豆鉄砲の強力なのを自分でつくり、小石を弾丸にして襖や障子に穴をあけてよろこぶ。天井めがけて発射したときには、さすがの篤胤も叱ったが、叱られて恐縮しているかともおうと、竹内健男が物書きしている横へしのびよって耳の穴に小石を詰めてしまう。

細工が好きなのはいいとしても、あれをつくる、これをつくるとっては鋸や鉋、はては台所の包丁までもちだして歯をこぼしてしまふ。

初対面のひとの顔を穴があくほど見つめ、気に入ったとみるやいなや飛びついて、肩に乗ってよろこぶ。

「子供のいたずらを『天狗の巢立ちのようだ』というが、ほんとうにそのとおりだ」と篤胤はなげいたことがある。

老中からの使者

阿部備中守正精といえは備中（広島県）福山の藩主で、文化十四年（一八一七）から幕府老中の職についていたひとだ。この時期の老中には阿部のほかに土井大炊頭利厚、大久保加賀守忠真、水野出羽守忠成の名がならんでいる。

神田明神下の屋代弘賢の屋敷に、その阿部正精からふたりの使者がやってきたのは文政三年十一月十七日だ。用件はもちろん「寅吉ともうす子供に会いたい」というもので、篤胤がはじめて寅吉に会ってからわずか一カ月半のうちに老中の使者をむかえるところまで事態はすすんでいた。

篤胤が寅吉をともなつて神田明神下の屋代邸で待っていると、阿部老中のふたりの使者がやってきて、阿部の領地の名物「十六味・保命酒」の徳利一本と百花鏡を土産として寅吉にあたえた。福山の城下から二十キロほど南の名勝地の鞆でつくられるのが「保命酒」だ。

阿部の使者の質問にたいし、寅吉はすらすらと答えて面目をほどこし、篤胤や弘賢のすすめにしたがって七韶の舞を舞って見せ、仙界独特の太刀の使い方も披露した。

一日おいて十九日にも寅吉と篤胤は屋代邸に行った。この日の客はおなじ老中の大久保加賀守の使者ふたりで、土産は酒中花とミカンだった。

疑う面々

その翌日、篤胤と寅吉は湯島の気吹舎に客をむかえたが、それまでの客とはうってかわり、「寅吉が天狗だなどは、とんでもない

偽りだ！」と、非難をぶつつけてきた。

非難の爆弾をかかえてやってきたのは荻野梅塙だ。梅塙の名は長、通称を八百吉とって幕府の天守番をつとめるかたわら仏教学の研究家として名が通っている。

案内され、部屋に通されるなり、篤胤の顔に指をつきつける勢いで梅塙はげしい言葉を吐いた。

「寅吉が神仙に仕えたなどというのは妄言にすぎぬ。かしこい子供ではあるようだから、あっちこっちで耳にしたことを取り混ぜ、それをまるで自分が幽界で見聞きしたようにいいふらしているだけだ！」

こういう非難を予想していないわけではないから、篤胤はおちついて答える。

「すべてが真実とはいいませんが、たとえば七韶の舞、風砲のことなどは、他人のいうのを聞きかじっただけのものとは思えませぬ」「それが妄想だというのじゃ、伶俐な子にはよくあること。かくいう自分も子供のころは『世にも希なる神童』などともてはやされ、見たことのない物の形を言い当て、晴雨を予言して的中させ、それを誉められるのが嬉しいあまりに、いまから思えばデタラメを吐いてまわったもの。寅吉とやらも、そのひとりにちがいない。それが証拠に、はじめてあの小僧に会ったとき……」

いわれて篤胤は気がついた。そうだ、この荻野梅塙と寅吉はすでに長崎屋で会ったことがある、初対面ではない。とすると――
「はじめて会ったとき、あの小僧は印相のことは何も知らなかったから、くわしく教えてやった。そのつぎに別の家で会ったときにははじめから知っていたかのような顔で、得々として印相の理論をしゃべっていたよ。ひとから聞いたことを、さも自分の知識や見聞のように話す、それがあの小僧なのだ、はやく追いだしてしまおうがよろしい」

篤胤は言葉に詰まった。荻野梅塙に何とって反論すればいいのだろうか、反論が可能であるのか？

困惑している篤胤の耳に、となりの部屋から寅吉の声が聞こえ、自分を呼んでいるのがわかる。席を立ってとなりの部屋にゆくと、寅吉がささやく。

「おれは、あのひとから印相のことを教えてもらったことはない。長崎屋ではじめて会ったとき、あのひとは『印相は神秘的なものだよ』といい、『あちらの世でも印相をむすぶことはあるのかね?』などと、たずねた。だからおれは……」

神秘的かどうかは知らないが、師に「おぼえておく必要はあるよ」といわれたから、習いおぼえた。山でおぼえた印の結び方を荻野に見せてやると、「おもしろい、たいしたものだ」などといって懐から懐紙をだして書きとめていた。

そのあとになっても荻野は、いろいろのことを、おれにいった。

「これだけのことを知っていてお坊さんにならないのは惜しい」とかんなんとか。これは、ぜんぶ、長崎屋の先生が知っていることだ、ウソじゃない。

そういつてから寅吉は臍(せき)を決して、小声で叫んだ。

「湯島の先生のお客さんだからといって、あいつめ、ゆるしてはやらん！」

襖を蹴破り、となりの部屋にとびこんでゆきかねない様子の寅吉を、篤胤の妻や門人たちがようやくなだめた。

あとから山崎美成にたしかめたところ、寅吉のというのが本当で、荻野梅塙がいうのはウソだと判明した。

それだけに篤胤は悩まざるをえない。荻野梅塙ともあろうものが、どうして、なぜ、あんな粗末なウソをついてまで「寅吉を追いだせ」などといってくるのか?

「鼻はまだ伸びないのか、そろそろ羽は生えてきたか?」

松下という家にまねかれて行ったとき、神道者の滝川主水が来ていた。篤胤が寅吉を連れてくるのを聞きこんで、先に来て待っていたらしい。

松下が寅吉にあれこれとたずねているのを横から聞いていた滝川があざわらう調子で、そばのひとに小声でいうのがきこえた。

「この子は高津鳥(たかつと)の災いに遭ったのだそうじゃ」

神道の祝詞には「高津鳥」という言葉があつて、ふつうはそれは天狗をさしていると解釈されている。

滝川の嘲笑を聞きとがめた寅吉、きつとした態度になつて、いいかえした。

「あなたは神道のひとらしいな。だから祝詞に出てくる高津鳥を天狗だと思ひ、おれが天狗にさらわれたのだと思つていらっしゃるが、あんなものにさらわれるようなおれじゃないぞ。祝詞に出てくる高津鳥はワシのことだと、岩間山で教えてもらった」

滝川という神道家は赤面し、口をつぐんでしまった。寅吉が幽界にさそわれたのを、天狗にさらわれたと思ひこんで疑われないのがなるとも滑稽だった。

寅吉は天狗でもなければ、天狗にさらわれたのでもない。幽界の山人にさそわれ、幽界で修行している身なのだ。

天狗にさらわれた体験が話題になる例は多いけれども、それは、ふつうのひとの、やや異常な体験にすぎない。元の場所にほうりだされ、しばらくボートとしているが、そのうちには天狗にさらわれる前の、ふつうのひとにもどる。

寅吉はそういうものとはけたがちがう、と篤胤は確信している。天狗ではないにもかかわらず幽界へ出入りができて、幽界のことを知っている。そういう寅吉が天狗なんかであるはずがない。

松下の家から湯島にもどつてくると、ふるい門人の吉田尚章が待っていた。寅吉に会いたいという若い医者案内してきたのだが、あいにくと寅吉も篤胤も留守、そこで篤胤の妻で出て対応した。そのときの医者の言うのがおもしろかつたと、吉田も妻も腹をかかえんばかりに笑っていた。

若い医者は、こういう質問をしたという。「その天狗小僧の鼻は、どうですか、伸びてきましたか。羽はどうです、肩のあたりがも

りあがって、そろそろ羽の芽が出てくる時期ではないでしょうかな」
医者にふさわしい質問ではあったが、ともかくもあの医者は寅吉が天狗の子供だと思っていたにちがいない——これが篤胤の妻や吉田尚章の解釈だった。

寅吉の寄留を届け出た

平田篤胤は備中松山藩板倉家の家来で、江戸詰めになっている。板倉家に儒者として仕えているわけではなく、備中領内の神社の神官とか菩提寺の僧といった身分でもない。篤胤が大名の家来の身分にあこがれていたとは思えないし、江戸詰めといったところで仕事があるわけではない。

武士が主人公の江戸の街で大名の家来の身分を持っているのはなにかと都合がいいが、行動に制約を受けることもある。松山藩の江戸屋敷から「寅吉という少年の身柄につき、責任ある処置をせよ」と内々に指示があったのもそれだった。

篤胤は松屋藩の目付役所に出頭し、寅吉を自分の責任であずかる手続きをすませた。十一月二十三日のことだ。

篤胤の『仙境異聞』には「寅吉を我が家におく由をとどけて帰る」と簡単に書いてあるだけだが、こみあげてくる喜びをおさえている篤胤であったはずだ。

この手続きをすませたことで、寅吉の身柄をめぐって山崎美成とあらそうことがなくなる、その喜びだ。この先も美成からはいろいろといってくるだろうが、そのとき篤胤は「寅吉の身柄をわが気吹舎であずかる件については、藩公も承知なさっている」と高飛車に出られる。町人学者としてなかなか活躍している美成でも、大名の権威を相手に寅吉をうばいあうとなれば二の足をふむ。

上野広小路の名主の岡部を表敬訪問

二十五日には寅吉と兄の壮吉と連れだって上野広小路の名主の岡部家に出かけた。寅吉は「おそろしいものが三つある、大名屋敷の

門番、名主、家主」といったことがあるくらいだから、岡部家訪問までにはいろいろと悶着があった。

はじめは岡部から壮吉に、「是非とも寅吉を連れてこい」と命令口調でいつてきた。いわれるたびに壮吉は気吹舎に連絡し、屋代弘賢から「おれの用事が先だといって、つっぱねてやれ」と激励を受けて、やりすごしていた。岡部の言い方には、寅吉を問いただして化けの皮をはいでやるといった意気込みが感じられたから、避けていた。

そのうちに岡部の態度が変わり、「どうか寅吉を連れてきてほしい」と懇願の口調になってきたので、もうよかろうということになった。篤胤も弘賢も、ありのままの寅吉のことが世間にひろがってゆくのは歓迎したい気分になっている。

岡部の家には好奇心にあふれた連中が大勢あつまっていると予想された。上野広小路の名主の岡部ともなれば、客のほとんどは地位も名もある町人のはず、そのなかへ寅吉と壮吉のふたりだけで乗り込んでいって、どんな事態になるのか？

ふたりの背中を見送りながら、篤胤は祈る気持ちをおさえられない。常陸の岩間山の方角にむかって、篤胤は祈った。

「岩間の杉山人よ、寅吉が恥をかかぬように、どうか守ってくたされよ！」

寅吉の大演説

日暮れどき、寅吉と壮吉は帰ってきた。寅吉の気分が怒りで高揚しているのがわかる。

「どうであった？」

「あのニセ坊主め、けしからん！」

「坊主が、けしからん、か。何も食わせてもらわなかったのか？」

「食った、食った。おもいつきり食ってやったから、いまごろは大騒ぎしているんだろうな」

名主の岡部邸で寅吉は大演説をぶち、二十人ほどの物好きの肝っ

玉を冷やしてやり、大食らいを見せてから、席を蹴って帰ってきたという。

はじめのうちは、幽界では何を食べる、雨の日には何をしているといった、例によって例のごとくのだらない質問責め、寅吉がそろそろ腹を立てたところへ真言の僧らしい男が出てきたから、この男を相手に寅吉は大演説をやつてのけたと、いささか自慢げの報告だ。

寅吉が真言の僧らしいとみたのは真成院の住職で、なかなかの学僧と評判をとっていたようだが、はなばなしい衣に身をかざり、はじめのうち寅吉を、さも軽蔑した言葉つきだった。

印相が話題になつてから、寅吉が反撃に転じた。

真成院は、「この小僧はほんとうに修験の修行をしているのだろうか」というところに疑惑の焦点をおいているらしい。ほんものの修験者であるかどうかは印の知識でわかるとみて、印相の質問で寅吉の化けの皮をはがす作戦を立てたようだ。

「何々の印は、どのようにむすぶ？」

「それはこのように」

「これは何々の印であるか？」

「これこれしかじか」

岩間山でおしえられた印相のそれぞれを寅吉が答えると、真成院は「ふむふむ」と、いかにも心得ているようにうなずくのが寅吉には滑稽に見える。そこで、「ちよつと、からかつてやるか」という気になつたのが寅吉らしい。

「摩利支天の印はいかにむすぶ？」

ここだつ、とおもつたから、わざと、ぜんぜんちがう印をすんで見せてやったら、あいかわらず「ふむふむ」とうなずいている。

真成院は印相については何にも知らないのだ。とすると、さつきから「ふむふむ」とうなずいていたのは知らないことを知っているかのように装っているだけだとわかった。寅吉が岩間山で教えられた印相は、ふつうの修験者は知らないはず、それをやってみせたの

に「ふむふむ」は何もしらないしるしだ。

こいつ、何も知らないくせに——寅吉の顔に輕蔑の気持ちが出たのを察したのか、真成院はとつぜん攻撃に出た。

「小僧っ、おまえの見せた印相はすべてみな道家(どんぎ)のもの。そのうえ、祈祷のやりかたなどはすべて荻野梅塙から盗んだものだというではないか！」

寅吉を挑発してやろうという意図があきらかだ。

「おまえはホトケがきらい、神が好きだといっているそうだが、ホトケほど尊いものはないぞ。ホトケの信者になれ！」

寅吉が言い返そうとするのを制して、

「いいか、よつく聞けよ。わしは神が大嫌いだから、伊勢の大神宮はもちろん、金比羅の悪口をいいたい放題にいつてきたが、なんの罰もあたらぬ。神が尊いといったところで、所詮はこんなものなのだ、どうだ、わかつたか！」

止めを刺したつもりか、ふんぞりかえったところへ寅吉が反撃にかかったから、真成院はおどろいたちがいない。

「袈裟衣を着てさえいれば、だれでも恐れ入ると思つたら、おおまちがいだよ！」からはじまって、「大神宮さまや金比羅さまをちよつとでも罵ってみろ、天罰が当たるように祈つてやるからな！」までの寅吉の大演説の中身は省略しよう。

「杉山山人が幽界から寅吉を保護なさつたのだ」

二十五日の夕方、寅吉と兄の壮吉が広小路の名主岡部の家からもどってきたとき、篤胤は寅吉が真成院を相手に大演説をぶつてのけた、ということ聞いた。

それから二、三日して佐藤信淵が思い詰めた顔で湯島にやってきた。聞いた話だがと前置きして、「わが師は広小路名主宅の寅吉大演説事件のことを、どれほどご存じか」とたずねる。

二十五日の夕方、寅吉と壮吉に聞いた話をくりかえすと、それだけではないのだと、信淵は心配顔。

「それだけではないといって、そのほかに何かあったのか？」

「寅吉を、叱っていたただかなくてはなりません」

佐藤信淵が聞いたのは、寅吉と壮吉の報告よりはもっと大変なものだった。恥をかかなくてよかったと、まずはよろこんだ篤胤だが、それどころではなかったらしい。

寅吉が「神宮や金比羅の悪口を言えば、おれが神さまに祈って罰を当ててやるぞ！」と叫んだまでは篤胤が聞いたとおり、じつはそのあとからが大変だった。

満座のひとが「この寅吉は幽界で修行しているそうだ。小僧が祈ればあなたに罰が当たりましょうから、ここはひとまずお帰りになつては」とすすめるのをさえぎり、真成院は劣勢挽回をはかった。

「これほど悪口をいわれては迷惑だ。拙僧も神の道知らぬわけはないが、いまはホトケの衣を着ている身、ここで神の道を説いては三宝に失礼になる」

これを聞いて、寅吉の怒りがいや増しにました。

「ホトケの衣は着ていても、おまえなど、ホトケのことは知りやしない。ましてや神の道がわかるものか！　マイスというのはおまえみたいな坊主のことを言うんだろう」

マイス——売僧と最悪の非難をなげつけられて、真成院の顔は真っ赤になった。

険悪な空気になったが、寅吉も真成院もゆずる気配がない。寅吉は、この座に真成院が来ているのは自分に恥をかかせようとして呼んだにちがいないと、同座のひとに怒りを向けた。

「とんでもないこと。真成院さまは、今夜たまたまお出でになっただけ、偶然というものなのです」

寅吉をなだめようと菓子すすめ、あの世とやらの字を書いていきたきたいと硯や紙、筆を出してきたから、エイヤーツと書きなくりながらも、

「今夜は坊主がそばにいるから、思うように書けやしない」
そこへ夜食が出てきたが、

「坊主がいるところでは、汚らしくて、オマンマなんか食えるもんか！」

これが止めの一打となって、真成院はすごすごと退散していった。それから寅吉の大食らいの一幕、おおぶりの飯碗に菜と汁をぶっかけ、おかわり、おかわりと九碗までたいらげた。

主人の岡部が「お好きなものがあれば」と追加の注文をうながしてきたのはもちろん本心ではない。「そのへんでお止めになつては……」というつもりが、驚愕のため、思わず知らずに反対の言葉をいつてしまったわけだろう。

「タイの焼物の替わりはないかな」と追加注文をだしたが、二匹目のタイの焼物が出てくるまでには時間がかかったから、あわてて焼かせたにちがいない。

柿とミカンが四十ばかり、盆に山盛りになって出ていたのは真成院とのはげしい問答のあいだに食ってしまったから、追加として出てきたのを二十ほど、これは寅吉ひとりで食った。

食って食って食いまくると、座のひとの停めるのも耳をかさず、梯子をかけおりて広小路から湯島まで走ってかえってきたというのが、佐藤信淵が聞いてきた真相だった。

篤胤がふかい溜息をついたのは想像に難くないが、ふかい溜息の意味は篤胤自身の『仙境異聞』によれば、決して絶望や恐怖からではなかった。

「それほどのさわぎをおこしたにもかかわらず、寅吉は無事であった。さだめし、岩間山の山人たちが寅吉を守りたまひ、そのように振る舞わせたのだ！」

寅吉が篤胤の正式な門人になる

真成院は下谷金杉にすむ真言系の修験者であった。篤胤が聞いたところでは、「いま流行の江戸風の仏学をものする才僧」だということだ。

寅吉がまねかれて上野広小路の名主の岡部のところへ行ったとき、

その真成院が来ていた。たまたま来あわせたのかもしれないし、「例の天狗小僧を呼んでおきますよ」などと岡部から連絡があったのかもしれない。いずれにしても、評判のたかい修験者と上野広小路の名主——江戸の市井を牛耳る有力者のふたりが寅吉と篤胤、そして気吹舎に格別の関心を寄せていたのはまちがいない。

とくに岡部は名主として上野一帯の市井をとりしまる公的な権力を保持している。岡部が寅吉を「挙動不審のものが徘徊している」といった嫌疑の槍玉にあげようとすれば、危機は避けられない。

篤胤は備中松山の藩士の身分、そして屋代弘賢という御家人の友人を持ってはいるが、だからといって町方の干渉から自由でいられるわけではない。武士の身分を持っているのがかえって紛糾を大きくするおそれもあった。

岡部屋敷の大演説事件のつぎの日、寅吉の兄の壮吉がやってきて、岡部から「もういちど来てくれぬか」と要請があったことを報告した。

壮吉は寅吉に伝えたが、「二度と、あんなところには行くものか！」と突っぱねられ、こまりはてて篤胤のところへ訴えてきた。

「わたくしも名主の支配下に住んでいる身のうえでありますから……」

はやくも兄の壮吉の身に、災厄は降りかかるうとしていた。

壮吉はひとつの解決案を持ったうえで、苦境をうったえにきてきた。寅吉を篤胤の門人にしてもらうわけにはいかないだろうか、という案だ。

「先生の門人にしていただければ、たとえ名主からわたくしのほうに苦情がもちこまれても、弟は篤胤先生のお弟子だといって、つっぱねられるのです」

屋代弘賢の賛同をえて、篤胤は寅吉を気吹舎の門人の仲間に入れることにした。文政三年（一八二〇）十一月二十六日、寅吉は平田篤胤の門人の高山寅吉となり、羽織と袴をはいて歩くことになった。寅吉が武士になったわけではないが、ともかくも十四歳で一人前の

社会人になった。

この年に新しく篤胤の門人になったのは十四人で、そのひとりが寅吉だ。文化元年（一八〇四）に「真菅之屋」の名で開筵してからの門人の総計は二百三十人になった。

（5章・終）

6章「寅吉は二モモノ、篤胤は山師」

彰考館の総裁経験者が「寅吉に会いたい」と要請してきた

天狗小僧の寅吉は文政三年（一八二〇）の十一月二十六日から平田篤胤の主宰する国学の塾「気吹舎」の正式な門人になった。

それまで着ていた、いかにも天狗小僧にふさわしい——といったところで天狗小僧がどういう服装をすればいいのか、だれも知らない——垢まみれの着物をぬいで、羽織に袴、腰には大小二本の刀をさして外を歩くようになった。

寅吉がはじめて篤胤のまえに姿をあらわしたのは十月一日だから、それから二カ月たらずのうちに羽織に袴、刀をさすようになったのは大変な変身だ。

武士になったわけではないから腰の大小は誇大衣装のそしりをまぬがれないところだが、そこは篤胤が奮発してやったわけだろう。孫にも衣装、天狗小僧にも羽織と袴。

腰の大小と羽織、袴の効き目は即座にあらわれた。

「平田さん、是非ともわたくしの顔を立てていただきたい」

殊勝な顔つきの山崎美成がやってきて、用件は「大関さまのお屋敷へ寅吉を連れてゆきたい」というもの。下野（栃木県）黒羽藩大関家の当主の夫人が七年にわたって苦しんでいた癩の病いが、たった一度の寅吉の呪いの札で快癒ってしまった。感謝かたがた、寅吉の顔を見たいとおっしゃる。

大名の奥方が「会いたい」とおっしゃってこられたのだから篤胤は即座に承知するかというところ、それがそうではない。寅吉の人気は急上昇をつづけていて、すぐには注文に応じられない。なにしろ、水戸の立原翠軒（すゐせん）からも「寅吉に会いたい」と声がかかったのだ。

水戸というのはもちろん徳川御三家の水戸徳川家のこと、その水戸の立原翠軒といえば学者の世界ではだれ知らぬもののない彰考館総裁の榮譽にかがやいたひとだ。

水戸といえば黄門光圀、黄門さまといえば葵の御紋の印籠だが、これはまあ二十世紀の日本の、それももっぱら庶民のあいだにかぎられる。このころの江戸、とくに学者の世界では水戸といえば彰考館だ。

彰考館は黄門光圀がまず江戸の水戸屋敷につくり、それから水戸にうつして、『大日本史』編纂の大事業の本部とした。光圀の没後には江戸と水戸にわかれて歴史書編纂の事業をつづけた。

天皇家の歴史を柱にして日本の歴史を書くのが黄門光圀の意図だった。こういうと光圀が国学者だったように思うひとも多いだろうが、光圀は典型的な儒学者だったのだから面白い。

彰考館も儒学を基本にしているが、天皇家の歴史を柱にして日本史を編纂しようとした光圀の意図が、彰考館をして国学のふるさたであるかのような印象をつくっていた。

平田篤胤は日本人の心の安定の可能性を日本の古代史のなかにもとめようとしている、彰考館をたんなる「儒学の府」と見て忌避する姿勢は持っていない。

立原翠軒は江戸で徂来学をまなび、宝暦十三年（一七六三）に彰考館にはいった。このころはまだ朱子学が官学としてちからをもっていたから、徂来学の翠軒は二十年以上の長い不遇に堪えねばならなかった。

ようやく総裁になって指導力を発揮するとまもなく、門下生の藤田幽谷（そうこく）が急進的な政治意識を旗印にかかげて対抗し、やがて彰考館の学者は新旧二派に分裂して翠軒は総裁の職からしりぞかねばならなかった。

総裁になるまでも不遇、総裁になってからも不遇といわざるをえない翠軒だが、新旧二派のどちらも門下生か、そのまた門下生だということを見ると、むしろ別格の境遇にあったといえる。

翠軒が彰考館総裁の職を去ったのは享和三年（一八〇三）だから、「寅吉に会いたい」と申しこんできたのは引退後十七年、七十六歳のときだ。七十六歳にしてこの好奇心、さらにあるものではない。

「さすがは彰考館の総裁！」

翠軒は無役の身で江戸の水戸屋敷の長屋に住んでいた。翠軒の長屋に寅吉を連れてうかがったのは山崎美成だ。いまや正式の篤胤の門人となった寅吉を美成が借りだして水戸屋敷の長屋に連れてゆくかたちだ。大関侯夫人や翠軒の希望を篤胤にとりついだのも美成だったようだ。

そもそも寅吉を発見したというか、寅吉はおもしろいぞといいだしたのは美成だったのに、いまでは関係逆転、美成が篤胤に寅吉を貸してもらって立原翠軒のところに連れてゆく。

寅吉は翠軒の質問にあれこれ答え、帰り道に大関侯夫人にお目にかかってから湯島にもどってきた。

しばらくして、翠軒みずから屋代弘賢に語ったところによると、「あの寅吉が幽界体験者であるのは一点の疑いもない」というものだった。これまで翠軒は多くの幽界体験者を見ている、その経験に照らして寅吉は本物である、つまり寅吉はウソやデタラメをいっているのではないと翠軒は保証した。

翠軒はまた、自分自身は幽界へ行ったことはないが、神仙に薬の作り方を教授された者の話は聞いたことがあり、それから見ても寅吉は本物だともいつてくれた。

翠軒が話を聞いたのは水戸の上町にすむ鈴木寿庵という町医者の子息で精庵、歳は三十ばかり。その精庵がまだ十五、六のころ、容貌魁偉の男があらわれ、いった。

「何月何日に下総国の神崎神社の山に登ってこい、方書(ほうしょ)をさずけてやろう」

方書とは製薬の方法を書いたもの、つまり処方箋。ありがとうございまずとはいったものの、すぐには信用できない話だから、指示された日には行かなかった。翌日、その男があらわれ、「なぜ来なかったのか、今度はかならず来いよ」とかさねていったので、腰をあげて行ってみた。

神崎神社の山に登ると、その男が待っていて一巻の方書をわたし、「ひとには見せるなよ」と固くいましめて姿を消した。

その方書のとおりに調合した薬をつかって治療すると効果顕面(カ)、評判が藩庁につたわって、「その方書を見せる」という。

他見を厳禁されていると断ったが承知してもらえず、提出することになった。

予定の日の前日、精庵の家で紙の焼けるような匂いがするのであつちこつち探したが、なんの異常も見つからない。そしてさて、つぎの日、役所にさしだす方書の包みをひらいてみると、包み紙はなんの異常もないのに中の方書はすっかり焼けていた。

お役所に何と言いつすればいいものかと頭をいためたが、結局は焼けた包み紙ごとさしだした。

神仙の業とはこのように測り難いものであるから、寅吉の体験も事実そのとおりとして受けとればよろしいのである——立原翠軒の結論はこのようであったと弘賢は篤胤に告げた。

「さすがは彰考館の総裁をつとめられた方である、よくも理解なされた！」

篤胤は立原翠軒の直裁な鑑識、そして明瞭な表現にたいして敬服の言葉を書きつけた。

「夜光の玉をつくってみよう」

伴信友がやってきて、夜おそくまであれこれと話しているうち、

「岩間山の杉山山人は夜になってからも学問をなさる」と寅吉がいった。

「夜でも学問を……書物を読むのか？」

篤胤も信友も夜では書物の字が読めないではないかと疑問に思ったのだが、それを察した寅吉は「夜光の玉があるから、なんといいこともない」と平然としたもの。そのうちに、夜光の玉をつくってみるといいだした。

岩間山には十五町も遠いたところから光って見える木がある、そ

れを細か砕いたのをガラスのフラスコの形をした器に入れて机のうえに置く、これすなわち「夜光の玉」、簡単につくれるんだよと寅吉は説明する。

「光る木など、見たことがない。夏になって木が芽をふいてから探そうではないか」

「夏でなくても、岩間山にはいつでも光る木があるんだから、この世にないとはいえないはずだ」

言い出したら後へひかない寅吉は、客がくるたびに「光る木を見たことはないか？」と質問責めで苦しめるようになった。

きんたま合戦

光る木、光る木と寅吉があまりうるさく言うのにたまりかねた守屋稲雄が、ひとつ寅吉をからかってやるうと思いついた。

「あの世では光る木をつかうそうだが、この世には光る木がない。だが産土の神は、人間のからだの上には目をつけて昼のあいだの役に立て、からだの下にはきんたまをつけて夜の役に立つようにおつくりになられた、ありがたいことじゃ」

「きんたま……きんたまが光るのかい！」

「光るとも。この世では、夜の暗いところで物を探そうと思えば、きんたまを手になぎってゆらゆらとゆすると光るから、物が探せるわけだ」

「おれを騙そうというんじゃないか。おれのきんたまは、夜になっても光らないよ」

「それは、おかしい。岩間山の山人たちは、まだこのことを教えないと見えるな」

夜になるのを待って、寅吉は暗いところに出てゆき、きんたまをにぎり、ゆらゆらとゆすつたが、光らない。

「やっぱり光らない。稲雄さんは、ウソをいっておれをからかったのだ。ウソをいうと神の罰があたるぞ！」

「ことによると、寅吉さんのきんたまには毛が生えていないんじゃない

ないかな。毛が生えなければ、きんたまは光らないんだよ」

「毛は、いつ生える？」

「おとなになれば、毛が生える」

寅吉はフーンと納得したようで、それからきんたまに毛が生えてくるのを待ちのぞむ気配が感じられた。

あとから話を聞いた篤胤は、ここには寅吉の性格があらわれているとかんがえた。

「おろかだから騙されたと解釈できないことはないが、おろかではなく、むしろ寅吉は賢いのだ。自分の賢さを知り、信じているから、かえって騙されてしまう」

猫を追いまわす寅吉

寅吉はおろかではない、おろかではなくて賢いからこそかえって騙されるのだという解釈の見本として、篤胤はもうひとつのエピソードを書いている。

「人間のからだから火が出るそうさ」

「特別に火気の強いひとがいる、そういうひとの着ている衣服からは火が出るそうさ」

「暗いところで黒猫の毛をさかさに撫でると火が出るそうさ」

門人たちがわいわいがやがやとしゃべっているのを聞いていた寅吉、気吹舎で飼っている猫が黒いのをさいわいと、つかまえておいて、さかさに毛を撫でたらピカツと光ったから、「猫から火が出た、出た」とおおさわぎして喜んだ。

屏風をたてまわして暗くしては猫をひっつかまえて連れ込み、ギヤーギヤーとさわぐのもかまわずに毛を逆撫でしては「火が出た、火が出た」と嬉しがり、篤胤がやめなさいといっても、やめない。

篤胤の見えるところ、幽界の山人たちのからだから出る火と猫の毛から出る光（静電気）を混同しているようだ。

寅吉自身は自分のからだから火を発する能力は身につけていないのだが、猫を撫でて光らせられるのを知ったことで自分の能力を師

の山人たちのそれに擬しているのだろう。

だが、ここで寅吉に「おまえはまだ修行が足りない、からだから火を発することなんか出来やしないのだ」と宣告するのは無情というものだ。彼自身、火と光の相違を知っていながら知らないふりをし、そのうちにはきつと本物の火を出せるようになりたいと、さらなる修行の決意をかみしめているのかもしれないのだから。

「かたちを造って祈れば妖怪悪魔が取り憑くものだ」——寅吉の意見は明快そのもの

この節のテーマは「偶像論」になる。「偶像論」というと、なにかおかげさで面倒くさいような先入観があるが、そういったものでもない。

越後の門人の戸田伴七が湯島にやってきて気吹舎にしばらく逗留し、篤胤の教授を受けていた。

伴七は益荒男(#益荒男)の形容がびったり、髪も鬚も手をかけず伸び放題にのびしている。寅吉は伴七の顔を見るなり、「岩間の古呂明の顔をやさしくするとこの顔に似てくる」といい、すぐに馴染(#馴染)じんだ。

伴七は武者修行を兼ねて江戸に出てきている。腕自慢の武者を相手の勝負のかずかず、僧侶や神官を相手にまわして議論をふっかけて勝った戦果を、大声でしゃべりまくって気炎をあげている。

「修験者だという男と議論して勝ちました。勝ったしるしに、この聖天を……」

論戦の戦利品として聖天の像を取り上げ、錐で穴をあけて煙草入れの根付にしているのを自慢そうに見せる。

聖天とは大聖歡喜天のことで、像には単身像と双身像の別がある。単身像は刀・棒・牙・輪・索などをにぎり、双身像は男天の魔王と女天の十一面観音の化身とが抱きあっているデザイン。聖天に祈れば富貴・病氣退散・男女和合・子孫繁栄にめぐまれるとされる。穴をあけて根付にしたというから、三々四センチほどの大きさだろう。

こういう荒っぽいことが嫌いな篤胤は、伴七がさしだした聖天像をわざと手に取らず、「こんな汚らしいものを、よくもまあ身につける気になるものだ。わたしは、手にするのはおろか、見るさえ嫌いです」といい、しみじみと伴七の心得違いをいましてやった。

「われわれは学問をして、古い時代にながれていた真理を究めようとする仲間なのです。それにはまず、心に真の柱をたて、身体を清浄にたもたなくてはなりません。神の嫌いたまう品物を身につけるのは避けるべきでしょう。その聖天像は川か海に捨てなさい」

姿勢を硬くし、師のいましめに耳をかたむけていた伴七は、親に叱られた子のように身をすくめて、いった。

「わかりました。この聖天像に、決して崇らぬように申しつけてから、捨てましょう」

益荒男ぶりの伴七が身をすくめて誓う姿には、篤胤も苦笑してしまふ。

「あなたのような剛の者が、クシユンとなってしまうのは意外ですよ。古学の道を行くわれわれ、これしきのを恐れてどうするかと思うでしょうが、そうとばかりもいえないのです。その聖天像など、そもそも何の意味もないのですが、祈れば験があると思われているかぎりには妖魔や遊魂が乗り移っていると見なければならぬのです」

それから篤胤が「諸君は、どう考えますか？」とたずねた。田河利器と竹内健男はすぐには答えなかったが、寅吉は躊躇もなく発言したものだ。

「先生がおっしゃるとおりです。岩間山の師もいつていました、もともと形のないものでも形を造って祈り立てれば妖魔が取り憑いて変化の業を見せるものだ」と

それから寅吉は戸田伴七のほうにむきなおり、
「その聖天像を海や川に捨てるのはよくないことだよ、戸田さん。海に捨てても網にかかって拾いあげられると、『そら、霊像があらわれた』などと迷信の対象になり、ひとの心をまどわすからね。溶

かして潰してしまうのがいちばんいいんだ」

真つ直ぐな寅吉の意見に感心した戸田は、「この聖天像はかならず
鑄潰します」と約束して越後にもどっていった。

「平田篤胤は山師だ」

あなたのことを「山師だ」という者がありますよと、佐藤甚之助
がこつそりおしえてくれたのは十二月一日のことだ。

佐藤甚之助は塙保己一の門人で、篤胤とは去年からの知り合い。
そして保己一といえば目が見えないひとのための公認組織——検校
一座の総録という高い地位にあつて知らぬひとはなく、和学講談所
を主宰する国学者としても有名だ。千巻におよぶ『群書類聚』の刊
行をおわり、やすむまもなく『続群書類聚』の編纂と刊行にむけて
七十四歳の老軀に鞭打っている。

甚之助は屋代弘賢とも知り合いで、弘賢から、篤胤が寅吉を材料
にして幽界研究をすすめているのを聞いていた。

「幽界についてのあなたのご意見が寅吉の出現によって事実である
ことが証明されつつある、そのように輪池翁はおっしゃるのだが、
ほんとうですか？」

輪池翁とは屋代弘賢の号だ。弘賢を輪池翁と呼ぶ姿勢に、弘賢に
たいする甚之助の尊敬の気持ちがわかる。この甚之助にならば本当
のことを教えてもまちがいはなかるう。

「そのとおりです」

それでは申し上げておかなければなりませんと前置きして、甚之
助がきりだした。

甚之助が神道をまなんでいる師を大竹といい、その大竹のところ
へひとりの神官がやってきて、「平田篤胤は山師である」と、さん
さんに悪口をいって帰った。寅吉が語る幽界のことも、篤胤が言い
含めたのを寅吉がくりかえしているにすぎない。神感によつ
て天の磐笛を得たなどというのものでもないウソ、じつは古道具
屋から買い求めたものであり、自分はその道具屋を知っているが、

篤胤が「神感で得た」などとウソをついているのには腹を立てている、などなど。

さんざんに悪口をいって神官が帰ると、大竹は甚之助を呼んで、こういった。

「平田氏は存じあげぬが、いまの世で神の道を弘めようとなさっている第一人者が平田氏であるのは聞いている。その平田氏がこのよくな悪評を浴びせられては、おなじ道を行くわれわれにとっても恥ずかしく、くやしい」

あなたは平田氏と悪意にしておるようだから、じかに話を聞いてきてくれという。甚之助は警笛のことはすでに篤胤から聞いていたから、そのとおりに伝えておいたが、寅吉についてはまだ聞いていないので、あらためて話をうかがいたい、これが佐藤甚之助の用件だった。

おなじ道に志すものの連帯を篤胤はあたかく感じた。

「いまは寅吉はわたくしどもと共におりますが、そもそも寅吉を見つけたのはわたくしではなく、下谷長者町の山崎美成なのです。寅吉のいうのと、わたくしの幽界説と合致するところの多いのに輪池翁が気づかれ、わたくしは輪池翁に連れられて美成のところに出向き、はじめて寅吉と話をいたしました。ねじけたひとが何といおうとも、真実は知るひとぞ知る、うちに省みて恥じるところは何もありません」

感謝の気持ちをおおきく伝えていただきたいと付けくわえ、篤胤は甚之助をおくりだした。

「天狗小僧寅吉は逮捕され、平田篤胤も処罰された」という噂——
——「ひとの口ほど恐ろしいものはない」

佐藤甚之助が帰っていったから、篤胤はしみじみと既往を述懐した。『仙境異聞』の述懐の部分は、自己の生い立ちを語ることのがくなく、篤胤にしてはめずらしく懐旧の気分の横溢する語り口になっている。

「いったい、わたくしは、何という暗い因縁に生まれついたのか。生まれついてから親の手でそだてられたことがなく、乳母にやしなわれ他の家の養子になり、二十歳をすぎるまでの苦勞はいうにいわれぬものだった」

二十歳のときに江戸に出てからも苦勞は絶えなかった、苦勞や憂きことのすべてを味わった。だが、「現世に寓居している」と思いさだめている自分だから、辛苦こそが世の常と考え、古道をあきらかにする志を立てた。

書を読み、書を著し、正道を世にひろめるについては目に見えぬ幽界はもちろん、鳥獸虫魚、木に草にも心をくばり、憎まれぬようにつとめてきた。

世間との付き合いでは、およぶかぎり「陰徳を積む」をモットーにして、他人にどういわれようとも、うちに願(まごころ)みて恥ずかしいことはやるまいとの決意でやってきた。

ひとのために良からぬことをやった記憶もないのだが、それなのに「平田篤胤は山師だ」などといわれる。大竹氏のところへやってきたという神官の——神官の名は伏せ字になっている——は未知のひと、いちども会ったことはないし手紙のやりとりもない。これが暗い因縁でなくて、どうする！

佐藤甚之助が神官のけしからぬ振る舞いを知らせてくれたからしばらくあと、上総の中原村の玉依姫神社の神官をしている弓削春彦が不安そうな顔つきで気吹舎にやってきた。

弓削は篤胤の顔を一目見るなり、「ああ、お元気なお顔を拝見して、安心しました」とはればれした声でいう。弓削の不安な顔付きの理由は、つぎのような次第であった。

けしからぬ神官　と弓削春彦は神官同士の付き合いがある、上総から江戸に着くとすぐに弓削は　をおとずれた。もちろんが大竹氏に篤胤の悪口をふきこんだ事件は夢にも知らない。

弓削が篤胤と親交があるのを知ってか知らずか、会うやいなやは篤胤のことをさんざんに罵(ののし)り、「その寅吉という小僧は

お縄を頂戴、篤胤もお咎めをうけましたよ」といった。弓削は
の家を飛びだして気吹舎に駆けつけ、篤胤が元気で見ているのを見て安
心したという次第。

だけではない、篤胤の悪口を言いふらしているものは何人も
いる、そういう事情がわかってきた。

こんな噂もある——篤胤は自分の妄説をひろめるために、「本居
宣長が幽界で天狗になった」というフィクションをでっちあげた。
宣長天狗が使者としてこの世に派遣したのが天狗小僧の寅吉だとい
うことにして、寅吉にこっそりと自説を吹きこみ、自説と幽界の様
子がいかにも合っているように芝居を仕組んでいる、云々。

こんな噂もあった——寅吉は神代の文字を書くというので評判に
なっているが、その神代の文字なるものはすべて篤胤が教えたもの
だ、云々。

あれこれのくだらない噂を聞いて心配する門人や知人のなかには、
あの小僧をはやく追っばらってしまうほうがいいですよ、と忠告し
てくれるものもある。

門人のなかにはまだ儒学の影響から完全には脱却できず、幽界の
理論を信じられないものもいる。そういう門人は世の噂にまどわか
れ、寅吉の言葉を疑う傾向がある。

この自分さえも——と篤胤は告白している——心が動揺すること
がある。まことに、ひとの口とは恐ろしいものだ。

オズメ婆の遺言

十二月二日、門人の鈴木吉兵衛敬貞がやってきた。しばらく顔を
見せなかったのは、妻のトワが重い病気にかかり、今日か明日かの
命と診断されていたからだ。

篤胤は吉兵衛と同様にトワを愛していた。夫婦そろって神の道を
大切にしているのが頼もしいうえに、トワは強い性格ながらも機智
滑稽な言葉を連発して夫をなぐさめることがあり、そこに目をつけ
た篤胤はトワにオズメ婆と仇名をつけていた。オズメはオズメドリ

のこと、漢語では護田鳥、日本語では於須売止里と書き、ひとの姿を見ればやかましく鳴きたてるところが主人の家を護る姿を思わせるといわれる。

妻が危篤の病床にあるのに鈴木機智兵衛が篤胤をおとずれたのはほかでもない、トワが苦しい息の下から、「どうか先生に、このことを伝えて」と吉兵衛にたのんだからだ。

篤胤のところには天狗小僧なる少年があらわれ、幽界のことをあれこれというのを篤胤が信じている——これを聞いたトワは咄嗟に「妖魔の仕業だ、先生があぶない！」と直感したのだという。

篤胤の幽界学説がひろまるのを嫉妬した妖魔が、まず寅吉を使者として派遣し、篤胤の意見のすべてに「ごもつとも、ごもつとも」と言わせ、そのうちに篤胤を深い災難の淵に引き込もうという策略にちがいない——

「妻のいうのに筋が通っていないとも断定できない……そのようにも思えるのですが」

案じ顔の鈴木吉兵衛に、篤胤は答えた。

「策略ではなかるうか……そのことについてはわたくしも早くから警戒していました。そしていまは、これは策略ではないと自信をもつていえます」

どうかよろしくオズメ婆に伝えてくれといって吉兵衛を送りかえた二日後、オズメ婆ことトワが息を引き取ったと知らされた。

オズメ婆は寅吉を誤解していた、篤胤のことも正しく理解していたとはいえない。しかし篤胤はオズメ婆の気づかいに、あたたかいものを感じたはずだ。

この世には幽界が確実に存在している。そのことを確かめて、多くのひとに教えてやりたい——それが師匠篤胤の生涯の願いであることをわかつてくるれひとが、すくなくともひとり江戸の街に生きていた。

オズメ婆は、本当の幽界から、本当の天狗があらわれて篤胤の幽界実在説の生き証人になってくれることを願っていた。

オズメ婆の願いの痛切さは、篤胤のそれよりも強かったかもしれない。だからこそ、寅吉が本物の天狗であるかどうかを彼女なりの感覚で審査して、「お師匠さま、その寅吉はニセモノですよ。遠ざけなければ……」と生涯の最後の息をふりしぼって警告してくれたのだ。

オズメ婆の審査はまちがっていたが、それはいま問題ではない。

オズメ婆の魂は幽界に行き、幽界で永遠に生きつづける。生きることに熱心であったオズメ婆、幽界の存在を確信していたオズメ婆、彼女の魂が永遠に生きつづける場所——幽界がこの世に存在していないなら、これほど残酷なことはない！

幽界が存在していないとなると、だれよりも困ってしまうのは篤胤自身の魂なのだ。

「おお、オズメ婆、元気だったか。わたしもようやく、ここにやって来たよ！」

「気吹舎の先生、お待ちしましたよ！」

ともどもに手をにぎり、再会をよろこぶ場所がないなんて、そんな酷いことはない。

伊勢からやってきた荒木田末寿

オズメ婆こと鈴木トワの夫の鈴木吉兵衛がやってきて、今際の際の妻からの警告を篤胤に伝えたのが十二月二日、トワの死を知らされたのが四日、そのあいだの三日には荒木田末寿(よしまつ)がたずねてくれた。

荒木田末寿は伊勢神宮の内宮の権禰宜で、明和元年(一七六四)の生まれだから篤胤より十二年年長の五十六歳、鬘鑠(まげ)としている。

末寿はかつては本居宣長の門人だった。

篤胤はいわゆる「宣長没後」の門人だから、宣長の警咳に接したことはない。荒木田末寿は寛政四年(一七九二)の入門で、宣長は六十二歳で健在だった。宣長の生前の門人と没後の門人とを区別す

るのは意味のないことだが、ともかくも宣長生前に入門した荒木田は学説をめぐって師の宣長と対立し、鈴屋一門からはなれて平田篤胤の門人になった。

伊勢神宮の神官がすべて宣長の門人になっている、というわけではないが、伊勢はいわば宣長の学問のふるさとだ。神宮の神官であつて、しかも宣長の門人となればエリートなのに、エリートの身分を捨てて篤胤の門人になった。それだけでも異常なことだが、未寿が新しい師にえらんだ篤胤は、宣長の門人のあいだでは評判がよくない。

文化十年（一八一三）に篤胤が刊行した『霊の真柱』は重大な点で宣長の学説を批判する内容のものであった。その『霊の真柱』が宣長没後の門人と称する篤胤によつて刊行されたから、宣長の門人グループ（鈴屋門）主流のあいだに強い衝撃が走つた。宣長の後継者の本居大平のところには、全国の門人たちから問いあわせが殺到した。もちろん、篤胤が「宣長没後の門人」を名乗るからトラブルになる。

「平田篤胤の『霊の真柱』なる書で展開されている意見は正しいのでしょうか。故翁（宣長）がいわれなかつたことが多く主張されているように見受けられるのですが……」

「『霊の真柱』は承認できません。いったい篤胤は御門人なのでしようか、ご教示ください。熱心な姿勢ではありますが、承服できない意見をあれこれと吐いているようです」

阿波の門人の春枝広高が『霊の真柱』を読んでの疑問を本居大平に訴え、大平にかわつて植松茂岳というひとが答える形式で書かれた『天説弁』という書物がある。

『霊の真柱』には、望遠鏡で月を観察して白く見えるのは地球の海にあたり、むらむらと見えるのは陸、陸には山も見える。月は地球とおなじように球形であり、球形の表面には月の国がある、と書いている。これを正しいと認めるべきなのでしょうかというのが春枝広高の質問だった。「われわれ鈴屋門一同はこの意見を正しいと

認めるべきなのか、どうか」というところに質問の重点がおかれている。

植松茂岳の答え——取るに足らぬ私言にすぎません。月のなかにあるものが国のように見えるからといって、古典に書かれていないことは取り上げる必要はないのです。(田原嗣郎『平田篤胤』による)

鈴屋門と篤胤とは所詮は学問の性格を異にしている。その篤胤のところへ、鈴屋門を脱退して入門してきたのが荒木田末寿なのだ。入門してきた荒木田、荒木田の入門を許可した篤胤、師弟ともどもに勇気を奮ったといえる。

「わたくしも天狗の業を経験した」と荒木田はいい、篤胤をはげました

荒木田が江戸に出てきたのは「いわゆる檀家まわり」のためだと篤胤は書いている。伊勢内宮の、れっきとした権禰宜の荒木田の江戸出府を「檀家まわり」と書いたのは佛教非難の用語にまぎらせたユーモアのつもりなのだろう。天狗小僧寅吉と篤胤自身にたいする非難攻撃がさかんになってきて、精神的に苦しい時期、親友で門人の荒木田がわざわざ伊勢からたずねてきてくれた感動をユーモアにあらわしたのだろう。

「寅吉とかいう天狗小僧のことで、世間はあれこれと騒いでいるよ
うですな」

「騒いでおりますよ」

「世間がいくら騒いでも、天狗は実在すると信じています」

荒木田にちからづけられるのを感じて篤胤は寅吉の言動を記録したものを見せた。のちに『仙境異聞』として世にあらわれるメモの段階であつたらう。寅吉が書いた文字も見せた。

しばらくして、荒木田は顔をあげ、ちからづよくいった。

「寅吉はまさしく正真の神仙に仕えているにちがいません。なぜかという、寅吉の言葉や行いはじつにおだやかなものに思われ

るのです」

神仙や神仙に仕える天狗にもいくつかのタイプがあり、タイプによつては荒々しい振る舞いで人間を脅かすことがあるというのが荒木田の意見だ。

駿河や遠江、三河あたりの天狗は松明を灯して旅行者をからかうのがふつうだ。あれは文化七年の夏のころでしたが、と荒木田は回想する。

下男をふたりつれて秋葉の山を夜行していると、例のごとくに峰から峰にかけておびただしい数の明かりが見えた。遠くの山に明かりが見えたかと思うと、つぎの瞬間には目のまえにあらわれて脅かす。はげしい山鳴りの音をひびかせたり、大木を抜きたおしたりするものだから、下男どもは恐れて動けなくなった。

荒木田はまず荷物を地において腰掛け、大声で一首をものした。

安国と安らけき世に蚩なす

かがやく神は何の神ぞも

それから大声で怒鳴った。

「われは伊勢大神宮の神官、神の御用によつてここに行くのを、知らんのか！」

荒木田の大声がおわるとすぐ松明（びんせき）は消え、山鳴りもおさまった。

秋葉山は天竜川の上流、標高八六六メートルの山頂に秋葉神社があり、ふるくから防火の神として信仰されてきた。そして、あつい信仰をうけてきた山には天狗がいるといわれてきた。秋葉山も天狗の山として信仰され、恐れられてきた。

秋葉の天狗は松明を灯して旅行者をおどかすぐらいしか能がないようだが、江戸の街にあらわれた天狗小僧寅吉ははるかにレベルが高いのです——荒木田はそういつて篤胤を上げまし、伊勢にもどつていった。

7章「湯島にながれる幽界の楽の音」

林羅山と平田篤胤

気吹舎の文政三年（一八二〇）は天狗小僧寅吉の招聘、そして寅吉に質問をあびせかけて幽界の実態を知ることであけくれた——そういう印象の強い一年になった。

江戸の門人、鈴木吉兵衛の妻のトワが今際の際の息の下から「寅吉はニセモノです、警戒なさってください」といってよこし、そのまま死んでしまったことや、伊勢内宮の権禰宜の荒木田末寿がわざわざ激励してくれたりして、篤胤の心は右に左にゆれうごいた。

新しい年——文政四年は収穫の年になるだろう、いや、そうしなければならぬ。

寅吉はあいかわらず湯島天神男坂下の気吹舎で篤胤夫妻とともに暮らし、要望にこたえて諸家を訪問しては、幽界の実況と体験を説明するのにいそがしい。

そして平田篤胤は寅吉の幽界体験談を記録することから、記録にもとづいて論考をまとめることに重点を移しつつあった。寅吉の言動や、寅吉との問答をそのまま記録した『仙境異聞』は文政五年（一八二二）に刊行され、その前には『古今妖魅考』が公表されている。『古今妖魅考』は林羅山（*Sanshū*）の『本朝神社考』の見解に賛同し、さらに発展させようとしたもので、「天狗そのほかの妖魔は実在する」ことを文献によって証明しようとしたものだ。

篤胤が林羅山の著作をもとにして『古今妖魅考』を書いたということ、これだけでも多くの議論がとびだしたはずだ。

林羅山といえば儒学の本山みたいな存在、徳川家康の知遇を得て江戸の上野の忍岡に土地を拝領し、塾舎と文庫、先聖堂をたてた。

はじめは林家の私塾だったが、五代將軍綱吉のときに湯島に移転し、やがて幕府の正式な学問所の聖堂になった。聖堂は旗本や御家人、諸大名の家来に儒学をおしえる官学であり、大名諸家に招聘される儒者の養成所の機能もはたしていた。

林羅山の子孫は大学頭という役職を世襲するしきたりになっていて、いわば儒学——官学の家元。その林家の先祖の羅山の著作をふまえて、国学者の平田篤胤が『古今妖魅』なる大著を刊行した。

儒学と国学とは不倶戴天の敵とはいわないまでも、とにかく儒学や仏教に影響される以前の日本の姿をもとめようとするのが国学の出発点のはずだから、相互の親しみがあるはずはない、すくなくとも相手方の学説には目をつぶって知らぬふりをするものだといった常識が出来ている。

ところが、篤胤はそうではない。そうではないどころか、林家の先祖の羅山の『本朝神社考』の意見に賛同し、それをふまえて『古今妖魅考』を書いて世に出した。

もともと篤胤は鈴屋門のあいだでは異端視されている、そこへもってきて『古今妖魅考』の刊行だ。たとえ「準・門人」の性格の宣長没後の門人といえども、もう許せない、破門してしまえという声があがって当然のところだが、篤胤本人は平然としていたはずだ。

——羅山先生の御意見は天狗や妖魔の实在を認めておられます、つまりわたくしの学説の支えなのです。それをふまえて著述をして、どこが悪いというのですか！

颯爽としていた。

もうひとつ、これは偶然なのだが、篤胤が気吹舎をかまえている湯島天神男坂下と湯島の聖堂とは、手をのばせばとどく至近距離にあった。

幕府の官学としての湯島聖堂——昌平坂学問所の存立は磐石だが、そのかわりにとっていいかどうか、華々しさとか新鮮さといったものは何にもない。古色蒼然という言葉そのままの学風を維持している。そうあってこそ官学だと、いっていけないこともない。

かたや篤胤の気吹舎、ただの私塾だから経営は不安定そのもの、いつ倒れても不思議はないかわりに主宰者篤胤は意気軒昂、学風はフレッシュそのもので、この一年間はスキヤンダルの本山みたいだった。新年になってからもスキヤンダラスな雰囲気は変わらない。

そしていまや『古今妖魅考』の刊行によって、おとなりの聖堂を
気吹舎が圧倒しそうな関係になってきた。

「『天狗絵巻』を見たいものだ！」

『古今——』とはいいいながら、『古今妖魅考』の検証対象になった
ことがらのほとんどは『古』に属し、『今』のものはすくない。そ
して、この点にこそ篤胤が『古今妖魅考』を書かねばならない深刻
な事情が反映されていた。天狗そのほかの妖魔の実在感は時ととも
に希薄になり、そこには日本人の「心が安らかでない」状況の最大
の原因があるといわねばならないからだ。

天狗という名の由来の詮索にはじまる篤胤の検証は、まさに博覧
強記、これを個人でやってのけたのは驚嘆に値いするが、読んでい
て面白いものではない。篤胤は文献実証主義の学者ではないという
先入観があるためか、書いている篤胤自身も楽しんではいないよう
な印象をうける。

しかし、たとえば、つぎのような部分では篤胤の心境に直接に触
れる感じがして、湯島天神下で汗をかきながら書いている篤胤が身
近になってくる。

「『埃囊抄(あいにそう)』に、八坂神社の寂仙上人遍融が『七天狗の
絵』というものを描かれたとの記述がある。寂仙上人とはいつごろ
の僧であろう、七天狗とは何と何の天狗のことなのだろう。この絵
巻は現存しているのだろうか。どうかして見たいものだ。俗な言い
方に、事の成就しがたいことを『八天狗をつかっても成りがたい』
などという。この八天狗と七天狗とは、なにか関係があるのだろうか
か」

複数の時間が存在する

『古今妖魅考』では近い時代のことは多くは取り上げられていな
いのだが、ゼロではない。元文五年（一七四〇）に行方不明になっ
た木内兵左衛門のケースは、数すくない近代の天狗登場事件として

紹介されている。

寅吉があらわれる八十年前の元文五年、比叡山延暦寺西塔の釈迦堂の修理がおこなわれた。近江信楽と大津の代官が奉行をおおせつけられて工事がはじまり、大津代官の家来の木内兵左衛門が三月七日に行方不明になったのが発端。

兵左衛門の下駄が落ちていて、弁天社のそばには脇差がねじまげられて捨ててあり、脇差の小刀は三つに折られ、下帯も三つに切れて捨ててあったから、天狗の仕業にちがいないときまった。

その日の夜の丑三つ時、釈迦堂の庭のあたりで「頼もう々々々」と呼ぶ声がある。お堂の上に羽の生えた異形の者が立っていて、「降ろしてくれ」と叫んでいる。

「兵左衛門ではないか？」

「兵左衛門だ、降ろしてくれ」

羽と見たのは羽ではなく、破れ傘をひらいて差していたものかわかった。四郎という男が棟にあがって、「降ろしてやるぞ」と声をかけたたん、兵左衛門は気をうしなってしまう。四郎は兵左衛門のからだを帯でくりつけ、腹ばいで降りてきた。

兵左衛門が正気に返ったのは三日あとのことで、行方不明になっていたあいだの経験を聞けば、まさしく天狗の仕業にほかならなかった。

三月七日の夕方、自分の名を呼ぶ声だったので出てゆくと黒づくめの衣装の小法師がひとりあらわれ、「兵左衛門だな」といった。そこへまた赤ら顔の男があらわれて、玄関の屋根に上がれという。「主を持つ身だ、主のゆるしがなければ、どこにも行けぬ」
抜こうとした脇差は奪いとられ、投げつけられて鞘が割れ、刀身がねじまがった。

ここで篤胤が自分の感想を書いているのが面白い。篤胤は「武士たる者に刀を抜かせるように仕向けたのは、天狗のほうに非がある」と裁定している。

武士が刀を抜くのは決して私的な脅迫のためではなく、公的な任

務の遂行なのだ。いかに天狗であろうとも、天皇の支配なざる国内で、このしきたりを知らないのがそもそも誤りなのである、と。

さて、兵左衛門は刀のつぎに下帯を取られた。下帯だけは見のがしてくれと懇願するのを無理矢理にはずさせ、はずした下帯を杖のようなものに掛けたら、三つに切れた。

玄関にひきあげられ、反抗した罰としてさんざんに殴られているところへ、背の丈が一丈ばかりもある大きな高僧があらわれ、なにやら話していた。

「おい、いつしよに行くんだ！」

反抗する気は失せていた。まるい盆のようなものになり、小法師が背中をおさえつけると兵左衛門のからだは天空たかく舞いあがった。

（ここに篤胤の注釈——その高僧は延暦寺をひらいた伝教大師最澄であろう。まるい盆のようなものに乗せられたというのは比叡山为天狗が得意とする「凡人乗躡の術」にちがいはない）

飛行の先は秋葉山だという。海の上を飛びながら、恐ろしさに震えていると高僧があらわれて、「水も漂わすことあたわず」という言葉があるように、怖いことはないのだ」といつてくれた。

秋葉山らしい山の上になると、深い谷底から火焰がのぼっている。「あの谷に落ちれば焼け死ぬぞ」と天狗に脅され、震えあがったが、そこへまた高僧があらわれ、「火も焚くことあたわず」という言葉があるように、恐ろしいことはないのだ」といつてくれた。目をつぶって盆から飛びおると、そこは畳六枚ほどの広さの岩の上だった。

（ここにまた篤胤の注釈——「水も漂わすあたわず」も「火も焚くことあたわず」も法華経の言葉で、伝教大師がはじめてつたえた天台宗の基本だ。恐ろしいことを強要して人間の心を試すのは神仙がしばしばやることで、深い意味があるのだが、それを天狗は自分たちの楽しみだけでやっているようだ）

天狗たちも秋葉山でしばらく休み、そのあとは妙義山、彦山、鹿

島などへ行った。兵左衛門の感じでは十日もすぎたと思われるころ「どうか帰してくれ」と天狗に頼んだ。

（篤胤の注釈——兵左衛門が天狗に誘拐されていたのは二十四時間だ。そのうち幽界に連れてゆかれたのはわずかの時間のはずなのに十日以上もすぎていたと思うのは奇妙だが、こういう事情があるのではなかるうか。つまり、神仙が支配する幽界に誘われると長い時間を短いと感じ、妖魔の支配する世に連れてゆかれると短い時間を長いと感じる、そういった相違があるのではないか。検討に値する問題だ）

平田篤胤を「幽界の専門家」といつても失礼にならないどころか、むしろ喜んでもらえるはずだとの前提からいうと、この部分などはまさに幽界専門家篤胤の面目が躍如としている。

兵左衛門という凡人をひつつかまえ、いたずらをして楽しむ天狗たちと、天台の開祖としての品位をうしなわない伝教大師最澄とが同じ場面に登場してくる、この意外性には誰でも困惑するはずだ。

篤胤もはじめは困惑したはずだが、幽界専門家を自認するものとしては困惑のままではすまされない。頭をひねって、ひとつの原則を仮定した——時間はひとつではない、複数の時間が存在している、たまたま同じ場所に複数の時間が介入してくることがあるのではないか。

複数の時間が存在する——この原則を立てることで、「この世のなかにあの世がある」とする仮定が、仮定から現実になって定着する。

複数の時間が存在するとかんがえることによって、幽界や天狗の存在がよりいっそう現実的になってきた。江戸の湯島天神男坂下にいるときの寅吉と岩間山の幽界で修行しているときの寅吉は別々の時間を生きている——のではないかと解釈するのが可能になってくるわけだ。

さて、木内兵左衛門の事件にもどる。

さらわれてから十日以上もすぎ、もう帰してくれと天狗に哀願したら、白髪の老人があらわれ、「カネをやるう」と言った。大判小判、一歩金、小間銀をとりまぜて山のように積みあげ、「このカネはいくら遣っても減ることはない」という。

取るうとすると高僧があらわれて、忠告してくれた。

「そのカネを受けとれば、おまえのふたりの伯母の命が一年ずつ短くなるのだぞ」

（篤胤の注釈——白髪の老人が高僧の仲間なのはいうまでもない。

それからまた、人間が遣う金銀は幽界では遣わないのがふつうだと聞いたが、この天狗たちの掟は別なのだろうか？）

目のまえに山と積まれたカネを拒絶した兵左衛門の態度は、天狗たちをおどろかせたようだ。

「奇特なやつだな。それでは一生を安穩に暮らせる薬の調合と行法を伝授してやる。薬剤のうちの一味はこの山のほかにはない、調合の度に山に登ってきて、受けとれ」

行法というのは、まず三年のうちは心身を清浄にたもち、とくに女を近づけないこと、三年すぎたら妻を抱くのはかまわない。ただし薬を調合するときには妻も抱いてはならぬというもの。

それからまた言葉を足して、いった。

「山を粗末にする悪人の見せしめとして、おまえを戒めたのだ。そちらの世にもどったならば、おまえが経験したことを話して聞かせるのだぞ」

空を飛んで、高い山のうえに降ろされたと思ったのは釈迦堂の上で、そのときにはもう天狗たちの姿は見えず、「頼もう！」と、あの高僧の大音声が山河にひびいた。

「わたくしを助けていただいた貴方は、いったい何方なのでしょうか？」

「この山に九百年にわたって住む者だ」

高僧がいいおわると兵左衛門は気をうしなってしまう、気づいた

ときには釈迦堂の下に助け降ろされていた。

高僧は天狗になる——篤胤の確信

木内兵左衛門の異常な体験は『叡山天狗之沙汰』という書物になっていると篤胤は注釈している。左には幽界体験者の寅吉を、右には『叡山天狗之沙汰』をにおいて篤胤は『古今妖魔魅考』を執筆していたわけだ。

寅吉の言動と『叡山天狗之沙汰』が伝える天狗のイメージが相乗効果を発揮して、篤胤は天狗のイメージをますます鮮明なものにした。とくに、高僧が天狗になるのだといわれてきたのを、よりいっそう確実な事実として把握したのは大きな収穫になる。

天狗たちは兵左衛門を釈迦堂の屋根に降ろしたあと、すぐに姿を消してしまった。役目が終わったから消えたというよりは、「頼もう！」の大音声に圧倒されて、すぐごと退散していったようだ。

大音声をあげて天狗たちを追いはらったのは伝教大師最澄にちがいないと、篤胤は注釈のなかで強調している。その理由はつぎの二点だ。

まず、「われはこの山に九百年にわたって住んでいる」といったこと。最澄が没したのは弘仁十三年（八二二）、兵左衛門の事件のあった元文五年（一七四〇）は最澄没後九一八年だからほぼ九〇〇年に近い。本人の最澄でなければこれほど正確にいえるはずがないという理屈だろう。

つぎに、仏教では出世間とか極楽往生とかいって人間の世とはまったく別の世があるように説くが、これはすべて妄説だ。だから、高僧が没したあと、その魂はどこに行くのかといえば幽界の天狗になるほかはないのである、こういう理屈になっているようだ。

もちろん、仏教の高僧だけが天狗になるわけではない。はやい話、兵左衛門を幽界に誘拐していじめた天狗たちはいわゆる「小天狗」であり、高僧など品位の高い人間の魂が天狗になった、いわゆる「大天狗」とはレベルが異なるわけだ。

小天狗は大天狗の隙をぬすんで悪いことをやるが、それを大天狗に見つけられては叱られ、油をしばらくされるということをくりかえして幽界の永遠の時間が過ぎてゆくらしい。

天狗は人間の非を糾弾する

兵左衛門の、その後はどうなったか？

小天狗に戒められた最初の三年間は行いをつつしんでいたが、その三年がすぎるとにわかに行いが乱れ、茶屋の女といざこざを起こしたあげくに心中して死んでしまった。

兵左衛門の最期を篤胤は「哀れ」と見て、追悼している。小天狗に妙法をさずけられなかったならば兵左衛門は貧乏ざむらいそのまの正直な生涯をおくったはず、それが幽界にさらわれて妙法を知ったばかりに黄金につつまれ、黄金のために行いを乱して非業の死をとげた。

そもそも兵左衛門が小天狗に誘拐されたのは、人間の世でいう「的はずれ」だといえるかもしれない。これは『叡山天狗之沙汰』を読んだ篤胤なりの解釈のようだが、それによると、兵左衛門は仲間が悪いことをやっているのを諫めなかった、だから小天狗たちは兵左衛門を誘拐して懲らしめた。

つまり兵左衛門は無実なのだが、まったく関係なしともいえないだろう。仲間の悪行を知ってはいたらしいのだから。

大天狗の最澄は、小天狗のやりかたは理屈に合わないと判断した。海上はるか高いところをはこばれる兵左衛門の恐怖をやわらげてやり、火焰をふきあげている谷底を見て恐れおのく兵左衛門に「焼け死にはしないよ」といって、安心させてやった。

しかし——ここが大事なところ——兵左衛門の仲間の悪行については糾弾し、罰をあたえなければならぬとする点では大天狗の最澄は小天狗と同じ立場に立っているのだ。

釈迦堂の屋根のうえに兵左衛門を無事に降ろしてやったのは最澄天狗だ、幽界から人界へもどしてやったのだ。

しかし、この場面を悪役小天狗と善役最澄大天狗との対決、善役最澄大天狗の勝利と見るのは率直すぎて、まちがっている。

兵左衛門の仲間が——人間が——悪いことをやっている、それを許さない、罰するぞという意志を伝えるためには誰かを誘拐してシヨックをあたえる必要があった。そのうえに、人界から幽界へ、幽界から人界へと人間を移動させられるのは天狗なんだと思い知らせるためにも兵左衛門を無事に釈迦堂の屋根に乗せてやる必要もあった。つまり大天狗の最澄は小天狗たちがやったことの仕上げをひきうけたのだともいえる。

人間の非を指摘し、シヨックをあたえることで懲らしめる、それは大天狗と小天狗との共同作業なのだということが『叡山天狗之沙汰』から得た篤胤の成果であり、それを綿々と書きつづつたのが『古今妖魅考』の著述、刊行だった。

狂言を稽古する寅吉

湯島天神男坂下の気吹舎は文政四年（一八二一）の新年をめでたくむかえ、二日には主宰者の平田篤胤と門人がそろって深川八幡へお参りにいった。寅吉が同行したのはいうまでもない。

湯島から深川は近い距離ではない。篤胤は四十六歳、老年ではないが若いとはいえない年齢で、どうしてわざわざ深川まで足をのばしたのか。すぐ近くの湯島天神には毎日のように参詣している、せめて正月ぐらいは深川まで行かねばと勇気を奮った次第であったのか。

篤胤の気持ちや付度(そとづか)していうと、あえて世間の視線に身をさらしてやる、そういう気構えがあったのではなからうか。

去年の十月一日からかぞえてちょうど三カ月、篤胤は江戸の学者仲間のあいだでスキャンダルの的になった。みずから意識して招いたスキャンダルだから、それ自体に不満はない、「手応えあり！」の実感はずぶりのはずだ。

「新しい年もこの調子で行きますよ、寅吉の言動を広い世間に知ら

せ、幽界が確実に存在することを教えてあげたいのです」

目的はただひとつ、

「われわれ日本人の魂の行く先、それは幽界です。幽界はかならず存在するのだから安心して暮らしてください」

それをいうだけ。

新年の参拝を手近の湯島天神で済ませてしまおうと、

——平田篤胤は、こそこそ隠れているらしいぞ。

そんな印象をあたえかねない。隠れるつもりなんか毛頭ないので、すよといたいたためにも、わざわざ遠い深川まで足をのばしたのではないか。

深川八幡からもどつてくると、こんどは狂言のお稽古になった。

篤胤の養子の銚胤(まきむね)の『氣吹舎日記』には「今年、狂言お稽

古あり」と書いてあるから、文政四年の正月二日が最初の稽古だったのだ。篤胤のほか、広井雄右衛門、広井時次郎、竹内健男のほかに寅吉もいっしょになって、

「ヤイヤイ太郎冠者、あるかやい」

「ハア」

「おるか、おるか」

「ハア」

「お前に」

「念無う早かった」

威勢よくやりはじめた。

正月だから、知り合いの狂言師に来てもらって目出度い一幕を演じてもらい、それから酒宴というのはめずらしくなかったが、氣吹舎の狂言は師弟ともどもに稽古して、いずれは客を呼んで演じてやるうという壮大な計画のはじまりなのだ。

優雅な贅沢、そういつていい。

狂言と七詔舞

平田篤胤が主宰する江戸は湯島天神男坂下の国学塾、氣吹舎では

文政四年（一八二一）正月二日から師弟そろって狂言をならいはいじめた。

能の幽玄、狂言の諧謔という対比が現代の常識だといってよく、文政のころも、たぶん同じだったろう。幕府の式典、諸大名や旗本の世界ではもっぱら能が鑑賞され、その合間の息抜きに狂言が演じられるという興行の形態も、この対比を根づかせたはずだ。

狂言は諧謔であるとして、その狂言を平田篤胤の塾で狂言をならいはじめたとなると、なにやら似つかわしくない感じがするのはどういうわけなのか？ おそらくは平田篤胤——国学——純日本的なもの——神道——神楽の連想からくる意外感なのだろう。

もちろん「狂言——諧謔」と限定するところに問題はある。幽玄のなかに可逆を包摂するのは不可能だが、諧謔は幽玄も悲劇も何も彼も包みこむのが可能だという見方に立てば、狂言こそ感情表現のオールマイティーの手段なのだといえる。

気吹舎と狂言との組み合わせの当否は篤胤にはかわりのないこと、篤胤が狂言をやりたいと思っただけからはじめた、それだけのことだ。それなら、篤胤はなぜこの時期に狂言をはじめたのか、これは問題にする意味があるはずだ。

寅吉の出現と関係があるにちがいない。

篤胤の『仙境異聞』のなかに、しばしば「七韶舞」という言葉が出てくる。とつぜん岩間山へもどると言い出した寅吉を引き留めようと、篤胤は大切にしていた天の磐笛を吹かせてやつたり、竹を買ってきて笛をつくる計画をもちかけたことがあった。笛の話が出る
と寅吉はたちまち元気になり、笛の話はいつのまにか七韶舞の話に移っている、そういうことが何回もあった。

寅吉と問答をくりかえしているうちに篤胤は、寅吉の幽界体験のなかで七韶舞が重い意味をもっているのに気づいたようだ。大坂出身の門人の松村完平に七韶舞のことがらを記述させ、篤胤みずから検分したものが『仙境異聞・付録』と題されている。『仙境異聞・付録』によって、寅吉が強く執着していた七韶舞とは何か、おおよ

っぱなイメージをつかんでおこう。

「山でおこなう七韶舞の音楽の響きに樹木の霊がこたえ、鳥や獣が寄ってきて耳をかたむける」

寅吉のいう七韶舞とはどのようなものか、おぼろげながらわかったのは、気吹舎で寅吉にむかって発せられたひとつの質問がきっかけだった。

沖合に船をとめていた夜、一町（約百メートル）ばかり離れて碇泊していた船から琴や笛、鉦や箏の合奏が聞こえた。翌朝、「昨夜の音楽を楽しませてもらいましたよ」と声をかけたところ、「こちらこそ、そちらで音楽をなさっていたと思い、聞き惚れていました」との返事。

どちらの船にも奏楽の腕前をもつ者は乗っていないとわかり、ますます奇異な思いをして別れたことがある——あのような音楽を天狗囃子というのでしょうか？

「それはたぶん七韶舞とか御柱の舞ともいうものの奏楽でしょう。山ではしばしば聴いたことがあります」

それから寅吉の説明がはじまった。

短い笛を五管、一丈の長さの笛と九尺の笛を一本ずつ、リンの琴を一挺、カリヨウの笛を五管、浮き鉦を二個——以上の六種の楽器をつかい、五十音（ア・イ・ウ・エ・オ）それぞれの声を長く引くようにして唱える、これが七韶舞の楽の部。リンの琴やカリヨウの笛の作り方が文章で説明してあるのだが、これは省略しよう。出羽から来ている須賀というひとがカリヨウの笛を試作したと書いてあるから、細工の職人でなければ作れないというものではないようだ。衣装は楽人も舞人も同じ、上着は緑色の地に雲の模様、うしろは長く引く。下には白い着物、さらにその下にはババガフトコロ（婆が懐——蔓草の一種）で編んだ着物、藪地の袴。冠をつけ、藤の蔓でつくった沓をひっかけるように穿く。

「舞うのは何人ですか？」

「五十音に合わせて舞うのだから五十人」

舞人は五十音に合わせて五十人、楽人二十四人を合わせると七十
四人が一堂に会して楽を奏し、舞う、大仕掛けなもの。

山でも海でも、広場の中央に檜か杉の一尺幅（約三十センチ）に
削ったのを目の高さに立てて、四面に東西南北を書いておく。柱の
上から一尺ばかり下のあたりに麻紐をむすんで数枚の木札をさげて
おく、これが御柱で七韶舞の中心になる。

浮き鉦の一打を合図に舞いがはじまる。

笛吹きが「アー」の音を吹くのに合わせて第一番の舞人が甲の音
で「アー」と発声し、柱の東西の舞人が左の手足を踏みだす。つぎ
に笛の「イー」の音に合わせて第二の舞人が乙音で「イー」と発声、
舞人は右の手足を踏みだしてつづく。甲の音は高い調子、乙の音は
低い調子の音の区別で、一声ごとに甲と乙とをくりかえす。

五十音のそれぞれの笛に合わせて発声するのはひとりの舞人だが、
心のなかでは全員が五十音を発声しながら柱を廻るから、舞いの順
序が狂うことはない——この点は寅吉が特に強調して説明した。

ひととおりの説明が終わって、また質疑応答にもどる。

「七韶舞は山人たちの楽しみのため、とばかりに思っていたが、そ
うではなさそうだ。おごそかで、つつしみぶかい雰囲気のように感
じました。なにごとかを敬って舞うものようだが、敬う対象は何
でしょう？」

「天神地祇を楽しませるのが目的なんだ。山で七韶舞をすると天神
はよろこび、妖魔は忌み嫌う。しかしその妖魔さえも邪心を捨てて
善心にたちかえるといわれている。じっさい、これは楽しいものだ。
奏楽のひびきに樹霊がこたえ、鳥や獣さえ近寄ってくるんだからね」

「七韶舞を海でやるのは、ちょっと理解しがたいが……理由は？」
「海神に手向けるといふ話を聞いたことがあるから、たぶん豊漁を
祈るんだらう」

「海でやるとき、どこに、どうやって御柱を立てるのかな？」

「海の水の上にも立てるし、宙にも立てる。碇泊している船の帆柱

に立てることもあるのさ。この世のことだけから推し量っても、わからないものだ」

「この世の人間であるわたくしどもが貴方（寅吉）に習って七韶舞を舞うと、山人の怒りに触れることにはならないだろうか？」

「おれの師匠は穩和なひとだ。人間のため、世のためになるのだから、質問にたいしては知っていることをすべて教えてやれ、そうおっしゃったよ」

「舞人が五十人、楽人が二十四人とは多人数だが、それはすべて杉山山人の分身なのか、それとも杉山山人が他の山によびかけて集めるのか？」

「楽人も舞人も師匠の分身ではない。どのように呼びかけるのか、それは知らないが、あっちこっちの山から楽器や装束を持ってあつまってくるんだ」

土佐から谷丹作が駆けつけてきて、催馬楽の秘曲について語った文政四年の八月の末、湯島天神下の気吹舎は土佐の谷丹作を客にむかえた。

「寅吉さんの師匠さんは常陸の岩間山にお住まいだと聞いたものですから……！」

席についてもまだ荒い息づかいがおさまらない。

「さようです。常陸の岩間山に……」

谷丹作は、いまは亡き父につながる催馬楽（まばら）の秘曲について意外な思い出を語った。

丹作の父は好井といい、催馬楽の秘曲の「我駒」「伊勢海」「田中井戸」「席田」などを知っていて、息子にも他人にもしばしば語っていたものだ。

谷好井は若いときに京都の北の鞍馬山で米叟上人に出合い、催馬楽の秘曲をまなんだ。そのとき好井には不審も思うことがあったので、たずねた。

「催馬楽の秘曲はもともとは宮廷の秘事ではありますまいか。わた

くしのような者が習ったのを知ると、催馬楽を家の職にしている高貴の方々から叱られるようなことになっては……」

米叟上人は「気にすることはないのだ」といって、つぎのように説明した。

「咎める者があれば『鞍馬山の米叟に教えてもらった』といえばよい。わたくしに問う者があれば、わたくしは『常陸の岩間山で山人に出会ったときに教授してもらった』と答えるつもりだ」

常陸の国の岩間山には仙人が住んでいて、上代の音楽をつたえている——これが丹作の父の遺言になった。

不思議なことがあるものだ、ぐらいに丹作は思っていたが、江戸に不思議な少年があらわれ、常陸の岩間山の体験を話しているとの噂を耳にしては矢も楯もたまらず、土佐から江戸の湯島に走ってきた。

「寅吉さんにおたずねしたいのです、岩間山はどこなところなのか、仙人が住んでいて、催馬楽をつたえているのか、どうかと……」

篤胤はまず、自分が知るかぎりの岩間山の様子について話して聞かせ、それから寅吉を呼んだ。

「サイバラという楽を知っているかな、話に聞いたことはないかね？」

「サイバラ……聞いたことはないな」

それではと、視線をむけた篤胤にうながされ、谷丹作は催馬楽の「我駒」や「席田」の詞に曲をつけて歌った。

いで 我が駒 はやく行きこそ真土山(まことぢま)

待つらむ妹を 行きて早見む

「ああ、これなら知っているよ、岩間山で聴いたことがあるよ」

寅吉がなにげないふうで言うのを、丹作は小躍りせんばかりの顔で聞き入り、

「米叟上人さまも、我が父も、本当のことを語っていたのですな！」
感激して帰っていった。

上代の民謡（風俗歌）や流行の歌を雅楽のメロディーによって歌

う、それを催馬楽と呼んだそうだ。

唐楽が伝来して宮廷の正式の奏楽形式の座をしめるにつれ、日本古来の楽は圧倒されて姿を消しつつあった。しかし完全に姿を消したわけではなく、唐楽のメロディーと結合することで生きのびたのだらう。催馬楽の「馬」は、歌詞の多くが労働歌だったのをしめしているようだ。

（催馬楽の歴史的な意味については岩波書店版『日本古典文学大辞典』所収の項目「催馬楽」に依った。この項目の執筆者は白田甚五郎氏）

日本古来のものがすべて正しく、外来のものはすべて誤っているという偏狭は平田篤胤とは無縁の姿勢だ。

しかし篤胤は、日本人の心の安定のためには日本人の死後の魂が幽界に行くことを実証しなければならぬと考えている。そのかぎりでは、外来のものの影響を取りはずして上代日本のありのままの姿を確認することを自分の使命にしていた。

土佐の谷丹作がやってくるまで、催馬楽について篤胤がどれほどのことを知っていたのかはわからない。ともかくも谷の来訪と、寅吉との質疑応答によって、篤胤は上代日本の色彩と音が催馬楽に濃厚にながれているのを確認した。

催馬楽が演奏されている岩間山はまちがいなく幽界なのだ。ならば、その岩間山からこの世にあらわれている寅吉はまぎれもない幽界からの使者なのである。

8章「山人は神の業をおこなう」

天狗小僧寅吉の意外な一面

『七韶舞の記』の記述者の松村完平は文政三年（一八二〇）十一月、平田篤胤の気吹舎に入門するつもりで大阪から湯島天神男坂下にやってきた。（かれは「しちしょうまい」の「しょう」の字がわからないとして、とりあえず「生」の字をあてた。『平田篤胤全集』にも『七生舞の記』のタイトルで収録されている）

『七韶舞の記』には七韶舞のほかにも、松村完平が気吹舎ではじめて見聞いた寅吉と師弟一同の質疑応答の様子が書かれている。篤胤の『仙境異聞』とは一味ちがった、あえていうと率直な見聞記だといえる。

松村完平は寅吉のことを知らずに大阪からやってきた。はじめて寅吉を知り、質疑応答の席に参加させてもらったのは十一月の十日だった。

この夜の質疑応答はもっぱら呪禁（まじない）や祈祷に集中したのだが、寅吉の説明は一座の者に意外の感じを抱かせた。松村完平も意外に思ったひとりだ。

松村は知らないことだったが、この夜の質疑応答の意外な展開には伏線があった。あちこちから祈祷の依頼があるのに、寅吉は気乗りがしないようだった。それを篤胤が戒めるところからこの夜の質疑応答がはじまる。

「世のため、ひとのためになることで自分に出来ることがあるなら、ちからを尽くさなければならぬ。岩間山の杉山山人も、そのように教えたはずだ。ところがおまえはウンウンというだけで、そのあとは遊んでしまったり、食べ物をもらえば祈らないでもないといった様子をしたり、強いて頼まれると『明日やるよ』と逃げてしまう。いったい、どういうつもりなんだ？」

「世間のひとは呪禁や加持祈祷に熱心だが、おれは、どうもね、あんまり気がすまないのさ」

軽い衝撃の雰囲気ながれた。

「そりゃ、また、どういうわけ……？」

寅吉はぐいっと膝をすすめて——そのように松村完平には見えただのだ——はつきりした口調でいった。

「呪禁や加持祈祷に効き目が無いとは思わないけれど、世間でやっているのはほとんど両部の法で、正しいのはすくないんだ。だからおれは気がすまない。頼まれるから祈祷してあげるんだが、自分では正しいと思わないから、どうしても遊ぶほうに行ってしまうんだ」

加持祈祷や呪禁を頭から否定しているわけではないが、世間で加持祈祷と思われるもののほとんどは「両部の法」だから嫌なんだというのが寅吉が身を入れる気にならない第一の理由だった。

密教の金剛界と胎藏界のふたつの曼陀羅によって日本の神々を説明する神道説を「両部神道」という。ふたつの曼陀羅に依拠するから「両部の法」だ。

しかし、ここで寅吉が「両部の法」といつているのは神仏習合の立場に立つ神道説のことだろう。純粹の神道ではなくて仏教の影響を強く受けた神道説にもとづく加持祈祷だから、本気でやる気にならないのだと寅吉は説明した。

「病気には加持祈祷よりは医者と薬——これが寅吉の見解

寅吉は加持祈祷に熱心になれない。熱心になれない理由は、期待される加持祈祷が「両部の法」であるからだ。

だが、それだけではない。たとえ由緒ただしい加持祈祷を依頼されても、やはり寅吉は熱心にはなれない。

「病気になったらすぐに加持祈祷や呪禁を頼むのはよくないと、おれは思うんだ。まずは薬、それから、薬が効きますようにと神さまに祈る、これが順序というものだよ」

篤胤も門人たちも、門人になったばかりの松村完平も、寅吉は修験道を修行しているものと思いきこんでいる。まだ未熟だから幽界の

本物の山人にはなっていないが、修験の修行によって幽界とこの世のあいだを往復する能力を持っているのはまちがいない。幽界体験者ではあるが未熟だから天狗小僧なのだと思っている。

その寅吉が「病気にはまず薬、加持祈祷や呪いは薬の後」というのだから、ますます意外だ。

「祈祷を頼むひとの信心が強く、祈祷するひとの術がよければ効くこともあるけれど、ほとんどは妖魔のいたずらなのさ。たとえば……」

寅吉が「たとえば」といったものだから、今度は一同がぐいっと膝を乗りだす。

「たとえば、胸焼けがして苦しくてたまらないひとに祈祷したことがある。おれが祈祷したんだよ。ムニヤムニヤと、いたずらの祈祷の真似をしながら胸に龍吐水(りゅうとすい)の絵を書いてやったら、たちまち治まった。まあ、祈祷が効くといつても、こんなものなんだ」

龍吐水とは人力で放水する江戸時代の消防ポンプのこと。龍吐水に妖魔が乗り馮って胸焼けが治まったのだ、おれの祈祷が効いたのではないと寅吉はいいたかったらしい。

寅吉がこういったとき、「ひとびとは案の外に思ってた感心した」と松村は感想をのべている。寅吉の言葉は意外ではあったが、むしろいつそう寅吉にたいする関心をかきたてる結果になったようだ。

「そもそも天狗を信心するのも良いことじゃないよ」と寅吉は言う。

加持祈祷の意味や効き目を、どのようにかんがえるのか——この問題について寅吉と篤胤や門人一同のあいだには越えられない認識の溝があった。

胸焼けがしているひとの胸に龍吐水の絵を書いてムニヤムニヤと呪文を唱えたら、たちまち胸焼けが治まった——それなら立派な加持祈祷ではないかというのが篤胤や門人一同の立場。

寅吉はそうではない。

妖魔のちからを借りず、祈祷者の祈祷のちからだけで効果をあげるのが本当の加持祈祷だ、そういう能力を身につけた祈祷者でありたいと寅吉は願望している。純粹という言葉をつかうなら、寅吉はより純粹な祈祷をイメージしている。

そのつぎに寅吉が言った言葉は十一月十日の夜のハイライトになった。

「こういつては悪いけれど、天狗を信じるのも良いことじゃないんだ」

寅吉は調子に乗っている、乗り過ぎているというのが適切であるかもしれない。だがこれは、寅吉と篤胤、門人一同とのあいだに信頼の関係ができているからこそ、なのだ。「こう言つては悪いけれど」のなかには「おれのことを天狗として大切にしてくれるみなさんだからこそ、いうんだよ」と、信頼を念押ししている気分がある。

では、天狗を信じるのが、なぜ悪いのか？——以下、寅吉の説明。十一月十日の夜の質疑応答は参加者それぞれがつぎつぎと質問の矢をはなち、寅吉がそれに応じるかたちで進行した。松村完平の『七韶舞の記』は寅吉が一気呵成にしゃべったように記録してあるが、現場はそうではなかったわけだから、箇条書きで紹介すれば幾分でもあの夜の雰囲気にかかづいてもらえるだろう。

「先生は、おれ（寅吉）に加持祈祷の術を教えてもらわないといっている。これは正しい姿勢だ」

「先生が加持祈祷を習わない理由はこうだ——火は熱いのがよろしい、水は冷たいのがよろしい、それが人間の道だから。加持祈祷は熱い火を熱く感じさせない、冷たい水を冷たく感じさせない、だからよろしくないと。これは正しい」

「たしかに幽界では加持祈祷をやるが、これはまあ、しきたりややつているだけだ」

「加持祈祷など、いろいろと不思議のことをやるのが天狗だと思つて人間は天狗を信じるのだが、そもそも幽界の天狗はじつは山人であり、仙人の仲間なのだ。天狗を信じるつもりで山人を信じるのは

誤った理屈だね」

「それなら山人は何をするのかというと、善いことを一生懸命に修行して天下太平、万民繁栄を祈る。だから神道が本だが、世間との関係は無視できないから仏教を捨てない」

「しかしね、仏教は後世の人間がつくったものだから魔道であることに変わりはないね。仏教では口をひらけば『地獄極楽』だけど、そんなものはありやしないんだ」

「極楽はないんだ、それははっきりしているよ。極楽は十万億土にあるというからには、つまり地続きだろう。ところがね、おれは師匠につれられて空から下を見たけれども、大地はクルリとまーるいもので、ひとまわりしても十万億土なんてあるものか。師もいつているよ、地獄極楽はないんだ、とね」

人間は幽界には天狗がいると思っっている。仕方がないから思わせしておくのだが、天狗だからムニヤムニヤと祈祷や魔術ばかりやっているんだと思いきや、たまには「ちがうんだよ！」と叫ぶこともある——これが幽界の輿論なのだ。

人間が勝手につくっている「天狗イメージ」は仏教の色彩に濃厚に染められている。これもまた「ちがうんだよ！」と寅吉が叫ぶことになる大きな理由だ。

『七韶舞の記』の最後は、寅吉が仏教否定の鉄槌をくだした大演説の紹介で終わっている。

「男女の道を禁じたのが仏教のいちばん悪いところだ。鳥や獣、虫や魚でも雄牝の道をおこなっているのに、人間には禁じた、こんな非道はゆるせない。この世に仏法が盛んになれば人間が少なくなってしまうのではないか。これは、人間を増やそうとなさる神の心に背くことなのだ」

すぐに質問の手があがった。

「それなら、岩間山の十三天狗は男女の交わりをしないのは、どういうわけなのか？」

寅吉は答えた。

「この世から見れば山人や天狗はうらやましい暮らしをしているように思うだろうが、なかなか、そうではない。山人には日々の苦勞があるし、天狗にも苦しみがあつて、人間はなんと安楽な暮らしをしているのかと羨望しているよ。たしかに岩間山の十三天狗は女を抱かないが、長生きをするには女と接しないのがいいとわかっているからなんだ」

寅吉の答えは、それは山人の気儘ではないかと不審を起こさせる。自分たちの長生きのために男女の道を断つのは人間の減少に手を貸す結果になるではないか、と。

こんなに簡単なことが、どうしてわかんないのかなア、といった表情で寅吉は答えるはずだ。

「だからね、山人は来る日も来る日も神前で鈴を振つて、人間の数がふえますようにと神さまに祈っているんじゃないか！」

山人や天狗は人間繁栄を祈つて神前で鈴を振りつづけなければならぬ、だから長生きしなければならず、したがって女を抱くわけにはいかない、これが幽界の現実だ。

質問が出なかったのか、寅吉が答えなかったのか、山人や天狗が人間のように自己増殖しない現実については『仙境異聞』にも『七韶舞の記』にも記述がない。

寅吉は信州の浅間山や紀州まで足をのばした

気吹舎の師弟そろつて狂言の稽古をはじめた第一の目的は、多人数があつまつて何事かをやる集団行動の神髓に触れたからだろう。そして、これが岩間山の幽界の重要行事の七韶舞に影響されてはじまったのだと推測されることは、すでに書いた。

狂言稽古には別の面もあつたと思われる。それは寅吉に「この世」の文化のしきたりを身につけさせ、どこへ行つても恥ずかしくない教養人にそだてることだ。

幕府の老中職をつとめる阿部備中守や大久保加賀守から使者が派遣され、寅吉に質問した。これもすでに書いたが、篤胤は寅吉の前

途によこたわる壁のようなものを痛感したにちがいない。

——幽界から来た天狗というだけの、いわば珍しさだけでは長持ちしない。この世でも通用する常識人でもありませんというところを身につけなければ、いつかは飽きられてしまうだろう。

そこで狂言を習わせることにした。プロの狂言師になるわけではないから、高いレベルは望まない。レベルの高さよりも、この世の狂言から幽界の七韶舞に話題が移行するのをリードできさえすればいいわけだ。それにはむしろレベルは低いほうがいい。

狂言を稽古するようになった文政四年の正月から、寅吉をまねいて話を聞きたい家が多くなり、家格も高くなったのは篤胤の狙いがあたったといっている。

気候がよくなった四月には寅吉と篤胤は上州と信濃の国境の浅間山まで足をのばした。江戸の町人の門人の伊勢屋安右衛門と佃屋伝次郎がつきそい、往復十二日にわたる師弟四人の浅間行きは浅間の幽界——幽界そのものではなく幽界の入口——の雰囲気を実地に体験しようとしたものだろう。

浅間からもどつてまもなく、信州松代藩主の真田幸専(まきたか)の家老が使者にきて、江戸屋敷の「御祭」を依頼した。屋敷の普請が家族の病気かなにかの加持祈祷だろう。加持祈祷には熱心ではない寅吉だが、頼まれれば嫌とはいわない暗黙の了解が師弟のあいだにできあがっている。

夏になると、寅吉は遠く紀州の和歌山まで足をのばした。紀州藩士の石井伝右衛門が篤胤の門人になっていて、寅吉に興味をもち、郷里への手紙のなかに寅吉のことを触れていたのだろう。江戸詰めが任務が終わって和歌山にもどるとき、寅吉の身柄を貸していたきたいと願ったのが許され、いっしょに行くことになった。

篤胤に不安がなかったはずはないが、不安をこらえて寅吉の和歌山行きを許したのは鈴屋一門の主流にたいする挑戦の気分が不安に勝ったのではなかったか。

鈴屋一門(本居宣長の門人グループ)は伊勢の松坂に本拠をおい

ている。松坂は紀州徳川家の領地であり、かつて宣長は紀州家から扶持をうけていた。

平田篤胤も鈴屋一門に所属しているが、宣長没後の門人として名乗りをあげたときの事情からして何かと規格はずれの言動が多く、鈴屋一門のトラブルメーカーだった。

宣長と篤胤の学説は日本人の魂の行方について、つまり幽界と顕国との関係の認識において決定的に対立している。

篤胤としては師の説を発展的に批判継承している気分になっているから、鈴屋一門の批判を柳に風とうけながしている。しかし、篤胤本人は鈴屋一門からの批判を柳に風とうけながしているつもりでも、世間はそうは見ないかもしれない。批判に応えるものがないから口をつぐんでいる、そう見られかねない。そういうわけで、寅吉を和歌山に送ったのは篤胤の挑戦ではなかったかと考えられる。

篤胤よりは門人の石井伝右衛門のほうに寅吉を同道して和歌山に帰らねばならない事情があったのかな、との推測もなりたつ。

紀州藩士が国学をやるとなれば一にも二にも本居宣長だ。その宣長の鈴屋一門の主流を向こうにまわして平田篤胤に心酔していると、何かと不利な立場に追いこまれる。このへんで挽回しなければという目論見があつて寅吉を連れて和歌山に凱旋する、そういう企画だったのかもしれない。

七月十六日から十月二十二日までの和歌山滞在で寅吉が何をいい何をやったのか、くわしい様子はわからない。石井伝右衛門から江戸の篤胤に報告があり、そのことを武蔵の越谷の山崎篤利（後妻の織瀬の親元）にあてて知らせた手紙には「和歌山の寅吉は評判がよろしいようだ」と書いてあるから、まずまずのスケジケールをこなしていたようだ。

「このことは他言無用にねがいます」

湯島天神男坂下の気吹舎にはさまざまの立場のひとが、さまざまの目論見のもとに押しかけてくる。

もつともユニークな客は鉄砲師の国友藤兵衛能当だった。能当は篤胤の門人として名をつらねているが、入門の年度が文政三年になつているところから判断すると、寅吉から幽界の鉄砲技術の実情を聞き出したための入門だったようにも考えられる。ちょうどこのころ、能当は風砲を発明したばかり、そこへ、幽界でも風砲をつくっていると聞いては気吹舎に接近せずにはいられなかったはずだ。

文政四年（一八二一）三月二日づけ、篤胤から国友能当にあてた手紙がのこっている。流行りの風邪を引いていませんかと能当の健康を気づかい、贈られた宮重（みやしげ）大根の礼をのべたあとに鉄砲の話が出てくる。

能当は気吹舎に鉄砲をもちこんでいて、篤胤の手紙はまず鉄砲を確かに受けとつたことの確認をしている。能当が鉄砲をもちこんだときに篤胤は留守だったのだろう。

この鉄砲が風砲であるかどうか、手紙の文面だけでは判断できないが、そのつぎに「仕廻台のことをどうかよろしく願います」と書いてあるのは鉄砲を据えつける台座のことかと思われ、となるとこれは手持ちの銃や砲ではなくて風砲ではなかるうか。

「台座に風砲を据えつけて試射するところを寅吉に見せてやりたいが、いかがかな？」

「よろしゅうございます」

こういう具合に交渉がすすんでゆくはずだ。

この手紙には「仙砲の図、五枚」が添えられていた。能当から篤胤に「仙砲の図、五枚」が貸し出されていたのを、本日お返ししますからお受け取りくださいということだ。

仙砲とは「幽界の風砲」の意味だろう。寅吉が幽界の風砲の仕掛けや操作の方法を説明して聞かせたのを、能当が得意の腕をふるって設計図に書きあげた。

一枚ではなく五枚も書いたところに能当の技術者としての風貌がしのばれる。寅吉の説明は風砲の外観描写にとどまるものだったにちがいないから、能当には納得がいかない。自分で自分を納得させ

るためにも、外觀・砲身・風圧装置・発射機能といった部類にわけた図面で描写してみせたのだろう。

このころ篤胤は寅吉の師の杉山組正の肖像画を描いていた。寅吉が杉山組正の風貌を言葉で描写するのを篤胤が絵筆によって肖像に仕上げるわけだから、能当と篤胤は寅吉にたいして共通の立場にいる。杉山組正の肖像画ができあがったら一日もはやくご覧に入れたいと能当あての手紙で書いたのは「われわれふたりは共通の立場にいるのですね」と確認する意味があつたようだ。

幽界の風砲の設計図はできあがつた、国友能当が発明したこの世の風砲の実物は気吹舎にもちこまれ、おっつけ台座もとどく予定になつている、寅吉の師の山人、杉山組正の肖像画ができあがる日も間近い——これはつまり湯島天神男坂下の気吹舎が幽界の江戸出張所の体裁をととのえつつある現況を物語っている。

だが、寅吉自身のこととはともかく、風砲と寅吉との関係についてはしばらく世間に秘密にしておかねばならない。

「まことに寅吉は未曾有の奇童であり、いまさらながら興味は尽きぬところです。しかしながら、このこと、他へはお漏らしにならぬよう願います」

この手紙の追伸がまことに意味深長だ。三月二日づけの手紙にはやくも紀州の石井伝左衛門の名が登場しているのだから。

「追伸——先日、紀州の石井伝左衛門ともうす御仁がやってきたので、仙砲の件を推薦しておきました。いずれ貴家へ連絡のうえ、早速に調達したいと申しこむにちがいないと思われませんが、どうなつておりますか？」

あなたの風砲を紀州藩に売り込んでおきました。紀州藩からは国友の風砲を装備したい」と注文してくるにちがいありません——篤胤は確信している。

石井伝左衛門はまったく偶然に気吹舎をおとすれ、そこではじめて国友能当の風砲のことを聞いたように読めるが、そんなことはない、石井はもともと篤胤の門人なのだ。能当の風砲をどこか然るべ

き家に売り込んでやるう——紀州家がよかろう——それなら石井伝左衛門を呼べ、こういうふうには事ははこんだはずだ。

石井伝左衛門が寅吉を伴って和歌山へ帰国したのは、篤胤が能当に手紙を書いて知らせてから半年あとのことだった。風砲調達を元の政府に決定させるために石井が帰国したのだと推測するのは即断にすぎる。

しかし、国友能当はともかくとして、篤胤が本気になって風砲売り込みを計画し、最初の狙いを紀州家としたと見るのはまちがってはいないだろう。

平田篤胤は鉄砲商人になったのか？

そうではない。

国友鉄砲の伝統の技術と幽界の仙砲の秘術とをかさねて完成目前の最新かつ最強力の風砲は、ほかならぬ気吹舎でなければとりあつかっていない——そういう触れ込みで紀州徳川家につながりができる、それだけが目的なのだ。「五〇六十挺まとめて独占購入する、さっそく製作にかかっていたらこう」などという事態になったら、あわてるのは篤胤のほうなのだ。

国友能当の質問のほとんどすべては「これは頼まれて質問するのだが……」と断りがついていた

国友能当は寅吉にたいして、あれこれと質問する。『仙境異聞』にすべての質問が記録してあるわけではないだろうが、能当の質問というのが、たいていは「これは、さるひとから頼まれて質問するわけだが」と前置きがついているのが面白い。

たとえば、雷の前兆を知る超人的な能力について、能当の質問。

「さるひとに頼まれて質問します。そのひとは雷を異常に恐れ、ゴロゴロと鳴りだすまえから兆しを感じて頭痛や目眩(めまい)をおこし、ひどいときには気絶してしまうのだが、雷を恐れない方法はないものか？」

「あるよ」

「ええーっ、ありますか。どんな方法ですか？」

「高い山にのぼる、高ければ高いほどいい。高い山のうえに穴を掘って、穴のなかで一晩すごし、穴の底の赤土をひとつかみほど採って古木の根といっしょに紙につつんで貯えておく、古木は何でもかまわない。ゴロゴロと鳴ってきたら、この紙包みを臍のうえに当てて心をしずかにしていれば恐れることはないといわれている」

「なるほど」

「雷にかぎらず、高所恐怖のひとが高いところへのぼるとき、馬・籠・舟に乗るときにもこの包みを臍に当てていけば目眩しない」

「これも頼まれて質問するのですが、子にめぐまれない女が懐妊する方法はないでしょうか？」

「神社か河原で綺麗な小石をひとつ拾い、毎日朝日にむかって小石を額のところにかかけ、どうか子を授けたまえと天道さまに祈れば懐妊する。子にめぐまれたあとは小石をその子の生涯のお守りにすれば無事に成長するといわれている」

「これもまた他人に頼まれての質問なのですが、祈願をかけるときに仏教のお経を読んでいいものでしょうか、それとも、お経のほかの然るべき呪文をとなえるのがよろしいのでしょうか？」

「在家のひとが僧や山伏を真似てお経や祝詞を読んでも効果はない、などというひとがいますが、そんなことはないんだよ。祈願の筋を正直に、何度もくりかえして言っていれば感応が出てくる。お経でも祝詞でも、ムニヤムニヤの呪文でもよろしい、祈願の心さえ神さまにとどけば感応はあるものさ」

国友能当は当代きつての科学者だ。合理という概念は知らなかったはずだが、合理によって鉄砲をつくって信用され、幕府でもそれなりの地位についていた。その能当が、たとえ「他人に頼まれたのですが」と前置きしたとはいえ、不妊女性の懐妊の法をたずねるとは滑稽にすぎる印象はいなめない。

しかし、これはいかにも国友鉄砲師の総帥だというに足る質問もしているのだ。ただしそれさえも「頼まれた質問ですが」と前置き

しているのがかえって腑におちないところなのだ。

「幽界にはいろいろの武器や軍事の技術があるようです。あなたの師の杉山山人も軍備の知識と経験が豊富なはず。そこで、日本の海辺に『杉山山人の宮』といった攘夷祈願の設備をつくって異国襲来にそなえれば効果は甚大ではないかと……いや、これはわたくしの意見ではなくて、このように質問してくれと頼まれたわけで……」

日本の防衛政策にかかわることがらだから、あえて「頼まれた」と断って責任をのがれる口実にしていたのだろうか。

幽界の軍備の知識のレベルはなかなか高度のものらしい。それから幽界の山人勢力を総結集すれば日本の防衛の効果は観面(くわんめん)にあがるはずだとの提案だ。

寅吉の答えはつぎのようなものであった。「人間が祈ろうと祈るまいと、幽界はこの世を守護する決意をかためている。外国の侵略にそなえ、武器や武術、戦術までいろいろと考究している。しかし、おれの師匠はいままで、この世に名を知らせたこともなく、おれが山を降りるときにも、『このひとこそと信用できるひとでなければ我が名も居所も知らせてはならんぞ』と厳命したくらいだから、政治にかかわる祈りのことをいうわけにはいかないんだ」

幽界はかならず日本を守る用意をしているのだから、幽界を信じてもらうほかにはない——それが寅吉の説明の主旨だ。

亡霊の現実性について

国友能当がスケールの大きい日本防衛について質問を発したのに伏線があった。

能当とは別のひとが「寅吉さん、あなたはあちこちの外国を旅行したそうだ。そこでお聞きしますが」と前置きし、「+」の形を手で宙に描いて、

「このような形の図か、磔の図、または女が赤ん坊を抱いている図を尊敬しているのを見たことはありませんかな？」

潜伏キリシタンの様子をさぐるうという仕掛けの質問だ。その筋

の者がスパイとして気吹舎にまぎれこんでいるのか、外国に行ったならキリシタンを見たのではないかという単純な好奇心からの質問なのか、ともかくもこれは危険な質問だ。

寅吉が自分ひとりの判断で危険を察知したのか、篤胤かだれかが智恵を貸してやったのか、そのあたりはわからないが、寅吉は最初の危険は切りぬけた。

「あれは、どこだったかなア。とつても寒いところだったのはたしかだ。立派な筒袖の着物を着るところで、そういう絵を本尊にして信心しているのを見た。おれの師匠は、そいつを見るたびにペツペツと唾を吐きなさるので、訳をたずねたら、『これがキリシタンの邪法だ。日本では厳禁されているから唾をかけるのだ』とおっしゃった。

つぎの質問は龍造寺氏一族の亡霊にからむ復讐譚だ。

龍造寺氏は肥前（佐賀県）一國を支配していた豪族だが、筑後や肥後に進出しようとして薩摩の島津氏や豊後の大友氏とあらそいになり、隆信のときに島津にやぶれた。

隆信の子の政家は病弱だったので親族の鍋島氏に政務を代行させていたが、政家の子の高房のときに鍋島氏にすべての領地と権力が鍋島氏に移った——というのは奇麗ごと、事實は鍋島が龍造寺を乗っ取ったのだ。

龍造寺一族の亡霊が江戸の愛宕山あたりを徘徊し、ある家に復讐しようとする苦悶、いまや多年の恨みを晴らすときになったと言っているのを僧が耳にした。それは大変と、僧はその家に向けこんで知らせてやったというストーリーだった。

龍造寺一族の亡霊が仇敵と狙う家といえはまず島津、でなければ鍋島だが、質問はそのことではなく、遠いむかしに滅亡した龍造寺氏なのに、亡霊としてこの世に生き返ってきて祟りをなすのは現実にあるのかということだった。

なまなましく、しかも、これ以上はない大きなスケールの質問だ。滅亡した個人や一族が亡霊になって生き返り、復讐をはたせるとい

うことになる、これは大変だ。徳川政権に復讐しようという生身の亡霊が無数にいるわけだから。

寅吉が答えるより先に篤胤が口をはさみ、「浜町に……」といいかけたのは、寅吉の答えの内容によっては湯島の気吹舎が反乱予備の容疑を懸けられかねないと懸念したからだろう。はっきりいえば篤胤は、寅吉が答えるのを邪魔しようとして「浜町に……」といいかけたのだ。篤胤が何をいおうとしたのか、わからないけれども、浜町に同じような亡霊がらみの事件があったがデタラメにすぎなかった、そのようなことをいってこの場をうやむやにしておもうと思っただのだ。

だが、篤胤の苦心の妨害工作も役には立たず、寅吉ははっきりとした口調で質問に答えた。

「幽界には、まるで生きてるように元気な亡霊がたくさんいるんだ。そんなこと、聞くまでもないよ。といて、おれは、これは誰々の亡霊という名は知らないんだけど、師匠によると日光東照宮の神はいまの將軍さまのご先祖で、いまま当時のままのお姿でいらっしゃるそうだね。將軍の先祖さまだけでなく、ヨシツネとかタメトモとか、そういう名前の亡霊も生きているんだ。もちろんこの世にはなく、幽界に、だけど」

山人は神と人間のあいだに立って神の業をおこなう

寅吉は危地に立たされた、と篤胤は肝を冷やしたらしいが、ともかくも危地を脱した。寅吉は最初の危地を脱しはしたが、その場の雰囲気は依然として危機をはらんでいる。「亡霊は生きているのか」の問答に触発されたひとが第二の矢を発したのだ。

あるひとが異人に誘拐されて東海道をくだっていた。ここで「異人」といつているのは寅吉と同じように幽界からこの世に出張しているひとで、誘拐されたひとの目にしか見えない存在を指しているらしい。

長崎奉行の任期を終えた肥田豊後守が御朱印のついた長持を先頭

に、晴れがましい行列をつくって進んでくる。先触れが「下におる！」と叫んでくるから、道端のひとは土下座して行列がすぎるのを待っている。

みんなは土下座したが、その異人は地面にピタ―ッとすわり、頭を地のなかに差し入れてしまえばかりにしたものだから、異人に誘拐されたひとは、もうビックリ。異人というものは一般の人間より敬服の心がすくないとばかり思いこんでいたから。

「あの長持に、どうしてそんなに深々と敬礼をするんですか？」

「將軍家の御朱印は御璽（天皇の印）同様に貴いもの、いくら敬礼しても足りないものだが、世のひとはその道理を知らない。おまえも、よくよく覚えておきなさい」

以上のストーリーをふまえて寅吉に質問が発せられた。

「幽界の教えというと、やはりこのようなものなのですか？」

そこで答えた寅吉の言葉は、これまた大演説というにふさわしいものだった。大演説をみじかくまとめ紹介すると、だいたいはつぎのような筋になる。

「山人は神と人間のあいだに立って神の業をおこなうものだから、天下を治めたまう君を大切に守護するのは当然」

「日光山には数万の天狗がいるうえに、ほかの山の山人や天狗たちも日光山をとりかこむようにして守護している」

「天下に変事の兆しがあれば山人や天狗は苦行をおこなう」

「山人も天狗も、それぞれの職掌に応じて天下の君を守護している」

「それから、こんなこともあったよ……」

寅吉が実例をあげて説明をはじめた。

あるとき、寅吉が「縄解き」の術を実演していた。両手を背中で逆に組んで縄で縛っておき、しかるべき古歌を唱えて古歌のちからで縄を解く術だ。

「だれか、おれの両手をギューツと強く縄で縛ってみろ。おれが古歌のちからで解いてみせるから」

そこへ男が出てきて、

「おれは天下の罪人を縛る役目をおおせつかつている身だ。おれが縛った縄を解くことなんか出来るはずがない」

じゃあ、縛ってみると縄で縛らせ、寅吉が古歌を歌って縄を解こうとしたが、どうしても解けなかった。

「なぜだと思うかね。それは、その男が『天下の罪人を縛る役目の身』だと名乗ったからだ。あとからわかったことだが、それは男のウソだった、役人でもなんでもありやしないんだが、おれは本当だと思ひこんだ。日ごろから『天下の君を敬服せよ』といわれているものだから、たとえウソでも『天下の』といわれると反抗できない。おれの心がそのように出来上がっているからだ」

自分の恥や失態を証拠にしての主張には説得力がある。寅吉の説明もまさにこれだったから、現実の政治にたいする幽界全体や山人や天狗の姿勢には反乱などの傾向は皆無なのだとその場の全体が納得した。

国友能当が、おそろおそろの姿勢のうちにも、まことに具体的な「杉山山人の言」の構想をもちだしたのは、危険はなさそうだと判断したからにちがいない。

(8 章・終)

9章「生まれ変わった勝五郎」

仁孝天皇と光格上皇の「お読みさし」の跡

四十八歳になったこの文政六年（一八二三）、平田篤胤は念願の上京を敢行した。

前の年の文政五年には十一人の入門があり、気吹舎の門人は通計二百五十七人になった。

せせらぎにひそめる籠の雲を起こし

天に知られむ時は来にけり

上京あたって篤胤はこの歌に決意と目的をあらわした。

儒学ならばいまや江戸が本場になっていえるが、国学ではやはり京都だ。京都へ行き、しかるべき伝（ついで）を介して皇室に名を記録してもらうのが「雲を起こし、天に知られる」第一歩となる。

京都のほかには伊勢神宮の参拝、伊勢松坂の鈴屋（すずや）と和歌山の本居大平をおとずれ、松坂らかくの山室山にある本居宣長の墓所に参るつもりだ。

平田篤胤の旅荷のなかには『勝五郎再生記聞』なる書物があった。上京したあと、この書物がまずは仁孝天皇に、つぎに光格天皇の御覽に供されたいきさつを、篤胤みずから記している。

「富小路卿のところは何度か伺ううち、『勝五郎再生記聞』が話題になった。読みたいとおっしゃるので持参すると、わたくしの目の前で一読なされ、『これほど面白いものは観覧に供しては如何であるうか、その方の名を申しあげるのに都合もよろしくなる』とおっしゃった」

それが八月十三日のこと、富小路貞直が翌日に『勝五郎再生記聞』を内裏に持参、仁孝天皇の観覧をたまわる手続きしたところ、「はなはだしく大御心にかない」、天皇から光格上皇へ推薦された。廷臣のあいだでは「このような珍事があるものじゃな、江戸の篤胤という学者が書いたそうだ」と噂にのぼった。

女官に「書写せよ」と勅旨がくだり、篤胤の自筆本は十月四日に

富小路へさげらされてきた。女官による写本が皇室の所蔵となったわけだ。

もどってきた写本には、あちこちに折り目がついていたが、それは「上皇さまお読みさしの跡であるぞ」といわれたので、篤胤は朱色の糸で目印をつけた。

「以上の次第である。この本を読む者はおろそかに扱わぬよう、心しなければならぬ。あな、かしこ」

発端——「お姉ちゃんは、どこから、生れてきたの？」

天皇から「面白かった」と褒賞の言葉がくだった『勝五郎再生記聞』は、江戸郊外の多摩郡中野村（八王子市柚木）に起きた奇妙な事件ををあつかったノン・フィクション・ストーリーだ。

中野村の百姓源蔵の息子で八歳になる勝五郎は、去年の秋ごろから、姉にむかって不思議な質問をするようになった。

「お姉ちゃんは、どこから、こちらへ生れてきたの？」

「どこからって、生れる前のことがわかるはず、ないじゃないか」

「フーン。それじゃあ、お姉ちゃんは生れる前のことは知らないんだね」

「そんならお前は、自分が生れる前のことを知ってるっていうのかい？」

「知ってるとも。ここの子に生れる前は、あの程久保（程久保）の久兵衛さんの子で、そのころの名は藤蔵だった」

「そりゃ大変。お父つつあんやお母さんにいわければ！」

ここで藤蔵は泣きだした。本当のことをいえば父母に叱られる、だから他言してはだめだと泣いて頼み、姉は承知した。ただし、これからは姉にいたずらをしないとこの条件に。

「あたしにいたずらするなら、いつちやうからね！」

姉のフサが弟に大きな貸しをつくったかっこの妥協が成立したわけだ。

だが、しかし、姉と弟が喧嘩せずにはすむはずはない。なにかある

とフサは勝五郎の出生の秘密をタネに喧嘩に勝とうとし、弟は約束がちがうとフサの不誠実をなじる。

両親も祖母もただの兄弟喧嘩としていたが、泣いて抗議する勝五郎の態度に真剣なものを感じずにはいられず、フサを問い詰めたところ、フサは白状、勝五郎みずから語る出生の不思議——再生譚が明るみに出た。

「おれは疱瘡にかかって死んだ」

八王子市の柚木から四キロばかり東に日野市の程久保がある。程久保は程窪と書いたこともあるようだが、この程久保村に久兵衛とシツの夫婦が住んでいて、文化二年（一八〇五）に男の子にめぐまれた。

夫婦は藤蔵と名づけて大切にそだてていたが、翌年、父の久兵衛は四十八歳の若さで死んでしまい、そのあとに半四郎という男が後夫になり、シツとふたりで藤蔵をそだて、藤蔵の父ちがいの弟と妹をふたりずつ産んだ。藤蔵は五人兄弟の長男としてそだてられたわけだ。

のちに勝五郎が語る不思議な話が信じられた理由のひとつに、勝五郎こと藤蔵が実父の旧名をおぼえていたことがある。久兵衛とは若いころの名で、藤蔵が生まれたころは藤五郎と改名していた。藤五郎の子だから藤蔵、これは自然の命名だ。

ところが勝五郎は姉のフサに出生の秘密をうちあけたとき、「程久保の久兵衛さんの子」といった。それが不思議な話に信憑性をあてたようだ。

さて、話をもどして、文化七年二月、数え年の六歳になった藤蔵は疱瘡(あせつ)にかかって死んでしまい、程久保の墓地に埋葬され、三沢村の禅宗医王寺が菩提寺になった。

ここに生まれる前の自分は程久保の久兵衛さんの子で、名前は藤蔵だった——爆弾宣言をしてからあと、勝五郎は祖母のツヤといっしょに寝させられた。「程久保へ行きたい、半四郎さんに会いたい」

と泣く勝五郎をなだめようと、祖母が「それならね、お前がどうして藤蔵さんから勝五郎に生まれ変わったのか、教えておくれ」と言う、勝五郎は理路整然と説明をはじめた。それが『勝五郎再生記 聞』の下敷きになっている。

「棺に入れられるときに飛びだした」

以下は藤蔵勝こと五郎みずから語る、死から生への転換の実況だ。

自分が痲瘡で死んだのは、勝五郎に生まれ変わってから知った。死ぬほどの病状ではなかったのだが、薬を飲せてもらえなかったから死んだのだ。

息が絶えてからは苦しみは感じなかった。棺のなかに押し込まれるときに飛びだし、白い覆いの桶の上に乗って山へ送られていった。桶が穴に落とされたときの、ドーンという音ははっきりと耳にのこっている。

お坊さんが経を読むのを聞いていたが、あんなもの、なんの役にも立ちやしないから聞いているのが嫌になり、家に帰ってきた。

机に坐っていると、白いヒゲを長く伸ばしている老人が手招きするので、いっしょに行った。どこだかわからないが、段々に高くなるところに綺麗な芝原があつて、そこで遊んでいた。

花の咲くころ、枝を折ろうとしたら、ちいさな鳥がやってきて、おれを脅した。ずいぶん恐ろしい思いをした。

程久保の家にもどると親の言葉も聞こえるし、読経の声も聞こえるが、おれはただ、お坊さんなんか嫌いだと、そればかり思っていた。お供えの食べ物食わなかったが、暖かいお供えの匂いは気持ちがいいもんだと思つた。

しばらく白ヒゲのお爺さんと遊んでいて、この家の前を通つたとき、「この家で生まれ変わりたいとは思わぬか」といわれた。

お爺さんと別れ、庭の柿の木の下で三日のあいだ様子をうかがい、窓から家のなかにはいって、また三日のあいだ竈(かまど)の横にかく

れていた。

龜の横にかくれていた三日目の夜、いまの父と母（源蔵とセイ）が語らっているのが聞こえた。「遠いところ……」「別れる……」などの言葉が耳にはいった後ですぐに母の腹のなかへはいったのだが、はっきりとは記憶していない。

その夜の語らいについて源蔵とセイが証言したのを篤胤が『勝五郎再生記聞』の注釈のかたちで書いている。逼迫した家計をおぎなうために妻のセイが江戸に奉公に出ることをきめ、いろいろと打ち合わせる会話が勝五郎に聞こえたのだらうという。

セイは三月になって江戸に行ったが、妊娠しているとわかったので、雇い主の許可をもらって中野村にもどってきた。そして十月十日に勝五郎が生まれた。妊娠のあいだにも出産にも異常はなかった。母の胎内にいるあいだの記憶はほとんどないが、母が苦しそうだなき思うときには腹の隅に寄っていたのをおぼえている。生まれるときには苦しいことはなかった——という次第で藤五郎とシツの子の藤蔵は源蔵とセイの長男の勝五郎に生まれ変わったのだと、勝五郎自身が祖母との寝物語に打ち明けた。

「ほら、これが最初に生まれた家だよ！」

祖母のツヤは、村の老婆たちがあつまつたとき、「程久保の久兵衛というひとを知らないか」と勝五郎にたずねた。

「久兵衛という名のひとは知らないが、程久保には親しい家があるから、問いあわせてみよう。だけど、いったい、何があったんだね？」

これこれ、しかじかと打ち明けて別れてまもなく、程久保の某老人が中野村の源蔵をたずねてきた。

「程久保の藤五郎は若いころの名を久兵衛といったのだが、藤五郎は亡くなり、いまでは程久保に久兵衛という名を知っている者はいない。藤五郎の女房の後夫が半四郎だ。あの藤五郎の子が、この中野村の源蔵さんの家の勝五郎に生まれ変わったそうだが、まったくおどろいた話だ。ともかくも様子を見てくれと頼まれたから……」

その老人がもどつてから、勝五郎の生まれ変わりの話は中野村で大評判になり、「程久保小僧」などと仇名で呼ばれたりして、勝五郎は外へも出られなくなった。

程久保に行きたい、連れて行ってくれと泣いてせがむのに父の源蔵は根負けした。祖母のツヤに手を引かれて中野から程久保にゆくと、勝五郎はたちまち「あつ、あれが最初に生まれた家だ、久兵衛さんの家だ！」と指さした。はたしてそれは久兵衛こと藤五郎とシツが藤蔵を産んで育てた家だった。

勝五郎はそれからは中野と程久保のあいだを往復し、実父と自分の墓参りもすませた。両家のあいだに「親戚づきあいをしようではないか」と交渉がはじまったころ、中野村の領主も放置しておけなくなり、調査がはじまった。

勝五郎と寅吉が気吹舎で対面した

中野村の領主は旗本で御書院番組に属する多門（まごも）伝八郎といい、根津に屋敷があった。

多門伝八郎という旗本の名は元禄時代に評判になったことがある、といえば知るひとぞ知る、江戸城で吉良義央（よしかみ）に斬りつけた浅野長矩（なげのちかむね）を現場で取り調べたひとだ。

元禄の多門伝八郎は浅野長矩を取り調べた結果を記述し、提出した。それが『多門伝八郎覚書』といわれ、長矩が「手向かいは致さぬ」というのもかまわず、梶川与三兵衛がその場にねじ伏せてしまった、云々の生々しい状況を今に伝える記録になっている。

文政の多門伝八郎も報告書を提出したのだが、斬った斬られたの血なまぐさいものではなく、「いちど死んで生まれ変わった」と自分でいう勝五郎少年の事件の顛末報告書だ。

文政六年四月十九日づけで多門伝八郎から御書院番頭佐藤美濃守にとどけられた文書は「わたくし知行所、武州多摩郡百姓源蔵伴勝五郎、去る午年八歳にて、同人姉に向かい、前生生れ替わりし始末

相咄し候えども……」にはじまり、「世上にて取沙汰つかまつり候間、取り用いがたき筋には候えども、御内々此の段、御耳打ち申し上げ置き候」でむすんであった。

伝八郎の内々の報告書の、その写しが篤胤のところ届けられたか、あるいは篤胤がだれかの家で見たのは、おそくても二十日のうちのことだ。

報告書の日付の翌日だから、その早さには驚嘆せざるをえないが、江戸の武士の世界には、その気になりさえすれば欲しい情報はすぐに手にはいるアンダー・グラウンドのシステムが成立していたものだ。

生まれ変わった少年がみずから前生のことを語っている、これは面白いぞと篤胤が興奮したその日のうちに屋代弘賢から連絡があった、「勝五郎は多門伝八郎氏の屋敷に連れられてきていますよ。ご自分の目で確かめてごらん下さい」のことだった。

夜が明けけるのを待ちかねて篤胤が多門の屋敷に走ったのはもちろんだ。

勝五郎は小声で語った

篤胤は二十一日に多門伝八郎の用人の谷孫兵衛に会って勝五郎と対面したい希望をつたえたが、勝五郎は父の源蔵といっしょに駒込の西教寺に行っていたので、会えなかった。多摩郡から江戸に出てきた勝五郎はやくも引く手あまたの人気者になっている様子がかがえ、篤胤としては気が揉める次第だ。

篤胤は知らなかったようだが、十九日か二十日か、どちらかの日に勝五郎は多門家から荻野梅場の家に連れてゆかれた形跡がある。

荻野梅場は篤胤にとっては危険な存在だ。文政三年の十一月に気吹舎に乗りこんできて「寅吉はニセモノ、いつていることのほとんどはおれが教えたもの」と罵詈雑言をいいちらかしたのが梅場なのだから。

多門伝八郎が「こういうケースは梅場さんが興味を持っているか

ら、まずあちらへご覧に入れて」と判断したのかどうか、早急な推測はつつしまなければならぬにしても、寅吉につづく勝五郎の登場が江戸の学者のあいだに争奪戦をひきおこしているのはまちがいないわけだ。だからこそ、篤胤はいそがねばならない。

多門家の用人の谷孫左衛門は篤胤に好意をもっているか、すくなくとも公平な感覚の持主だったらしく、二十二日に源蔵と勝五郎をつれて湯島にやってきた。屋代弘賢も駆けつけたが、勝五郎と応対したのは篤胤の妻の織瀬と寅吉のふたりだけ、ほかは物陰から様子をつかがっていた。勝五郎が落ちつかない様子だったからだ。

天狗小僧、幽界の体験者として評判の寅吉も気吹舎の門人になつてすでに四年目、十八歳の若者になっている。そこへ、「おれは生まれ変わったのだ」と自分でいう少年、すなわち再生勝五郎が、いわば新入りのかたちでやってきて対面している。

織瀬と寅吉がいるいと質問したが、この日の勝五郎のいうのは要領を得ないことが多かった。裏で聞いていた篤胤は「質問の仕方もよろしくないな」と感じ、つぎの機会には自分が正面に出て質問しなければだめだと、はやくも計画を練っていた。

つぎの日には篤胤の実兄、秋田藩士の渡辺正胤がたずねてきて、国友能当が持参した風砲を発射する真似を見ているところに、谷孫左衛門が勝五郎を連れてきた。即断は危険だが、孫左衛門は勝五郎のことを本気で聞いてくれるのは荻野梅塙よりは平田篤胤だ、といった感触を持つようになってきたらしい。

「この子は生まれ変わりのことをうるさく聞かれるのが嫌いで、今日も、『ほんのちよつと顔を見せるだけだから』といって連れてきた次第」

孫左衛門のいうのももっともだと思われる勝五郎の様子だから、質問責めにはせず、ゆっくりと遊ばせて気分がほぐれるのを待つ作戦を立てた。

能当の風砲をかこんで、おとなたちがわいわいと騒いでいる雰囲気が入ったか、勝五郎の気持ちはなごみ、今夜はここに泊まる

うかなどと言い出した。ところが、そこへ谷孫左衛門の家から使いがあり、勝五郎の帰宅を待ちくたびれているとの伝言。

「おれはホトケさまや坊さんが大嫌い」と勝五郎

勝五郎の口からぼつぼつと言葉が出てきたのは四月の二十五日、明日は多摩に帰りますからとの挨拶をかねて湯島にやってきたときからだ。

この日、気吹舎に来ていたのは堤朝風のほかに、門人の立入事負（こむぎ）と国友恒足、土屋清道、矢沢希賢など。篤胤と事負、そして寅吉の三人がもっぱら質問し、ほかは隠れて聞いていた。

武士の真似をするのが大好きだと孫左衛門はいつていたが、そのとおり、大小の方を抜いて見せてやると勝五郎は喜んだから、「大きくなたら刀をやるう。それまでは、生まれ変わりの話だ」と、だますようにして話をさせた。

まずはじめにいったのが仏教のこと。

「坊さんは、ひとを騙（だま）して物を取ろうとする悪者だ」

「そうはいうが、死んだときには坊さんにお経を読んでもらうから地獄には落ちず、極楽という楽しいところに行けるんじゃないのかな……」

「おじさんたちが坊さんを好きなら、そうすればいい。極楽の話は、みんなウソなんだ。おれは、坊さんは嫌いだ！」

篤胤の第一印象は、これは寅吉が岩間山からもどつてきたときと似ているな、というものだった。いったん死んで、また生まれるまでのあいだに勝五郎は幽界へ行っていたのではないか——期待に似た思いがこみあげてきたのではなかったか。

勝五郎を連れて、あちこち歩きまわった白ヒゲの老人のことを、「それは坊さんではなかったのか？」と、衣装や頭髪の話にからめて執拗に質問してみた。しかし勝五郎の返事は老人が僧侶であることを否定するものばかりだった。

「では、わたしの頭のようにだったのだね？」

勝五郎は篤胤の頭を指で差して、

「その頭の毛をうーんと長くしたかたち」

篤胤はチョンماغスタイルの髪だ。それをうーんと長くしたかたちというなら、つまりは総髪のことだ、すくなくとも坊主頭ではない。

勝五郎を連れて幽界を歩いていたと思われる老人は僧侶ではないらしいから、篤胤としては安堵の思いをしたはずだ。

篤胤の質問には誘導尋問の色彩が濃厚だといっていいないことはないが、といって篤胤の罪でもないだろう。生まれ変わった少年と聞いてすぐに「幽界」を連想し、あれこれと手を尽くして今日の対面と質問にこぎつけたのだから、幽界に重点をおいた質問をして当然なのだ。

湯島の気吹舎には庭木があつて、たまたま一羽の烏が羽をやすめていた。それを見て篤胤は思ひだした、勝五郎が老人に連れられて歩きまわっていたとき、花の咲いた木の枝を折って取るうとしたら烏に突っ付かれ、恐ろしい思いをしたと語っていたのを。

「おまえを脅かした烏というのは、あれと同じ形だったかね？」

「あれよりは形はちいさいが、目付きは恐ろしかった」

さもあらん——篤胤はうなずき、ひとつの諺を思ひだしていた——

「死んでゆく先には御前烏(みまきらす)」

この諺は、再生したものの、蘇ったものが、あの世で烏を見た経験について語ったもの、それにちがいない！

ノノサン——神さま——産土神

ところで、さて、ノノサンとは神さまのことだ。

関東から北の地方にかぎられるかもしれないが、神（神道の神）と佛の区別のつかないうちから幼児はノノサンを尊敬し、手を合わせて祈ることを教えられる。

勝五郎は「おれはノノサンなのだ」と宣言した。「ノノサンだから大切にあつかわなければいけない」と要求した。松浦静山ならば

「賢い子もいるものだ」と微笑し、それだけだろうが、平田篤胤はそうではない。

勝五郎は神（神道の神）・佛・ノノサンの三者を示されてからノノサンを選んだわけではない。神と佛の区別を知らないうちから第三者のノノサンを選んだのだ。とすると、勝五郎のいうノノサンは佛教の影響をうけていない純粹の日本の神そのものなのではないか！

そうにちがいないと決めつける前に、篤胤は慎重な手続きをふんだ。

勝五郎がそだった環境に、ノノサンと勝五郎が直接にむすびつく条件があったのではないか？ 勝五郎のノノサンが純粹の日本の神だと決めつけるのは、それが証明されてからでも遅くはない。

「父上は佛教を信心していなさるのかね？」

勝五郎の父の源蔵にたずねてみた。

「わたしですか・・・深く信じているとはいえませんが、父の代から、門口に立つ乞食や道心者に施すようにつとめてきました。来世を願うわけではなく、まあ、食べ物乞うのが哀れに思えるからです」

「で、家族は、どうかな？」

「女房は式日には鎮守さまにお参りしてますが、わたしは毎日参詣します。お寺さんでも縁があればお参りします。お寺見向きもしないというわけではありません。といって、ただ今日一日の無事を祈るだけなんです」

それから源蔵は話しをすすめ、中野村では徳本(トクモト)流の念仏講が盛んだけれども、自分は参加していないといった。

勝五郎のことを聞きつけて、「弟子にしたい」と申しこんでくる坊さんや、「これほど不思議な子を百姓にしては佛の罰があたる」と抗議してくるひともあらわれた。

そういう世間の声にたいして藤蔵が取った態度はというと、「本人が坊さんを嫌っているうえに、わたしも好きではないから、

断りましたよ。百姓になつてはならぬ子なら、わたしの子に生れてくる道理はないでしょう。百姓の子に生れてきて、本人も坊さんが嫌い、それなら百姓にそだてて悪いはじめはないと・・・」

父としての態度をはつきりと打ち出してからは、坊さんにならぬかという誘う者はいないなつたということだ。

ここまで調べてから、おもむろに篤胤は結論を出した——勝五郎を連れて歩いた白いヒゲの老人こそ産土神(うぶなまご)にちがいない。産土神とはにか？

出産のときに土地の精霊の守護を祈るのが産土信仰の発祥らしいと解釈されている。古くは『日本書紀』に「本居」と書いて「うぶすな」と読ませている例がみられる。蘇我馬子の奏上のなかの「葛城県はもと臣(まごみぢ)の本居(うぶすな)なり」という部分だ。個人や氏族の根拠地を大切にする気持ちがその土地の神を設定させた、それが産土神の信仰になつたのだろう。

本居宣長の姓は「小津」だったが、先祖の姓にあらためるということで本居に改姓した。先祖ゆかりの土地の神一般を信仰する姿勢が個人の姓に転化した例といえいいのだろうか。

「そういえば思いあたるふがあります」と源蔵

いちど死んだ勝五郎を連れて歩いた白いヒゲを生やした老人は中野村の産土神にちがいないと確信した篤胤は、あらためて源蔵に質せんした。

「勝五郎がいう白いヒゲの老人は中野村の産土神ではないかと思うが、どうかね？」

「駒込の西教寺に連れてゆかれたときにも同じ話を聞かされました。それとは別に、その老人は久兵衛だつたのではないかというひともあるのです。じつは、わたくも・・・」

思いあたることがある、平田先生が丁寧におたずね下さるので思いきって申しあげるのですがと前置きして、源蔵が長い話をはじめ

一 昨年（きょねん）の秋のこと、勝五郎が姉のフサが包丁（かぶづち）を失くし、母に叱（おこ）られた。

いちど出てきた包丁をまた失くしてまい、こんどはこっぴどく叱られるにちがいないと悲観したフサは産土神の熊野神社に祈りをさげ、「包丁の在り処をおしえてくださるならば、お礼として百度参りをいたします」と願（ねが）をかけた。

その夜、フサの夢枕（ゆみまくら）に髪をながく垂らした山伏の姿の老人があらわれ、「なくした包丁は、あの田圃（いりぼ）の草のかけにあるよ」と告げてくれた。翌朝フサが行ってみると、はたして夢のお告げのとおり（ごと）の場所に包丁が見つかった。

これこれしかじかとフサは母にうちあげたが、母はそれを叱りつけた。

「包丁がなくなつたぐらいのことで産土神に願（ねが）をかけるなんて、神さまに申しわけないことだ。はやく、お礼参りをしてきなさい！」

お礼の百度参りをすませたころ、またもフサの夢枕（ゆみまくら）に老人があらわれた。今度はひとりではなく、ひとりの男とふたりづれで、その男がフサに恐ろしいことをいった——おまえは悪いやつだ、態度をあらためなければこの家にいられなくなって苦しむぞ、と。恐ろしい言葉につづけて男は「われは蛇の形をしているのだ」ともいった。

恐ろしい夢のことを泣いて告げるフサを源蔵がなくさめてそのときは終わったが、勝五郎が白いヒゲの老人に連れられたこと、フサが包丁をなくしたときに山伏の姿の老人があらわれたこと、そしてフサを怯（おそ）えさせた恐ろしい夢のこと——あれこれを考えあわせると不思議な思いがしてならないのです。

ここで息をついて、また源蔵は「思いあたること」の続きを篤胤に語る。

「もうひとりの男は氷川大明神さまではなかつたのか？」

フサの不思議な夢体験につけても父の源蔵が思いつくのは フサが生まれたのは小石川だったということ。

「おおつ、おまえたちは元から中野村に住んでいたのではなかったのか」

「フサが生まれたときには御府内の小石川に住んでおりました」

「小石川……あその産土神はたしか氷川大明神」

「さようでございます。そこで思いますに、フサの夢に老人といっしょにあらわれ、『われは蛇の形のものじゃ』とおっしゃったのは氷川大明神さまではなからうかと……」

「氷川大明神、それだ！」

横から叫んだのが堤朝風、本居門下の国学者だが、独自の学説を唱えるよりは愛書家、蔵書家として有名だった。朝風が編集した『近代名家著述目録』は江戸時代唯一の著者別著述目録としての榮譽にかがやいている。このころ朝風は本居宣長の年譜を書き上げ、出版費用の捻出に苦しみつつも、篤胤との交際を深めていた。出版費用の苦勞では篤胤の経験も人後に落ちるものではない。

「氷川大明神が蛇の形をしているとは、ずいぶんむかしから聞かされていましたよ」

堤朝風につられ、篤胤は記憶のなかで『延喜式』の神名帳をめぐっていた。小石川の氷川明神の祭神はスサノオノミコト、そして龍女を祀っている、それが「われは蛇の形をしておる」との言葉になったにちがいない。熊野の神もスサノオを祀っているから、やはり蛇にゆかりがある。

そこで、こういう次第なのであると篤胤は結論づけた。

程久保の産土神が何かは知らないが、程久保村の神と中野村の神とが相談して勝五郎の生まれ変わりを演出なさったのだ。生まれた土地を離れて他の地に住むひとは多いわけだが、その場合、生まれた土地の産土神と、いま住んでいる地の産土神とがちからを合わせて守護なさるのだ。これは自分の理論が実証されたことでもある。

一日に千人が死んで千五百人が生まれる現実を見れば、人間にも物にも「再生」はありうる

篤胤の『勝五郎再生記聞』は、ここでしばらく勝五郎個人のことから離れて、人間の再生というテーマを古文献や伝承のなかで実証する手続きにうつる。実証手続きにうつる、いわば場面の転換にあたるところで篤胤が展開する理論が面白い。

まず、再生について儒学者と仏教者の態度をそれぞれに総括して、批判する。

——儒学者は「見識——」が狭いから再生をまったく認めない。

——仏教者は再生を認めないわけではないが、儒学者とは反対に、すべてのものが再生するという誤りに陥ってしまう。輪廻(リン)の考え方がそれだ。

——人間が生まれるのは神の産靈による業であつて、一日に千人が死んで千五百人が生まれてくる。とすると、神の産靈のはたらきは人間を物に、物を人間に、人間を人間に生まれ変わらせることが稀にはありうるのだと考えなければ計算が合わない。仏教者が輪廻という概念に翻訳して再生を認めるのは、稀少な再生を普遍の事実としたうえで認めるものであり、そもそもからして誤っている。

再生の問題にかぎってというと、篤胤は儒学よりは仏教に脅威を感じていたようだ。ものごとはすべて生から死へ永遠に巡回する、生も死も一時的な様相にすぎないとする仏教の輪廻の思想に相当強力な説得力を認めていたからだろう。人間や物は生まれ変わることがあるという再生説はわかりやすいが、輪廻の説のわかりやすさも相当なものだ。わかりやすさが競合する関係になっている。

人間の再生にかんする仏教側の意見を批判し、かつ否定する作戦として篤胤は二方面から攻める手を工夫した。

その一——仏教側の反論として予想されるのはつぎのような意見だ。

——再生したことを自分で知っている者と知らない者がいるのはおかしい。だから人間もものごとも、すべて輪廻するというのが正しいのである。

このように反論を予想して、それを篤胤が否定する。

「再生した人間のすべてに再生の事実を知らせないのは、それがまさに産土神の『幽事（みかさごと）』のなかの秘事』であるからだ」

それならと、仏教側の反論の二の矢が予想される。

——幽事のなかの秘事だなどというなら、完全な秘密にするほうが合理的ではないか。なぜ、勝五郎のように、「おれは再生したのだ」という者があらわれるのか？

篤胤の反論はつぎのとおり。

「神の幽事であるとは知っていても、どういう神の、どういう業なのか、知らせなければ人間は忘れてしまう。忘れさせないために、ごく稀に、おまえは再生したのだよと告げるのである」

その二——再生を輪廻という言葉に翻訳して、あたかも仏教だけが再生論をとなえているように言っているのは誤りである。

「天堂・地獄・再生・転生・因果応報といったことは、精粗の相違はあるものの、どこの国でも古来から言われていることだ。シャカがはじめていったわけでもなく、仏だけに関わることでもない。だからこの日本では、まず理論のうえからだけでも、仏教の影響以前の状態を考える。そうすれば、日本では人間の誕生が、したがって当然ながら再生のことも、産土神の神意によっていることがわかってくるはずだ」

ここまで書いたところで篤胤は『勝五郎再生記聞』を完成したつもりになった。だが、そのすぐあとで、満足できないことに気づかねばならなかったのだ。

勝五郎の身柄をかかえているだけでは篤胤は満足しない——氷川

大明神の業

篤胤は勝五郎少年を門人にすることに成功した。寅吉とおなじように気吹舎に寄宿する門人だから、篤胤の家族同様のあつかいを受けたようだ。これで、勝五郎に「お坊さんになれよ」と勧める声もふせげる。

勝五郎をめぐる争いは篤胤の勝利に帰したといえるのだが、それでは篤胤は満足できない。寅吉のときもそうだったが、勝五郎の身柄を気吹舎にひきとめておくのが目的ではなかったのだし、こうなつたからには、なおのこと、勝五郎の再生を理論づける学者としての義務を背負つたかたちになつた。

『勝五郎再生記聞』は文政六年五月八日でいちおう脱稿したが、そのあとすぐに追加の論考を書きくわえ、ちょうど一カ月後の六月八日に全体を完成した。上京計画が確定してくるにつれて、朝廷にささげるつもり of 著作のうち、もっとも重要だと考えていた再生論をより強力なものに仕上げる必要を感じた結果だろう。

追加の論考のテーマは人間の再生と産土神の関係だ。

勝五郎が生まれ変わったこと、それが小石川の産土神の業であることを篤胤は確信している。しかし、一例だけでは説得力がとぼしい。ほかの土地か、おなじ小石川の産土神による別の再生の実例があれば理論として強力になる。篤胤がとりあげたのは小石川の産土神が関係しているとおもわれた、もうひとつの再生事件だった。

文化十二年（一八一五）、小石川の石工の長左衛門の弟子の丑之助が梅毒（*びんじょう*）にかかり、医者から不治の病と宣告された。丑之助は酒飲みだったので、讃岐の象頭山の神に梅毒平癒を祈願して酒を断つたら、さしもの重病も平癒にむかった。

その年の氷川明神の秋祭りがちかづき、若者たちは丑之助の「狂（*たか*）れ踊り」がなくては祭りにならないことに気づいた。丑之助は「狂れ踊り」の名手だったのだ。

「酒を吞まずには踊れぬが、金比羅（*こんぴら*）の神に断酒を誓って梅毒をなおしていただいたのは、おまえたちも知っているはずだ」

「鎮守のお祭りだ。明日一日ぐらいいは酒も吞む、踊りもおどる、それくらい、いいじゃないか」

その日は朝から酒を吞み、すっかり酔っぱらつた丑之助が急に「熱い、熱い！」といいだした。

「あつっー、あつっー、熱くてたまらん。ああ、金比羅さま、おゆ

るしてください！」

苦しみ、もだえながら丑之助は空を指さしている。

「どうした、金比羅さまが見えるのか？」

「見えるも見えないも、ほれ、あそこにいらっしやる」

火のように熱い息を吐きながら丑之助が言うには、金比羅の神は黒髪を長く垂らし、冠装束の姿、雲のうえで何人もの供がさしだす緋傘の下にお立ちになっている。神さまの前には鬼神のごとき容貌魁偉の力士が立って、神のお言葉をさげんでいる。

「断酒の誓いをやぶった罰だ、手足の指を一本のこらず折ってやろう！」

「ああっ、おゆるしを……！」

ころげまわって苦しみ叫ぶの丑之助を若者が抱いてやろうとしても、はね飛ばされてしまう。片足の五本の指が折られてしまったかと思うころ、丑之助の絶叫の言葉が変わってきた。

「鎮守の神、氷川大明神よ、はやくあらわれて、この苦しみを救いたまえ！」

それからまた、「多久蔵主(つひくらざう) 稻荷よ、来たりたまえ！」とも叫び、様子が変わったのに気づいた若者たちに「おまえたちは近づくんじゃないぞ」といって制したのは、いくらか容体も落ちついたかと思わせた。

腹這いになって庭に出て、なにやら神々を送り出すような仕草をしているうちに、もだえ、苦しみ様子は治まった。まだ息づかいの荒い丑之助は若者に、おおよそつぎのようなことを語った。

産土神は他神にたいして優位に立っているのではないか
丑之助は語った——金比羅の神のお供の力士に押し伏せられ、左の指をすべて折られたか思うときに鎮守の神さまがやはりお供をつけてあらわれ、金比羅の神にむかつて、こうおっしゃった。

「あなたに祈願して梅毒を治してもらいながら酒絶ちの誓いをやぶったのをお咎めになるのはもったもなこと。しかし、この男は我が

氏子(うぢこ)であり、我が祭りのために、やむをえずに酒を呑んだのです。情状を酌量してやる場合ではありませんまいか。処罰なさるにせよ、処罰の理由を宣告なさるべきでしょう。説明もなく、ただ罰するのは承知できません」

金比羅の神は言い返す言葉もなく、氷川大明神を睨みつけているだけだった。

そこへ伝通院(でんつういん)の多久蔵主稻荷の神があらわれ、二神のあいだに平伏しておっしゃった。

「わたくしが責任をもって丑之助を金比羅にお礼参りにゆかせます。氷川明神さまも金比羅の神さまも納得なさっていたいただきたい」

多久蔵主稻荷の神の仲介を了承して、金比羅の神と氷川大明神はたがいにお礼をかわして去ってゆかれた。

夢ではないしるしるに、と丑之助がひらいて見せる左の足の指が三本、痛ましくも折り曲げられていた。

小石川戸崎町の住人たちが費用を出し合って丑之助を金比羅へお礼参りにゆかせると、三本の指は元のとおりに真っ直ぐになった。

丑之助の話は倉橋与四郎が篤胤に知らせたもので、語りおわったとき倉橋は、自分の見解をつけくわえている。

「産土神の守護があれば、ほかの神の祟りも逃れられるのではないでしょうか」

篤胤は、倉橋の見解は正しいと考えた。

倉橋の見解を正しいものとして受けとり、さらに敷衍(ふせん)するために篤胤は、大阪の門人の松村完平や今井秀文が報告してくれた人間の再生の物語を挿入して『勝五郎再生記聞』を完成した。

倉橋与四郎の見解を、もういちど確認しておきたい。

金比羅の神が航海や漁業関係者を中心にして全国規模の信仰をあつめていたのは周知のことだ。その金比羅の神に、梅毒を治していただければ酒を絶ちますと誓ったのをやぶった丑之助の罰は逃れられるはずはない。

だが、金比羅の神よりも、丑之助の産土の神である氷川大明神の

ほうが優位に立っているという事実を、丑之助は苦しみのなかで確認した、これが重要なことだ。

土地の神——産土神——は土地の人間をつくる神だ。だから、いちど死んだ人間を幽界から連れ出してきて生まれ変わらせることもなされるにちがいない。平田篤胤は自信にあふれてこの理論を完成し、『勝五郎再生記聞』の一篇とした。そしてこの書を朝廷に献上すべく、篤胤は京都への旅に発った。

(9 章・終)

「天狗小僧は怪しいものではありません」

天保六年（一八三五）六月二十二日づけで鶺鴒（うぶ）平七にあてた篤胤の書簡がある。

鶺鴒平七は水戸藩の江戸屋敷の用人、このころ篤胤は屋代弘賢の推薦によつて、水戸の彰考館の研究員として採用していただきたいとの希望を提出していた。水戸藩側の交渉の窓口になっていた鶺鴒平七から篤胤に、篤胤の住居の件と寅吉の件について照会があり、篤胤の弁明が六月二十二日づけで書かれた。

湯島天神男坂下の篤胤の住居、つまり気吹舎は旗本の屋敷を篤胤が「又借り」していたものだから、鶺鴒としてはいささかの不審を保持していたのだろう。

天狗小僧寅吉についての篤胤の弁明は、寅吉をどういう身分としてあつかっているか、からはじまる。

「いわゆる天狗小僧と申す者を先年から同居させ、給仕をさせ按摩をさせ、供として使っております」

「それを世間は非常に恐ろしいことのように思い、あれこれと風評しておりますが、わたくしとしては滑稽に感じられ、『天狗だから』といつて、それがどうした？」と、なかば冗談にいっております」

「世間の風評にたいしては、つぎのような狂歌をつくりました。

我が宿の軒端に多く松を植えて

天狗住ませて見せんとぞ思う

この狂歌のことなどを、先日お目にかかった折りに申し上げたのですが、それがお耳に留まって本日のご下問になったこと、恥じ入っております」

これから弁明の本論に移る。

「世間では天狗というものを非常に恐ろしいものと考えているので、そもそも天狗とは如何なるものであるのか、実態をとつくりと研究したいと思ひましたのが天狗小僧を拙宅に同居させた目的でありま

す。同居させるについては屋代弘賢先生と相談いたしました」

天狗の実態研究——あくまで学問上の目的でありましたと篤胤は強調している。にもかかわらず、世間では、そうは見てくれなかったのです、と。

「天狗小僧の噂が高くなったので、町奉行所から屋代先生にたいして内々のお尋ねがありました。屋代先生が、天狗小僧は決して怪しいものではない旨を奉行所に説明なさいましたので、奉行所の衆は委細を諒解なさっています」

天狗小僧は決して怪しいものではない、そのことについては奉行所でも諒解なさっている——篤胤のこの言い方には冷やかな態度が感じられると言えば、言い過ぎになるだろうか。

天狗小僧や勝五郎はどうなったか？

篤胤の『仙境異聞』の記述は文政三年（一八二〇）十二月三日で終わっている。伊勢神宮内宮の権禰宜の荒木田末寿がたずねてきてくれて、秋葉山で自分が天狗に遭遇した体験を話し、このところいささか意気消沈気味の篤胤をあげまして帰っていった、それが『仙境異聞』の日付づきの記述の最後だ。ただし、この日の記述に寅吉は登場しない。

寅吉が最後に登場するの十一月二十九日で、越後からやってきた戸田伴七に寅吉は、その聖天像は錆漬して海に捨てたほうがいいよ」と助言した。

それから数日後の十二月三日で『仙境異聞』の記述が終わっているのはなぜなのか、理由ははっきりしないが、あえて推測するならば、『仙境異聞』一冊の材料としては充分なだけの量の言葉と振る舞いを寅吉は見せてくれたからではないか。『仙境異聞』のうち、寅吉の日常の記述は四分の一ぐらい、あとの四分の三は質疑応答や寅吉の演説の割合になっている。寅吉は篤胤の『仙境異聞』のためにはたっぴりと語り、説明したといっていだろう。

寅吉が篤胤のためにたっぴりと語り、説明した——言い換えると、

これ以上に語るものを寅吉は持ち合わせていなかったわけでもある。岩間山、その他の幽界に登って新しい情報を仕入れてくることもなかった。押し寄せる物好きの質問に答え、それがいくらか静まっただけからは篤胤のお供をしての外出である、按摩である、岩間山へ行く時間はなくなってしまった。

その後の寅吉の動向は気吹舎の日記によってあきらかなのだが、たとえば文政八年四月三日には、「今日、嘉津馬出宅」とあり（嘉津馬は寅吉の別名）、七日に「夜、嘉津馬帰宅」とあって、あしかけ五日のあいだ気吹舎を留守にしていたことがわかる。

この五日のあいだに寅吉が岩間山に登って修行していたとは考えにくい。修行して帰ってきたのなら、「嘉津馬帰宅」の簡単な記事で終わるはずはないからだ。

この年の九月、寅吉は神田祭りの見物に出かけたまま行方がわからなくなったと日記に書かれ、翌年の六月十一日、ほぼ十ヵ月ぶりに気吹舎に帰ってきた。「大童子来る、夜分の出入りなり。御免なり」（大童子とは寅吉こと嘉津馬のもうひとつの別名）

一年ちかくの不在、そして「御免なり」という記述に、篤胤と寅吉のあいだになにかしらトラブルがあったのを思わせる。しかし、このあいだに寅吉が岩間山へ行っていたと推測するのも不可能だ。

文政十一年（一八二八）といえば寅吉は数えて二十三歳の青年に達しているが、三月十日の日記に「嘉津馬来る」の記事がある。「来る」であって「帰宅」ではないのは、たぶんこのころには寅吉と篤胤との関係は他人同様のものになっていたらしい。

篤胤から離れた寅吉は狩谷掖齋（やせう）と岸本由豆流（まめりゅう）に接近していた。

狩谷掖齋は江戸の書籍商の子に生まれ、弘前藩御用達の津軽屋狩谷保古の養子になった学者だ。豊かな私財を古書や古物蒐集に投じて考証学の道に進んだ。岸本由豆流は伊勢出身の国学者、幕府の弓弦師の岸本家を継いで大隅と名乗った。由豆流のペンネームは弓弦（ゆま）のもじりだろう。

狩谷掖斎は文政十一年の七月十四日に、「寅吉を医師にしたいからよろしく」と挨拶してきた。

そして十六日に「寅吉が剃髪した」と報告した。剃髪は医師のヘアスタイルだから、これで寅吉もついに医師になってしまうのかと思つたのも束の間、掖斎や由豆流からは「寅吉が坊主になった」と知らせてきた。剃髪して坊主頭になったというのではなく、僧侶になったということだ。

由豆流は七月二十八日にはツルツル頭もまぶしい寅吉を同道して挨拶にきた。

七月二十八日の日記——「(寅吉が)坊主になつたるはいろいろ仔細あることなり」

寅吉を僧侶にだけはしたくないと思えばこそ山崎美成などのライバルと張り合つてきたという気が、篤胤にはある。それが「いろいろ仔細あることなり」という次第で寅吉は僧侶になつてしまった。

寅吉の将来を思えば、それでよかつたのかもしれない。ともかくも、「いろいろ仔細あること」の一節は篤胤の深い溜息だった。

では、再生の勝五郎はどうなつたか？

はじめは藤蔵として生まれ、数えの六歳で死んだあとで生まれ変わつて勝五郎となつた少年の、その後はどうなつたかというと、文政八年(一八二五)八月に気吹舎の住み込みの門人として寅吉の後輩になつた。

一年ほどは気吹舎に住んでいたようだが、文政十年(一八二七)七月、しばらくぶりに姿を見せたあと、日記には登場しない。先輩の寅吉より先に気吹舎を去つたのではなからうかと推測するほかない。

公的な地位を求めて

水戸藩用人の鵜殿平七にあてた書簡のなかで篤胤は「天狗小僧は決して怪しいものではありません」と書いた、いや、書いたというよりは「誓つた」というのが妥当だろう。鵜殿あて書簡は水戸の彰

考館で研究者としてのポストを求める交渉のなかで書かれた、いわば履歴書だったのだから。

天狗小僧は怪しいものではない——天狗小僧寅吉にたいして冷淡な気分が感じられると先に書いたが、それとは別の、「あの件については触れたくないのです」といった、過去の一時期を抹消したい篤胤の気分も伝わってくる。

篤胤は公的な地位、身分を獲得しようとして工作するようになった。

篤胤はすでに備中松山藩の板倉家の家臣だった経歴がある。これを公的な地位といえないこともないのだが、板倉家のほうでは微禄の一介の家臣としてしか処遇しなかった。湯島天神の男坂下に気吹舎をひらき、文政五年には通計二百五十七人の門人をかかえる学者にふさわしい待遇をしなかった。

文政六年に板倉家を去るのは、さしせまった上京にそなえてのことだったが、学者として待遇してくれない不満も原因になっていたはずだ。

篤胤が求めていたのはひとかどの名声を得ている学者にふさわしい地位、身分である。ただし、篤胤自身としては自分が地位を求めているのを認識していなかったかもしれない。名声赫々(あしせきよく)たる平田篤胤にふさわしい地位は先方からやってくるもの、自分はその引き受ける手続きをするだけ、そんな心境であったというのが適切かもしれない。

じつは、文政六年の上京のいちばん重要な目的はそのことだったと考えるべきだろう。吉田家から、しかるべき地位に正式に任命されるのが目的だった。

京都に本拠をおく神道の吉田家は、いわゆる吉田神道の教祖であると同時に、全国の神職の総元締め(あきもと)の地位にあった。

そもそも神社や神職を統括する権威は、花山天皇（在位九八四～九八六）の曾孫にあたる延信王が神祇伯王家となってから神祇伯の白川家のものだった。

吉田家は神祇伯大副、いわば白川家の補佐的な家柄だったが、戦国時代に吉田兼俱(まきき)が新しい神道説を唱えて勢力を増強、白川家を圧倒して神道界を牛耳るようになった。白川家の権威がなくなっただけではないが、吉田家が発行する免許状がなければ神職には就けない状況になっていた。

その吉田家の、しかるべき地位に就けば篤胤の学説の影響力は倍増する。文政六年の上京の結果、篤胤は吉田家から「神職に教授してほしい」との正式な依頼をとりつけることに成功した。地方在住の篤胤の門人たちにも効果はあり、地方の神官たちは篤胤の門人たちを「平田先生のお弟子」として尊敬するはずだ。

しかし篤胤は神職教導という、いわば顧問的な地位には満足しなかった。

六年後、吉田家の江戸の目代が失脚した。江戸で吉田家を代表するのが江戸目代だから、大きな勢力を持っている。篤胤は江戸目代に就任することを望み、実現は容易だと思っていたようだが、実らなかった。あとから思えば、神職教導の顧問役に就いた文政六年が篤胤と吉田家の提携の頂点だったのだ。(田原嗣郎『平田篤胤』) ほぼおなじころ、篤胤は尾張徳川家に仕官することを計画し、屋代弘賢の仲介もあって三人扶持を支給されることになった。雀の涙にも足りない三人扶持の給与はともかく、これは正式な藩士の身分ではない。正式な藩士に取り立ててもらおうとして工作をつづけたが、これもまた実現しなかった。

そして水戸藩の彰考館の研究職を希望し、またまた実現しなかった、というのが篤胤の公的身分獲得運動の失敗の経過だ。

文化人の番付

さて、これから、平田篤胤が不遇のどん底に突き落とされる場面に立ち会っていたかねばならない。

神道の吉田家との提携関係が冷却の段階にはいつてくる、尾張徳川家や水戸彰考館へ仕官する工作も頓挫してしまう、これより残酷

な不遇がありうるのかと不審をお持ちになる方はすくなくないはずだが、事実として、じつに残酷な運命が篤胤を待っている。

時期は古くなるが、文化十二年（一八一五）の冬、江戸の巷に一枚摺の番付が売りだされた。番付といえば相撲の力士の番付ときまつたものだが、文化十二年のそれは名士の品題、つまり文化人の評判記だった。

行司に蜀山人太田南畝（みなき）や市河寛斎、東の大関に亀田鵬斎、関脇に大窪詩仏、西の大関に谷文晁、関脇に菊池五山など百人以上の名をずらりとならべた、それだけのもの、いまなら「怪文書」「アングラ評判記」といったものだが、行司に擬された太田南畝自身が「江戸はじまって最初の儒者騒ぎ」と皮肉ったほどの波紋がひろがった。（『日本随筆大成』第三期①北川博邦氏の解題による）

騒ぎの大きさに味をしめて、とっていいのかわからないのだが——というのは文化人番付の作者と、そのつぎに刊行された『妙々奇談』の作者「周滑平（すいへい）」が同人かどうか不明だから——番付から十年ほどすぎて『妙々奇談』が刊行された。

文化人番付が文化人に序列をつけてならべただけであつたのにくらべ、『妙々奇談』の編集意図は徹底していた。ならべた文化人ひとりひとりを徹底的に糾弾するのである。

第一回の槍玉にあげられたのは亀田鵬斎（たかたに）だ、高輪の泉岳寺に鵬齋が赤穂四十七士の顕彰碑を立てたのを大石良雄の亡霊が登場して糾弾する、といった趣向で一貫している。

第二回の槍玉にあげられた大窪詩仏は詩仏という号が傲慢だと非難されるのだが、これを非難するのが何と釈迦如来で、「この私の許可もなしに仏の字を号に使うのは怪しからん！」という叱責だから、詩仏が弁明しても声がとどかない仕掛けになっている。

『妙々奇談』には『妙々奇談後編』『論妙々奇談』などの類似篇がつづき、これまた長期間にわたるスキャンダルとなった。

『妙々奇談』で槍玉にあがったのは儒学者だったが、天保三年（一八三二）、ついに国学者を罵倒非難の槍玉にあげる『しりうこと』尻

言、後言）』が出た。上中下の三巻編成だが、各巻の巻頭に「皇朝学者・妙々奇談」と見出しが振ってあるのでわかるように、「ついでに生まれた、『妙々奇談』の皇朝学（国学）者篇！」と自分で宣伝している。ただし筆者の「小説家主人」が周滑平と同人であるのかどうか、これまたわからない。

槍玉にあがったのは六人の国学者だが、第一番に登場させられたのがほかならぬ平田篤胤、尾張徳川家への正式仕官、水戸彰考館への採用を望んであれこれと工作にかかったときだった。

聖徳太子登場！

平田篤胤は復古主義の国学を主唱して天下を瞞着している。『古事記』序文に「三神が造化の首となった」とあるのを都合よく解釈して自分が造化の三神になったつもりになり、儒学や仏教、はては通常の神道までを侮蔑し、全世界はすべて日本の出店だとする説を立てている。ちかごろでは仏教は魔事、天狗は釈魔とする『古今妖魅考』なる書物を刊行した。

そこへ一天にわかにかき曇り、天狗倒しという言葉もさてはと思われるような家鳴りがしたので、篤胤がきつと空を見上げると、日月じるしの錦の御旗をかかげた聖徳太子の御一行が湯島天神に來臨なさった。

これはさだめし、自分が妖魅を降伏させようと奮闘しているのを天神たちが深く感じたまい、天下りなさったのだ——篤胤はこう考え、弟子どもに「それ、お神酒の用意を」などといいつけ、騒ぐのを、太子はにこにここと笑いながら眺め、やがて篤胤に近づき、おっしやっした。

「われを天神だと思っておるようだが、そうではない。われは用明天皇の皇子、上宮(かみのみま)の厩戸豊聡耳(うまのどのよとみみ)の皇太子である。ここなる江戸の築地の太子堂が類焼したゆえ、難波の天王寺から火事見舞いのついで、なんじ篤胤の不埒を懲らしめようと、わざわざ寄り道した」

おまえの不埒を懲らしめるため、わざわざ寄り道したのだ、などといわれて黙っている篤胤ではない。

「若いときから手の筆を休めず、目に書を離さず、古伝を明らかにし、古意を証明することに努めてきたほか、一点の不埒もあるはずはありません。わたくしの、どこを不埒と……」

聖徳太子はカラカラとうち笑い、まず第一にと、篤胤の『豊の真柱(たけのみましら)』を非難的にとりあげる。

「太陽は動かず、月と地球が共に動いているのである。たとえば船に乗って航海していると、船の上の者には船が動いているのが感じられず、岸が動いているように見える、それとおなじである——おまえはこのような新説を唱えた」

「世間ではおおさわぎしたが、あれは新説でもなんでもない。『尚書』のなかの『地はつねに動いているが、それを人間は知らない。たとえば、大舟に乗って窓を閉めてしまえば舟の動きは見えない』とある、これとそっくり同じではないか」

「明の時代に編集された書物のなかから『尚書』の言葉をこっそりと抜きだして、あたかも自説のように言いふらし、師の本居宣長を乗り越えようとした、それが不埒である！」

太子の篤胤懲戒的的は、篤胤の号の「大角」に移る。

「おまえは大角の号の由来について、軍法令に『大角・小角・軍幡』とあるのにちなんだものだとか、『倭名抄』に『大角——波浪の笛』と説明されているのと、海中から拾いあげた石笛に『天の磐笛』と名づけて大切にしているのを重ねて大角の号を付けたとかいい、なおも怪しからんことには、『天の磐笛記』などという書物さえ書いておる」

「しかしそれは、すべてでたらめである。おまえは役小角(エノキナカ)を真似し、しかも小角を乗り越えようとして大角と号したのだ。その証拠をいってやろう、小角は鬼神を駆使して神変の業をおこなったのだが、おまえがそれを真似ようとした証拠が天狗小僧寅吉にほかならない」

というわけで、聖徳太子のお叱りは寅吉の問題に移ってきた。

「門人のほか、だれもおまえの説を信じない」と聖徳太子

役小角は修験道の祖として日本宗教史のなかで確固たる地位を占めている。ふるくからの山岳信仰の指導者——シャーマンであったと推測され、仏教が伝来されるにつれて迫害された多数のシャーマンが小角という個人のイメージに凝縮されている。

流罪された伊豆の山々をはじめ、各地の山から山へと飛びまわって不思議な業を見せたといわれるが、小角単独の業ではない、多数の鬼神を駆使した集団の業であったはずだという合理的な立場からの解釈もある。聖徳太子がここで寅吉の問題を持ち出したのは、小角の鬼神との対比からだろう。

もうひとつ、仏教との微妙な関係がある。役小角そのものは仏教に反抗しながらも、ついに屈伏してしまう敗北者の側面と、表向きは敗北はしたが裏面では反抗の姿勢を捨てない反抗者の側面との二面性を持っている。

仏教の招来と定着を指導した聖徳太子から見れば、平田篤胤は役小角がいつその魔力と不屈の態度を強めて再生してきたものとしての危険性を秘めている。

飛鳥時代の聖徳太子が江戸時代の平田篤胤を叱りつける——フィクションだと承知したうえでもばかばかしい筋書きのように思えるが、篤胤が役小角の強化再生だとすれば、その篤胤を叱責して屈伏させられるのは聖徳太子のほかにはいないわけだ。

「寅吉なる天狗小僧を、どこからか呼んできて、当人にも読めぬ文字をのたくり書かせ、ひとりでは持つこともできぬ長い笛をつくらせて世間をまどわす——おまえのやろうとしているのはすべて山事だ」

「世間ではおまえのことを山師だと思っているから、たとえおまえの学説に正しい部分があっても、だれも信じないのだ」

寅吉のことが出れば、つぎには勝五郎がひっぱりだされるのが順

序というもの。

「寅吉のつぎには勝五郎とかいう子供の再生譚だ。そもそも、おまえの『靈の真柱』には『人間の魂は産靈神(むすぶたま)の業であり、死んだあとの魂は幽冥界に属するものであつて再生転生はありえない』と説いているのに、とつぜん生まれ変わった勝五郎があらわれたものだから、自説を変え、再生も皆無ではないなどと言いだした。おまえのような変節を俗に『尻口で物を言う』と言うのである」

篤胤の理論では、人間の死後の魂の行方と再生の問題は次元を異にするのだが、ここで不平を言うと、恐ろしい風貌の太子のお供にやつつけられるから、唇を噛んで黙って聞いているしかない。

『しりうごと』にフェアな姿勢がないわけではない

そろそろ叱責も終わろうかと思われるころになつて、聖徳太子は厳しい批判の矢を篤胤にむけて発した。

仏教伝来以前の日本に正しい日本の姿があると言いながら、その学説を証明するのに中国の古典を資料に使っているのは矛盾しているのではないか——これがその一で、その二としては、天皇の勅撰によつて書かれた『古事記』『日本書紀』などを自分の著作と同じ次元でならべて論じるのは怪しからん、というもの。

第二の批判について太子はさらに意見を重ねて、根本的な資料にたいする篤胤の扱い方が自分勝手であると決めつけた。資料の扱い方ではどれほど慎重、かつ敬虔な態度が必要とされるか、実例をあげて論じるところで聖徳太子は荻野梅塙を引き出してくるのだ。

「ちかごろの例でいえば、荻野梅塙はかつて我が党の者(仏教研究者という意味だろう)であつたから、ある方の勧めで法華經の校訂をし、刊行したことがある。それはいいとしても、さまざまの異本を校合した結果を傍注にも書かず、自分の意見によつて取捨選択した結果だけを印刷してしまつた。これは篤胤よ、おまえの資料の取り扱いと同様の誤りなのである」

ひとりの聖人の言葉、聖人が書いた書物はそもそもは一個しか存

在しないはずだが、長い時間の経過のうちにさまざまの解釈や誤解が派生し、または削られ、言葉づかいの相違だけではなく、内容の相違があらわれてくるのは避けられない。

おなじ題名の書物でも微妙かつ重要な相違があつて、とりあえずはAを選ぶとしてもBとの相違は無視できない、そういう関係を異本の関係と言う。長い歴史を持つ宗教や文化はまさにこれ異本の集積だと言つても過言ではないわけだ。

それが宜しくないのだよとして聖徳太子は篤胤を懲戒するわけだが、これだけなら篤胤には痛くも痒くもなかつたろう。痛いのは荻野梅塙の名前が、しかも、宜しくない学問の姿勢の見本として出てきたことだ。

荻野梅塙は屋代弘賢とも交際があり、したがつて篤胤とは学問仲間でもあるのだが、天狗小僧寅吉の件では終始一貫して篤胤の批判者、妨害者だった。

もしも聖徳太子が、「荻野梅塙がおまえを批判しているのは正しいのである」といった論法で、つまり梅塙を篤胤の論敵の立場で登場させていたなら、篤胤としても「フン、分からず屋が寄つてたかつて責めてきても負けるものか！」と、孤高の境地に安住できる。それがそうでなかったところに、『しりうごと』の篤胤批判の強靱があつた。

篤胤の側の反論は旗色が悪い

『しりうごと』で批判された平田篤胤、石川雅望(せつかみ) 、屋代弘賢についてそれぞれを弁護する立場からの反論が書かれ、刊行された。(この三人のほかの被・批判者についても弁護論は出たと思われる)

平田篤胤を弁護して聖徳太子に反批判をあげたのは門人の川崎重恭(しげやす)で、『鳥おどし』と題する反論の書を出した。『しりうごと』が世に出た直後に書かれたのは確実で、時宜を失してはいないのだが、鳳凰目に見ても威勢がよくない。いわゆる揚げ足取り

に終始しているからだ。

篤胤は本居宣長の説に反する説を言いふらして一家を成そうとしている——太子のこの批判にたいして、重恭はどのように篤胤を弁護するか。

「宣長の言葉に、『わが教え子は、われの後に優秀な学説を見つけなければ、わが説に拘泥することなし』というのがある。これによれば宣長は、篤胤が素晴らしい学説に達したのを祝福しておられるはずだ」

「寅吉という小僧をどこからか呼びよせて、という批判は不当である。寅吉は江戸の生まれ、それをまず岸本由豆流が発見して山崎美成に知らせ、それから篤胤が『古今妖魅考』を著す材料にしたのだ。世間は寅吉を恐れて天狗小僧などと言い、篤胤の幽界研究を『山事』などと非難したが、篤胤はすこしも恐れることなく、寅吉から幽界の様子を聞き出したのだ」

「太子は篤胤の『豊の真柱』では再生が否定されているとおっしゃるが、この書の、どこに再生を否定しているというのか？」

篤胤は師の宣長の意向に反するようないことはしていない——これが基調の反論だから威勢が悪いのは仕方がないともいえる。反論するなら、聖徳太子の正面から攻撃すべきところのだが、まさか太子を論敵にまわすことはできないという、はじめから及び腰の姿勢だった。威勢が悪いのも当然だ。

『鳥おどし』は天保三年に書かれたことがはっきりしているのに、刊行されたのは天保九年か十年だったという。刊行が遅れているあいだに篤胤の境遇は凋落の一途をたどり、天保十二年（一八四一）には、ついに幕府から秋田藩にたいして「篤胤を帰国させよ」と命令が発せられる事態になってしまった。

『鳥おどし』の刊行が遅れたから篤胤の凋落をまねいたというよりも、篤胤の凋落が確実になったから無害であると判断されて刊行が許可されたと考えられる、そこにこそ篤胤がおかれた境遇の深刻があったはずだ。

天保改革の冷たい嵐のなかに――

天保六年（一八三五）も終りちかく、平田篤胤は四十五歳から六十歳までのあしかけ十六年にわたって住んだ湯島天神男坂下を離れて根岸新田に移転した。

「呉竹の根岸、山茶花の根岸、紅梅の根岸、寮の根岸、鶯の根岸へは、同じ江戸でも、一種風雅な別天地へ行くような気分で、上野山内をぬけ、鶯谷を降りて行ったものである。

その名高い根岸の鶯は、初代輪王寺宮たる公弁法親王が、わざわざ京都の鶯を取寄せて放たれたもので、江戸の鶯は脚が黒いけれども、京都の鶯は赤か灰色の脚をして、容子（むすめ）もばかによく、さえずる声も物軟らかい」（矢田挿雲『江戸から東京へ』）

根岸といえば文人墨客の逍遙が連想され、俳句の世界では、「ナニニヤ」と季語入りの上の句をおいて「根岸の里の侘住まい」と中下の句を付ければたちまち一句できあがり、といった冗談のたねにもなっていた。

平田篤胤が天保六年に湯島から根岸に居を移したのは俳句をつくるためではないし、のんびりと逍遙を楽しもうというわけでもなかった。

このころ篤胤は秋田藩佐竹家の正式な藩士として復帰することを計画し、あれこれと手づるをもとめて工作をはじめていた。そして根岸の西の日暮里には秋田藩の下屋敷――正しくはお囲地――があった。

復帰工作は順調にはすすまない。

そこで、復帰を実現するためには従順な姿勢を見せておく必要があり、効果的でもあるはずだと見込んだ篤胤が先手を打ったつもりで秋田藩のお囲地に近い根岸への移転を断行したのではないか、そのように推測するのも無意味ではない。

篤胤は『しりうごと』の攻撃をかなり深刻に受け止めていて、公的な身分を欲しいと思うようになってきていた。屋代弘賢も『しり

うこと』で批判の槍玉にあげられたが、天下の御家人の権威がある弘賢は笑ってすませられるのに、篤胤にはそれは不可能だ。水戸家や尾張家につながりがあるとはいえ、家臣の名簿に名前が載っているわけではない、所詮は一介の浪人なのだ。

公的な身分を獲得すれば何も恐れるものはない、とまではいえな
いにしても、ある程度までは自由に発想し、自由に書ける境遇は維
持できる。これだけでは受け身の姿勢だが、篤胤は攻撃からの回避
よりも、公的身分を獲得することで自説の影響力を強化したいとい
う点に力点をおいていた。攻撃を吸収、倍加して反撃に転じるとい
うことだ。

秋田藩への復帰交渉は、住居の表札に「秋田藩」の文字を書くの
は黙認するといった程度でまとまっらしい。篤胤が満足したのは、
これを踏台にして水戸家や尾張家にもっと深く食い込む展望を持っ
ていたからだろう。

それは天保九年（一八三八）あたりのことだったというが、遅か
った。水野越前守忠邦が幕府の老中になり、さらに老中首座に登り
つめて幕政大改革という名の肅清の斧を振るう日が迫っていた。

- 191 -

「平田大角——右の者、早々国許へ差遣はせらるべく候」

平田篤胤という国学者には厳重な監視が必要である——こういう
認識が幕府のなかに生まれたのは天保八年（一八三七）からであっ
たはずだ。

この年の六月、越後（新潟県）柏崎の桑名藩の飛地の陣屋が一揆
の襲撃を受け、指導者の生田万（なまくだ まん）は平田篤胤の門人である
と判明したのだ。

天下の台所の大坂、奉行所与力を引退していた大塩平八郎が門人
をひきいて町中に撃って出て大砲をぶっぱなしたのが四カ月前の二
月十九日のこと。大塩の武装反乱のニュースが江戸城を震撼させて
間もない六月、越後の柏崎で武装一揆が起こった。

大塩平八郎は陽明学者として名を知られており、その陽明学は官

学の朱子学の没政治性を嘲笑、輕蔑してやまない危険な政治学であった。そして越後の生田万も「危険な」平田篤胤の学問を奉じる者で、しかも「大坂の大塩平八郎に呼応して反乱決起する」という姿勢を鮮明にしていた。

学問と政治の危険な結合——幕府の監視がはじまったのを知ってか知らずか、平田篤胤は公的な世界に乗り込もうとの工作を開始した。権力の懐にとびこんでしまえば一応は安心、といった計算があったのかもしれない。

篤胤は二件の政策提案を土産にして幕府に食い込もうとした——水野忠邦の政権はこのように判断したようだ。尺座を設立する件と曆を改めることの二件である。

金銀の秤や穀物の升については公的な基準がさだめられていて、特定商人が座を結成して秤や升の製造と販売を独占しているが、尺——長さについては基準がない。

そこで尺の基準を公的に決定して特定商人に座を結成させて冥加金を徴集すれば相当の利益が見込まれる——屋代弘賢が提案し、篤胤が度量衡の歴史の研究をして学問の裏付けを担当することになったものだという。

つぎに曆についてだが、篤胤が改曆を献策したとわけではなく、篤胤の著書『天朝無窮曆』について幕府の天文台が疑惑を抱き、それが役人のあいだで「篤胤は改曆を企てた」という認識にふくれあがったものだろう。（田原嗣郎『平田篤胤』による）

内々の尋問にたいして篤胤は鄭重に対応していたはずだが、天保十一年（一八四〇）十二月晦日、秋田藩江戸屋敷にたいして幕府から呼出しがかかり、留守居役が出頭して、つぎの書面を受けとらされた。

「平田大角——右の者、早々国許へ差遣せらるべく候事」

書面とは別に口頭で「著述禁止」が言い渡された。秋田への強制送還と著述禁止が篤胤に通告されたのは天保十二年の正月元旦だ、六十六歳になる篤胤の新年は途方もない悲報とともに明けた。

「平田篤胤は何をやったのか？」と問われたら「この世が複数の時間で構築されていることに気づいた」と答えていただきたい

平田篤胤は天保十二年四月に秋田にもどって、十両・十五人扶持を支給される正式な秋田藩士の身分になった。皮肉なものである。

二年後の閏九月十一日、六十八歳で亡くなるのだが、夏のころに死を悟り、心境を歌に託している。

おもうことの ひとつも神につとめ終えず

今日や罷(せ)るか あたらこの世を

思うことのうち、ただひとつも完成しないうちに死んでしまうのか――！

篤胤よ、そんなことをいってはいけない。

無意味な謙遜はしないという態度で生きてきた、せめて死ぬときには謙遜の言葉をのこして、というのかもしれないが、それは平田大角篤胤に、まったくふさわしくない泣き言じゃないか！

天狗小僧寅吉がそんな泣き言を聞けば、泣きたくるではないか。

寅吉は平々凡々たる僧侶か、医師になって天保改革の嵐のなかの江戸で生きているらしいが、それはそれ、湯島天神男坂下の気吹舎で篤胤とともに幽界をめぐるって議論にふけた日々を忘れるはずはない。

寅吉は忘れるかもしれないが、篤胤が忘れるのは許されない。

あこのころの寅吉と、いまの寅吉がぜんぜん別の時間を生きているのだということ、しかも人間は複数の時間を同時に生きるのが可能なのだということ、それを発見したのが平田篤胤なのだ。

気吹舎で寅吉が愛好してやまなかった天の磐笛に息を吹きこめば、この世が複数の時間で構築されている事実を、まず耳が気づくだろう。むしろかしいことではない。

(10章・終)

(大尾)

あとがき——平田篤胤は『仙境異聞』を楽しんで書き、ぼくは楽しく読んだ

天狗の顔は酒に酔っぱらったみたいに赤くて、鼻は人間の鼻の数倍も長いといわれている。ただし、人間とちがって天狗の鼻の場合には「長い」とは言わずに「高い」ということになっている。

「あいつは鼻が高い」といわれた人間は「傲慢なやつだ」と非難されているのだが、天狗が「鼻が高い」といわれても「傲慢な天狗」を意味しているわけではない。

天狗は悪戯(いたづら)をする。

人間を、それも大人よりも子供を好んで誘拐することがあるが、天狗と日本人の付き合いのなかでは、それは仕方のないこと、許容範囲として黙認されてきた傾向がある。

おおざっぱなところをいえば、五十歳ぐらいまでのひとは天狗という言葉は珍しくもなんともないもの。天狗という言葉は、あっちにもこっちにも、ありふれていた。

大衆的な雑誌の、どうということもないページに天狗の絵は登場していたから、言葉だけではなく、天狗の絵画的イメージも氾濫していたといえる。小説や映画の「鞍馬天狗」の影響もおおきかったのだろう。明治という時代と付き合ったひとは、「天狗」ブランドのタバコのイメージと香りは切り離せないものだったはずだ。

天狗という言葉を知っていても、「天狗とは何であるか？」と深刻に考えるひとはすくなかった。天狗は深刻な思考の対象になるべき性質のものではないとして、どちらとはいえば軽蔑の対象になっていた。

どこかの家の子供が行方不明になった、天狗にさらわれたらしい、そりゃ大変という事態はしばしば発生していた。

天狗は子供をさらうものであるとなれば公的な権力が放置しておくはずはないのだが、警察が児童誘拐の容疑者として天狗狩りをや

ったという事例は聞いたことがない。

天狗は存在すると信じるのと、社会の治安を維持するために天狗退治は必要不可欠だとするのは別のことだというのが日本人の共通の天狗観だったと言っている。天狗は存在する、それはそれで差し支えないではないかという姿勢でもある。

だが、それとは別に、天狗の意味を深く、重く考えている少数者があつた。平田篤胤が典型だ。

篤胤はなによりも先に、自分自身の「安心」ということを深刻に考えていた人物だった。

そのつぎに、身分や職業といった環境の条件の差をとりはらったところで、日本人総体の「安心」を深刻に考えていた。どうすれば「安心」できるのだろうかと自問自答しつづけた。

その結果として、死後の魂の行方さえ分かっていたら誰でも安心して生きていられるはずだという前提に立った。

そして、篤胤は真理を発見したのである。

「人間の魂は死後は幽界に行く」

この篤胤の見解にたいして、どういう反応をしめすかによって、日本人は二タイプに別れる。

幽界なんていうものがあるはずはない、あるというなら証拠を出して見せろと迫ってくるのがAタイプ。幽界とか、あの世とか、言葉は何であれ、魂の行方がきまっていれば安心できるとするのがBタイプ。

ぼくはBタイプだから、篤胤の『仙境異聞』をこころゆくまで楽しんで読み、友人知人にも「ぜひ一度は読んでみなさいよ」と推薦したい。そういう気分です、このささやかな本を書いてきた。

「証拠を見せろ」というAタイプは強烈であるから、篤胤は恐れ入ってしまうのかというと、そんなことにはならない。反論を予想し、しっかりと先手を打っている。それが「天狗の出現を待つころ」なのだ。

幽界は見えない、見えないからこそ幽界なのだ。見えないけれども、連絡というか、コミュニケーションというか、そういうものがある、それが天狗なのだ。篤胤は考えた。天狗は幽界の使者であり、なにかという不安に陥る人間にたいして、「あなたがたの死後の魂はこちら（幽界）へ来るのですから、それまでは安心して、たっぷり生きてくださいよ」とサインを送ってくる。

ときどきでかまわない、天狗さえ姿を見せてくれれば幽界の存在は証明される。しかし篤胤は学者をもって任じているから、天狗について、ふつうのひとよりは多く、くわしく知っているべきだと自分に課題を負わせていた。そういう篤胤の姿勢に共鳴して登場したのが寅吉少年だ。

人間の魂は幽界へ行く、だから安心して生きられる——とはいっても、のんびんだらりと生きてゆくだけでいいのだと篤胤がいつているわけではない。

自分の魂を大切にすると、大切にしないひと、どちらも一様に幽界に行けるということになる、これはやはり不公平というものだ。

どうやら篤胤は、自分の魂を大切にそだてないひとがいるはずはないと思いきんでいたらしいのだが、そこに篤胤の「ひとの良さが偲ばれる」。

自分の魂を大切にそして、そだてる。これは天狗にたいして「いずれ、よろしく」と合図を送っていることだ。そのあたりのことについては、いつも観察を怠らないのが天狗であるはずだ。

人間であれば誰にでも魂がある、なんていうものではないことを教えてくれるのが天狗だ。ちかごろ天狗の姿を見かけることがすくなくなっただのは、自分の魂を大切にそだてる人間が減少したのに関係があるかもしれないと思われる。

自分の魂を大切にそだてようと悪戦苦闘している個人の想像力、それが天狗登場にもっともふさわしい現場だ。

Aタイプは「幽界がある」という証拠を見せる」と迫ってくるわけだが、篤胤はどうか幽界はどうか、証拠の用意がないわけではない。五条天神で店を出していた老人は、売れ残りの商品から自分の身体まで、すべてをまとめてちいさな壺のなかに納めてしまう術を知っていた。

じつをいえば、あの壺のなかに幽界があつたのだ。

壺のなかに幽界があるのだと答えると、Aタイプのひとは、それなら面積や地番表示はどうなっているのかと迫ってくるだろうが、こうなると篤胤としては答える手がない。幽界は不動産ではないからだ。

幽界や仙境の存在を信じるも信じないも、みなさんのご自由、お好みだが、あちらには幽界の使者としての出番を待ちかねて手ぐすねひいている天狗がいること、それだけは信じてほしいものと、切にお願いする。

天狗が姿を見せなくなったのは天狗が絶滅したからではなくて、こちらの世に天狗を歓迎する姿勢がなくなってしまったからなのだということ、これは真実だ。

参考書

- 『平田篤胤全集』（内外書籍出版）
- 『平田篤胤研究』（渡辺金造・六甲書房）
- 『平田篤胤』（田原嗣郎・吉川弘文館）
- 『平田篤胤とその時代』（沖野岩三郎・厚生閣）
- 『平田篤胤 伴信友 大国隆正』（田原嗣郎他編・『日本思想大系50』・岩波書店）
- 『平田篤胤』（相良亨編・『日本の名著24』・中央公論社）
- 『別冊・太陽—日本の妖怪』（1987年春号・平凡社）
- 『海鳴りの底から』（『堀田善衛全集』・筑摩書房）

天狗小僧寅吉は「寅年の寅の月の寅の日の寅の刻」に生まれたから寅吉と名を付けられたそうだが、ほくもまた寅の年（昭和_三・戊寅）の寅の月の寅の日の寅の刻に生まれたのだと、母からしばしば聞かされた。

この書が世に出るについては読売新聞社出版局の古市さん、尚文社の芦沢孝作さんの協力をいただいた。ありがとうございます。

1996・盛夏

高野 澄

© takanoki yoshi